



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	津波被災地出身の若者の意識調査にみる「つながり」のあり方：宮城県石巻市北上町を事例として
Author(s)	佐々木, 薫子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	修士(文学)
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/76871
Type	master thesis
File Information	2019ksasaki.pdf



令和元年度 修士論文

津波被災地出身の若者の意識調査にみる「つながり」のあり方
ー宮城県石巻市北上町を事例としてー

文学研究科 人間システム科学 専攻

指導教員 宮内 泰介

学生番号 05183071

氏 名 佐々木薫子

目次

1. 序論	4
1-1. 背景と目的	4
1-2. 地元志向の高まり	5
1-3. 若者の地域移動	6
1-4. 本研究における「つながり」	8
1-5. 北上町における若者の意識把握の必要性	9
1-6. 研究方法	9
1-6-1. 若者の実態を描くために	9
1-6-2. アンケート調査	10
1-6-2-1. 対象者の選定と調査方法	10
1-6-2-2. アンケート内容	11
1-6-3. インタビュー調査	12
1-6-3-1. 対象者の選定と調査方法	12
1-6-3-2. インタビュー内容	13
1-7. 研究対象地について	13
1-7-1. 北上町の概要	13
1-7-2. 北上町の集落と相互扶助	14
1-7-3. 東日本大震災の影響	15
1-8. 本論文の構成	18
2. アンケート結果	19
2-1. 回答者属性	19
2-2. 東日本大震災の被災程度	20
2-3. 北上町との関わり	22
2-4. 理想の居住地条件	24
2-4-1. 理想の居住地条件の単純集計	24
2-4-2. 理想の居住地条件と属性の関係	25
2-5. 地元志向	27
2-5-1. 地元志向の単純集計	27
2-5-2. 地元志向と属性の関係	28
2-5-3. 地元志向と北上町との関わりとの関係	30
2-6. 小括	32

3. インタビュー結果.....	36
3-1. 対象者について	36
3-1-1. 対象者の属性、基本情報.....	36
3-1-2. 対象者の居住移動、経歴、特徴.....	37
3-2. 分析方法	44
3-2-1. 若者と北上町のつながりの媒体を抽出するコーディング	44
3-2-2. コードの分類とコードの関係性の分析	45
3-3. 分析結果	45
3-3-1. 友人・知人を媒介とした若者と地域のつながり	45
3-3-1-1. 友人・知人と若者の関係の実態	45
3-3-1-2. 友人・知人と若者の関係の形成要因	47
3-3-1-3. 友人・知人が若者と北上町のつながりに果たす役割	49
3-3-1-4. 友人・知人を媒介に若者と北上町のつながりを維持・充実させるうえでの課題	50
3-3-2. 近所を媒介とした若者と地域のつながり	50
3-3-2-1. 近所と若者の関係の実態	50
3-3-2-2. 近所と若者の関係の形成要因	52
3-3-2-3. 近所が若者と北上町のつながりに果たす役割	54
3-3-2-4. 近所を媒介に若者と北上町のつながりを維持・充実させるうえでの課題	56
3-3-3. 「家」を媒介とした若者と地域のつながり	56
3-3-3-1. 「家」と若者の関係の実態.....	56
3-3-3-2. 「家」と若者の関係の形成要因	59
3-3-3-3. 「家」が若者と北上町のつながりに果たす役割	61
3-3-3-4. 「家」を媒介に若者と北上町のつながりを維持・充実させるうえでの課題.....	61
3-3-4. 「イエ」を媒介とした若者と地域のつながり	62
3-3-4-1. 「イエ」と若者の関係の実態.....	62
3-3-4-2. 「イエ」と若者の関係の形成要因	65
3-3-4-3. 「イエ」が若者と北上町のつながりに果たす役割	66
3-3-4-4. 「イエ」を媒介に若者と北上町のつながりを維持・充実させるうえでの課題..	66
3-3-5. 家族を媒介とした若者と地域のつながり	67
3-3-5-1. 家族と若者の関係の実態.....	67
3-3-5-2. 家族と若者の関係の形成要因	68
3-3-5-3. 家族が若者と北上町のつながりに果たす役割	69
3-3-5-4. 家族を媒介に若者と北上町のつながりを維持・充実させるうえでの課題	70
3-3-6. 先祖を媒介とした若者と地域のつながり	70
3-3-6-1. 先祖と若者の関係の実態.....	70
3-3-6-2. 先祖と若者の関係の形成要因	73
3-3-6-3. 先祖が若者と北上町のつながりに果たす役割	73

3-3-6-4. 先祖を媒介に若者と北上町のつながりを維持・充実させるうえでの課題	73
3-3-7. 自然を媒介とした若者と地域のつながり	74
3-3-7-1. 自然と若者の関係の実態.....	74
3-3-7-2. 自然と若者の関係の形成要因.....	76
3-3-7-3. 自然が若者と北上町のつながりに果たす役割	78
3-3-7-4. 自然を媒介に若者と北上町のつながりを維持・充実させるうえでの課題	80
3-3-8. 歴史・文化を媒介とした若者と地域のつながり	82
3-3-8-1. 歴史・文化と若者の関係の実態.....	82
3-3-8-2. 歴史・文化と若者の関係の形成要因.....	84
3-3-8-3. 歴史・文化が若者と北上町のつながりに果たす役割	85
3-3-8-4. 歴史・文化を媒介に若者と北上町のつながりを維持・充実させるうえでの課題	86
3-3-9. 思い出を媒介とした若者と地域のつながり	86
3-3-9-1. 思い出を介した若者と北上町のつながりの実態とその形成要因	86
3-3-9-2. 思い出を媒介に若者と北上町のつながりを維持・充実させるうえでの課題.....	91
3-4. 9つの媒体同士の関係性	92
3-5. 小括.....	93
4. 総合考察.....	98
4-1. 本研究における「若者と地域のつながり」とその先に目指すもの.....	98
4-2. 若者と地域の多様なつながりの実態	99
4-3. 若者と地域のつながりにおける家族の役割と社会的つながりの重要性.....	101
4-3-1. 若者と地域のつながりにおける家族の役割と重要性.....	101
4-3-2. 北上町における社会的つながりの重要性.....	102
4-4. 成長過程における地域とのつながりの育み方.....	103
4-5. まちの柔軟さと寛容さの必要性	104
4-6. 東日本大震災の中の若者	107
4-7. 復興まちづくりのあり方ー地域と若者のつながりの視点からー	109
5. 結論.....	110
謝辞	112
参考文献	112
参考資料	113
参考 URL	113
資料（アンケート調査票）	116

1. 序論

1-1. 背景と目的

本研究は、東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県石巻市北上町を対象とし、対象地出身の若者の意識調査から、①若者がどのように出身地域とつながっているか、②そのつながりを育むものは何か、さらに、③若者と地域のつながりにおける課題は何か、を明らかにし、地域と若者のつながりを維持・充実させるまちづくり及び復興まちづくりについて検討することを目的とする。

近年、若者の地元志向の高まりが各方面で指摘されており、若者の実態を進学や就職率、あるいは居住移動の把握によって明らかにしようとする研究や報告が目立つ（例えば吉川，2001；李・石黒，2008；乾・本田・中村，2017）。行政は「地方創生」を目玉政策に掲げ、とくに人口減少が著しい地方の自治体はあらゆるかたちで地域の魅力を発信し、若者の UI ターン促進に努めている。しかし、これらの施策の前提となる若者の地元志向やそれを育む要因を把握する試みは乏しい現状にある。実際、地元を離れる選択をした若者の中には、必ずしも地元が嫌いで離れた若者だけではなく、「回帰すべき場所がある」や「一度離れてもいずれは地元に戻ってくるだろう」というように、地元に対して肯定的な思いを抱きつつ離れようとしている若者が存在している（三上，2016）。若者の地域移動を考慮する上では、このような地元への志向そのものに目を向け、その育み方について検討すべきである。さらに、この地元回帰志向は東日本大震災の被災地でも確認されている。たとえば、「河北新報」の記事「Q『女川 これからも住みたい』中学生 9 割『YES』復興通じ郷土愛育つ」（2018 年 8 月 17 日朝刊）では、東日本大震災の被災地である宮城県女川町において、2018 年度策定の町発展計画に中学生の意見を取り入れるために同年 5 月に町唯一の中学校、女川中で実施したアンケートの結果が報じられている。それによると、アンケートは 131 人を対象に実施し、123 人から回答を得ており、将来、町内に居住する意思を示した生徒は 9 割にのぼった（「ずっと住みたい」：17%、「就職の時には戻りたい」：11%、「いつかは戻りたい」：62%）。また、町を離れる意思を示した生徒は 11%で、その理由は「就職や進学の実機を上げたい」、「(町内に) 遊ぶ場所がない」などだった。このことは、自然災害の被災地においては若者の地元志向が震災及び復興の過程で育まれた可能性を示唆している。したがって、本研究の対象地においても被災地としての性格を踏まえたうえで、若者の意識、およびその背景を把握する必要がある。自然災害の被災地及び被災者を含んだ若者に焦点を当てた研究は見当たらず、本研究の最大の意義はその点にある。

また、本研究の対象者の中には、元の自宅が「全壊」や「大規模半壊」の判定を受け、町外への転出を余儀なくされた若者がいる。従来の研究は地元に着している若者のみを扱っているものや、自らの意志で居住選択した若者のみを扱っており、自分の意志とは無関係に居住移動し、出身者でありながらそこに住まいが無い立場の若者は扱われてこなかった。また、北上町は元来、ムラのなかで組織を構成し、生活互助慣行や協同慣行における決まりをつくって助け合いながら生活を営んできた歴史がある。人と人とのつながりは強固な地域であったが、人

口減少および東日本大震災によるコミュニティ再編によって、その基盤は崩壊してしまった。これはすなわち、若者たちが成長期に依存してきた「つながり」の崩壊を意味する。これらの現状を踏まえると、本研究の対象には、従来の研究で扱われてきた「つながり」の枠組みにはおさまらない「つながり」の多様な実態があるはずである。窪田（2012）は、条件不利地域における若者が「地元」という空間から抜け出し、他出した友人と行き来するなど「解放性のあるつながり」を保とうとしていることを明らかにしている（窪田，2012）。これらを踏まえ、本研究では地域と若者の「つながり」の多様な実態を検証する。さらに、被災地としての性格を考慮したうえで「つながり」が育まれた背景を探ることができれば、近年、大災害が頻発する日本各地に重要な視座を与えることができるだろう。

本研究では、より包括的な議論を目指し、アンケート調査とインタビュー調査を採用するが、他出者を含めた若者の多様な居住移動の実態把握や、「つながり」の多様性および複雑性を描き出すうえで、インタビュー調査による質的データの分析を重視する。

1-2. 地元志向の高まり

ここで改めて、地域と若者に関する先行研究及び調査報告を参照したい。まず、近年、地方の若者の地元志向が高まっている実態がいくつかの調査や研究で証明されている。例えば、文部科学省の「学校基本調査」を見てみると、都内の大学入学者に占める地方出身者の割合が年々低くなっていることが分かる。2019年度の都内の大学入学者は約15万人で、そのうち地方出身者¹は1万9千人である。これは、その約10年前の2010年度の地方出身者数2万2千人から減少していることが分かる²。全体の入学者数に占める地方出身者の割合も15.5%（2010年度）から12.9%（2019年度）に減少しており、さらにさかのぼると2000年度は17.4%、2005年度は16.4%、と年々地方出身者の割合が低くなっている。また、いくつかの都道府県では若者へ就職希望地についてのアンケートを行っており、県内にとどまる若者が増加していることが報告されている。例えば、2015年に秋田県で県内企業の新入社員を対象に実施された調査では、県外企業への就職を考えたことがある人の割合が1999年度にこの質問を設けて以来、初めて5割を切った。調査主体の秋田経済研究所は「最近の若者は地元志向が強い」と述べ、「県内の雇用環境が改善し、地元で希望職種につきやすくなっていることが背景にある」と指摘した。加えて、「現在の職場で定年まで働きたい」という新入社員の割合も過去最高になり、安定志向が強まっていることが指摘できる³。また、辻（2016）の研究では、東京と愛媛県松山市の若者で地元志向の意識を比較している。両者の生活全般の満足度や居住地域への愛着は差がなかったことを明らかにし、辻は、いわゆる「上京志向」が終焉に向かい、「地元志向」がすでに高まっている現状を指摘している。

¹ 地方出身者は、関東地方を除く道府県出身者を指す。

² 文部科学省の「学校基本調査」において、2019年の10年前にあたる2009年の統計では、大学入学者を出身高校の所在地別に集計したデータがなかったため、2010年データを使用。

³ 朝日新聞「就職の地元志向、鮮明 『県外』初の5割割れ」（秋田県版2015年5月14日朝刊25面）より引用。

轡田（2017）によれば、若者研究はこれまで三大都市圏に居住する「都市中産階級」に焦点があてられる一方で、地方都市や農山村の若者は一貫して特殊事例的な扱いを受けてきた。では、なぜ若者の地元志向が高まり、地方暮らしが着目されるようになったのか。轡田はこの背景について2つの理由があるとしている。一つ目は、若者をとりまく「新しい貧困」問題により、親世代よりも階層上昇を望めない状況が一般化するなか、物質的な豊かさによって特徴づけられる「都市中産階級」的なライフスタイルのオルタナティブとして、地方暮らしの幸福が注目を集めるようになったためである。これに関連して、近年の不景気が若者の地元志向や安定志向に影響を与えているとの指摘もある⁴。轡田は、したがって、若者論の文脈において従来は「物質的豊かさ」が鍵となっていたが、近年は地方におけるコミュニティ資源、すなわち「つながり」がキーワードになったと指摘している。1990年以降、人口減少の進行によって地域課題が山積するなか、地域住民のつながりを活性化させ、ソフト面の充実によって地域の魅力を増やそうとする「地域づくり」が盛んになったのもそのためだと指摘している。若者の地元志向が高まった第二の理由として轡田は、近年の消費社会化やウェブ社会化によって、東京から発信される都市中産階級の文化のヒエラルキーが若者にとって特別な意味を持たなくなっているためだと指摘している。事実、地方の暮らしが豊かになった現状は先述した地方の雇用環境の充実化をはじめ、インフラ生活環境の豊かさなど、様々な側面から検証されている。

1-3. 若者の地域移動

近年、この「地元志向」は若者の地域移動研究の分野においてもキーワードとなっている。地域移動研究には「トラッキング」という概念があり、中学時代までの成績によってどの高校のどの学科に入学するかが決まり、それにより将来の進路が陸上競技のトラックに振り分けられるように定まっていくとされる⁵。従来はそのトラッキングを決める要素として学業成績や高校のタイプ、ランク付けが重視されてきたが、1990年代半ばから新たに「地域」が進路決定の軸になり得るとする議論が出てきた。例えば、吉川（2001）は、島根県東部の山間地域にある普通科高校の卒業生の追跡調査を行い、進学や就職に伴う地域移動の要因を描いた。この対象地では「大学入試の難易度ランカー辺倒の単純な判断ではなく、例えば県内の地元国公立大学に進学し、そのまま県内で初職に就くという地域移動のコース優先の判断で進路を決めていった」若者の存在が明らかになったことから、吉川は「現代日本の地方県においてアカデミック・トラックを補完している、異なる次元の水陸付け」、すなわち“ローカル・トラック”の概念を打ち出した。ローカル・トラックの議論においては、参入・退出の自由な大都市圏ではなく、不

⁴ 朝日新聞「学びを語る 東大特任教授（地域医療論）上昌弘さん 昔からある圧倒的な傾向」（2013年10月9日朝刊32面）によると、東大特任教授の上はインタビューの中で、若者の地元志向が強まっている原因は若者が消極的になったことではなく、不景気の影響とみるべきだと指摘している。また、多くの人は身近にいる人の影響を受けて進路選択するため、地元で学び、地元で就職する人が多い傾向は昔からあることを指摘している。

⁵ 藤田（1980）は、アメリカの教育社会学者J.E.ローゼンバウムが提唱した「トラッキング」の概念について、「実質的にはどの学校のどのコースに入るかによってその後の進路選択の機会と範囲が限定されることを指す」としている。

可逆的な人口流出の実態がある“地方”のトラッキングが重要な論点になるとされており、吉川は地域移動のタイプを(1) 県外または県内で大学進学し、卒業後は県外に就職する「都市定住型」、(2) 県外に進学し、卒業後に県内に戻って就職する「Jターン型」、(3) 県内に進学し、卒業後に県内で就職する「県内周流方」、(4) 県外または県内に進学し、卒業後により地元に近い郡内に戻って就職する「Uターン型」の4パターンに分類している。

一方、三上(2016)は、この地域移動パターンを参照しながら地域移動とソーシャル・キャピタルの関係性を論じている。三上は北海道の高校生35人にヒアリングを行い、卒業後の進路や将来の人生設計、またその背景にある地元への意識と照らし合わせながら、(A) 道外志向ないしは「キャリア中心の移動志向」、(B) 北海道志向、(C) 地元定住志向、(D) 地元回帰志向の4タイプに分類した。三上は、そのなかでも(D)の地元回帰志向に期待を寄せ、「地元を離れたい」と主張する生徒のなかに、地元に対して肯定的な思いを抱きつつ離れようとしている生徒の存在に着目している。このことから、子供たちをとりまく周囲は、地元を飛び出るか、それとも留まるか、という単純な二者択一を若者に迫るのではなく、「回帰すべき場所がある」や「一度離れてもいずれは地元に戻ってくるだろう」という回帰志向をいかに育み励ますかを検討すべきだと論じている。

先に触れた宮城県女川町の事例では、中学生の9割が、将来は町内に居住する意志を示していることが報告されている⁶。9割の内訳は、「ずっと住みたい」が17%、「就職の時には戻りたい」が11%、就職などで町を離れても「いつかは戻りたい」が62%だった。居住希望の生徒からは「古里に少しでも貢献したい」、「将来どんな女川になるのか気になる」などの声が寄せられたという。この報告は、若者の地元志向が震災及び復興の過程で育まれた可能性や、三上の指摘する地元回帰志向の可能性を示唆しているが、この地元志向が育まれた背景は明らかになっていない。

先述した三上の指摘は、表面化している若者の実態のみを捉えるのではなく、地元への志向に目を向け、それを育む重要性を示唆するものである。近年、日本では若者の地方定住やUIターンの促進策が喫緊の課題であることを提起した「増田レポート」(増田, 2014)を皮切りに、地方創生が重要政策として掲げられている。特に、人口減少が著しい地方の自治体は、さまざまなかたちで地域の魅力を発信し、若者のUIターンを促進しようとしている。しかし、これらの施策の前提となる若者の志向そのものを把握する試みは乏しい。加えて、自然災害の被災地においては、被災地としての特徴を考慮したうえで若者の地元志向ならびにそれを育む要因を分析する必要がある。

一方、若者の地域移動には他にも様々な規定要因があることを念頭に置かなければならない。白石・羽渕(2016)の研究は、従来のローカル・トラック研究であまり扱われてこなかった条件不利地域の事例地として青森県下北郡北通を取り上げ、対象者の進路の多様な背景について論じている。白石・羽渕は、対象者として普通科高校の卒業生で現在40から60代の19名を選定し、インタビューを行った。その結果、地域間移動は経済的要因や契機(opportunity)によっ

⁶ 河北新報「Q『女川 これからも住みたい』中学生9割『YES』復興通じ郷土愛育つ」(2018年8月17日朝刊)

てのみ説明されるものではなく、常に各自の念頭にある潜在的な移動要因も関係していることを明らかにし、白石・羽瀧はこの複合的な性格をもつ移動要因を“考慮事項 (issues)”と呼んだ。例えば、条件不利地域に定着するには、就職先と配偶者の選択範囲に限定がかかることが、多くの対象者の念頭にあった。高卒で地元就職の場合、両親を継いで漁師になる事例は少なく、残るは公務員か漁協、あるいは数少ない地元企業に限られる。したがって、高卒者の多くはそれを念頭に県外に他出しようとしている。また、結婚相手の考慮事項は男女差があり、女性は他出先で意識的に同郷者を配偶者として選ばなかった場合、夫方優先の居住選択で地元には戻らない傾向があるが、それに対して男性はUターンしやすいことが各自の念頭にあることが分かっている。この考慮事項は、地域や家族内の事情が反映された移動要因であり、条件不利地域の社会減の要因を探るうえでは重要な枠組みだと考えられる。したがって、本研究も白石・羽瀧にならい、“対象者が今後の人生を考えるうえで常に念頭に置く要素”として、考慮事項という言葉を使用したい。

これらの地域移動に関する先行研究からは、若者の意識把握における質的データの重要性と、地域内の若者だけでなく、地域から他出した若者の意識も把握する必要性が示されている。実際、地域間移動の研究は人口学の分野で扱われることが多く、研究蓄積は多いが、ほとんどがマクロなデータで把握する手法を採用している（石黒，2012）。また、石黒（2012）によれば、移動した者と移動しなかった者を対比させるかたちで、現代の若者の地域間移動を研究した事例は少ない。本研究の対象地では、津波により転出を余儀なくされた対象者もあり、その移動パターンは多様かつ複雑である。移動の実態把握と他出者も含めたあらゆる立場の若者に焦点を当てることは、若者と地域の関係を探るうえで欠かせないといえる。

1-4. 本研究における「つながり」

これまで、若者の地域間移動と地元志向について触れてきたが、若者と地域の関係は「居住」というかたちに限られたものではない。先述したように、本研究の対象者は自らの意志で居住選択している若者だけでなく、被災によりやむを得ず町外へ転出した若者もいる。したがって本研究においては地域と若者の関係、あるいは、地域と若者をつなげているものを様々な視点から考慮する必要がある。

その地域と若者の「つながり」のあり方を考えるうえで一助となるのが、窪田（2012）の研究である。窪田は、北海道夕張市で働き手として地元根づいている若者たちの地元志向を把握し、若者たちが夕張をどのように受け止め、地元とどうつながっていかようとするのかを明らかにした。そのなかで、窪田は「地元」という空間から抜け出し、地元外に出て行った友人と行き来するといった「解放性のあるつながり」を能動的に維持しようとする若者の存在を明らかにした。窪田の研究は、“地方の地方”すなわち条件不利地域における若者の新たなつながりのあり方を見出し、「つながり」の概念の発展に貢献したといえよう。

本研究においても、既往研究が扱ってきた「つながり」の枠組みにはおさまらない多様な「つながり」の実態があると考えられる。条件不利地域としての性格や自然災害の被災地としての

性格を踏まえた若者研究はなく、本研究は災害大国としての側面をもつ日本各地においても、そのまちづくりのための重要な視座を与えることができるだろう。

1-5. 北上町における若者の意識把握の必要性

本研究の目的に加え、本論文によって若者の意識を表面化することは北上町のまちづくりにも大きく貢献できると考える。北上町では住民によるまちづくり活動が活発だが、若者の意識が表面化しにくい現状があるからだ。石巻市北上地域まちづくり委員会によるアンケート⁷では、北上町における全世代の男性が、女性より「地域活動に際し、女性や若者の声の反映が必要だ」と思っている割合が高いことが分かった。とくに、役員を務める 60～70 代男性の回答が 7 割で高かった。一方、20～30 代の若者自身も若者や女性の声の反映の必要性を感じているが、10 代を含めた若者は概して地域活動への関心や参加度は低い傾向にあることがわかり、地域活動の参加が特定の年代（40～70 代）に偏っていることが分かっている。委員会は、これらの結果を受け、これまでの地域活動のあり方は世代の感覚に合っておらず、若者の声を反映する機会を設けることで地域活動への参加を促すことができると考えた。さらに、地域活動への関わり方に関して、若い層との直接の対話を通じて、理由を深掘りすることが重要だと指摘した。こうした状況の中、若者の意識を把握した本研究は、北上町のまちづくりにおいても貢献できる。

1-6. 研究方法

1-6-1. 若者の実態を描くために

本研究では、吉川（2001）や三上（2016）が既に実践しているように、アンケートによって得られた量的データと、インタビューによって得られた質的データを組み合わせて若者の実態を明らかにする。計量的に若者の傾向を把握する一方で、具体的にどのような現象が起きているのかを把握することができ、より立体的に若者の実態を描き出すことができると考える。

また、地域と若者の議論においては、若者意識の多様性・複雑性が十分に考察されていない現状がある。例えば、辻（2016）によればこれまでの若者文化のとらえ方は一元的でなおかつ場当たりのであり、巨視的に、若者をすべて一元化してとらえてしまうのではなく、あるいは微視的に、個人的な話に落とし込むのでもなく、何らかの文脈を定めたうえで「若者の多元性」を捉えていく必要がある。したがって本研究では、傾向を明らかにする目的でアンケート調査を、つながりの多様性と背景を明らかにする目的でインタビュー調査を行い、後者の分析結果

⁷ 石巻市北上地域まちづくり委員会の自治システム検討・準備分科会が 2018 年の 11 月から 12 月にかけて、中学生以上の北上町の全住民を対象に行ったアンケート。当時の中学生以上の人口は約 2,240 人で、進学や就職で居住実態のない人などを除き 1,822 通を配布し、1,679 通を回収した。用紙の配布と回収は住民有志が行い、回収率は 92%に上った。結果報告は、北上町を拠点に活動する一般社団法人ウィーアーワン北上の Facebook ページに記載されている。アンケートでは、少数派である若者らの意見もくみ取ろうと 10～80 代の世代別に集計されている。

に重点を置くこととする。既往の若者研究でこれらを組み合わせたものは少なく、また、質的データの分析が不十分なものも目立つ。本研究では、包括的かつ個別的に若者の実態を描き出すことを大きな目的とする。

1-6-2. アンケート調査

1-6-2-1. 対象者の選定と調査方法

アンケート調査は、北上中学校を卒業した 19～26 歳の若者を対象に、2019 年 1～4 月にかけて行った。彼らは 2011 年 3 月 11 日時点で小学校高学年、中学生、高校生だった者たちである。対象者を高校生以下とした理由は、東日本大震災が起きるまで石巻管内に住み続けてきた者たちであり、また、北上町内に高校が無いことから、ほとんどの人が北上町内の自宅から石巻管内の高校に通っていたと考えられるからである。つまり、東日本大震災時に「北上町で暮らしていた」という意識が強い対象者であり、つながりの変化を見る上では、対象者は一定の共通した条件を持っているといえることができる。また、19 歳以上であること理由は、高校卒業後の進路選択の経験をもち、過去・未来を含む自身の人生において、北上町を客観視できる年齢であると判断したからである。

対象者の母集団は表 1-1 の通りである。対象者の選定は、この中から筆者自身の知り合い⁸を軸に雪だるま式で行い、その結果、計 68 人にアンケートを郵送した（2019 年 1 月）。同年 4 月までに 58 人から返信があり、有効回答を得た（回収率 85.3%）。これは母集団のおよそ 21%に該当し、信頼度 95%のとき誤差率は 11%となる。なお、雪だるま式による選定を行っているため、筆者自身の同級生の割合がやや多くなった（表 2-1 参照）。ただし、対象者の選定の際は、できる限り学年、学区、集落、現住所で偏りが生じないよう心がけ、恣意的な抽出は行っていない。

表 2-1 アンケート調査対象者の母集団

調査開始時の年齢	東日本大震災当時の学年	卒業年度	卒業生数	
19	小学5年生	2014	36	
20	小学6年生	2013	29	
21	中学1年生	2012	33	
22	中学2年生	2011	28	
23	中学3年生	2010	40	
24	高校1年生	2009	46	
25	高校2年生	2008	31	
26	高校3年生	2007	29	9 ※
計			281	

※2007年度卒業生は北上中学校と相川中学校が統合前の卒業生であり、それぞれの卒業生を表記している。
（石巻市HP「市民の方へ」教育委員会＞学校一覧＞私立学校在籍者数一覧」参照）

⁸ 筆者は、対象地の北上町出身であり、2010 年度卒業生である。

1-6-2-2. アンケート内容

【基本情報・被災状況】

属性を含む基本情報の把握のため、名前、性別、年齢、現住所、職業（9項目から選択）、現住所における同居人、出身学区、出身集落、兄弟・姉妹の有無と構成、車所有の有無、年収（8項目から選択）、町外在住経験の有無（北上町内在住者のみに質問）に関する質問項目を設けた。また、東日本大震災の被災程度を把握するため、家屋の被災程度とその後の修繕・新築状況に関する質問項目を設けた。家屋の被災程度のカテゴリーは、震災当時に石巻市が発行した罹災証明書の判定を参照し、損壊なし、一部損壊、半壊、大規模半壊、全壊とした。また、親族のなかに震災で犠牲になった方がいるかどうか、およびその続柄について把握した。

【北上町との関わり】

北上町との直接的な関わりを把握するため、現在でも連絡を取り合う北上町出身の友人・知人の数と、北上町外在住者にのみ北上町への訪問頻度（7項目から選択）・目的（10項目から複数選択）に関する質問項目を設けた。

【地元志向】

対象者の北上町への意識的なつながりを把握するため、15項目の地元志向について5段階評価（5：とても思う、4：やや思う、3：どちらともいえない、2：あまり思わない、1：まったく思わない）で把握した。

地元志向の15項目は以下のような地域愛着に関する研究を参考に設定した。地域愛着はしばしば「人間と場所との感情的なつながり」と定義されるからだ。

質問項目は12項目の肯定的地元志向と3項目の否定的地元志向に分かれる。肯定的地元志向は、滝澤・櫻井（2018）が開発した尺度と、関口ら（2017）が調査で用いた尺度を参照し、作成した。滝澤・櫻井（2018）は、愛着が地域のまちづくり活動や健康づくり活動における重要な要因であるにもかかわらず、地域愛着の正確な測定方法が検討されていないことから、旧農村地域に住む55～74歳を対象にアンケートを行い、地域愛着を測定する尺度を開発した。尺度は[わきおこる地域・人への思い]、[かけがえのない地域]、[つながる安心]の3因子15項目で構成された。対象地域や質問項目の汎用性から妥当と考え、採用することとした。関口ら（2017）は、全国の18歳以上の男女を対象にウェブアンケートを実施し、「地元」の概念的・空間的な認識と特性を明らかにした。特定地域ではなく、全国的なアンケートを通して、多様な個人属性に応じた地元意識の傾向を把握することで、人々の「地元」に対する第一義的な認識が明らかになった。このアンケートで用いられた質問項目は、他出者や若者を想定した内容であるため、本研究でも採用した。なお、本研究においては、対象者が若者であること、他出者も対象としていること、津波被災地であることなどを考慮し、2つの研究から質問項目を援用する際には、若干のアレンジを加えた。一方、否定的地元志向の3項目は筆者自身が独自に考案した。地域愛着の研究において、否定的な項目が設定されているものは見当たらないが、本研究においては、若者の意識の多様性や複雑性に着目するためにあえてそれを設定した。

【理想の居住地条件】

三上（2016）の研究によれば、若者の地元回帰志向は将来的な居留意志に影響する。そこで、若者にとって北上町が居住場所としてどのように意識されているかを把握するため、「理想の居住地条件（全 25 項目から 5 つまで選択可）」をたずねた。25 項目は森田ら（2013）を参考に設定した。森田らによれば、生活質の評価は「利便性」、「安全性」、「コミュニティ」、「居住環境」、「水緑環境」の因子によって構成される。本研究でもこの因子を軸に 25 項目を設定した。加えて、対象者にとって北上町だけが有すると考えられる項目（「自分が生まれた場所がある」、「先祖の墓がある」、「思い出がある」）や、家族、友人などのソーシャル・キャピタルに関する項目も設けた。

1-6-3. インタビュー調査

1-6-3-1. 対象者の選定と調査方法

インタビュー調査は 2019 年 9 月から 10 月に、19 名を対象に行った（表 1-2）。対象者は、現住所の所在地を軸に選定した。アンケート結果から「北上町内」「北上町外石巻市内」「石巻市外宮城県内」「宮城県外」に区分し、それぞれから数人ずつ選定した。この際、アンケート調査票にメールアドレスを書いていただいた方に優先的に連絡をした。承諾いただいた方、かつ日程の都合が合った方にインタビュー調査を実施した。調査対象者は計 19 人で、調査日程と場所は表 1-2 の通りである⁹。調査はすべて筆者と対象者の 1 対 1 で行い、最短で 40 分、最長で 2 時間で行った。日程が同じ対象者が何組かあるが、同時には行っていない。なお、調査依頼をしたが、日程が合わず断られた人が 3 人、返答がなかった人が 1 人、「震災のことを話すと心が乱れてしまう」という精神的な理由で拒否した人が 1 人いた。

また、北上中学校は、表 1-1 から分かるように、1 学年 1 クラスの規模の小さな学校である。よって学年を超えた交流があり、アンケート及びインタビュー調査の対象者のほぼ全員が筆者と顔見知りである。インタビュー調査の対象者のうち、I、M、O 以外は以前に筆者と何らかの接触があった対象者である。

表 1-2 インタビュー調査の
日程と場所

対象者 ID	日程	場所
A	2019. 9. 1	石巻市内喫茶店
B	2019. 8. 31	〃
C	2019. 9. 1	〃
D	2019. 7. 6	〃
E	2019. 8. 19	〃
F	2019. 8. 31	〃
G	2019. 9. 22	〃
H	2019. 7. 7	塩釜市内喫茶店
I	2019. 8. 17	仙台市内喫茶店
J	2019. 7. 6	名取市内喫茶店
K	2019. 9. 21	仙台市内喫茶店
L	2019. 7. 1	〃
M	2019. 7. 2	〃
N	2019. 7. 3	山形市内喫茶店
O	2019. 9. 18	仙台市内喫茶店
P	2019. 6. 8	東京都内喫茶店
Q	2019. 10. 6	〃
R	2019. 10. 5	千葉県内喫茶店
S	2019. 10. 5	東京都内喫茶店

⁹ 以下、本論文では、インタビュー結果で語りを引用する時、日程と場所は記載しない。

1-6-3-2. インタビュー内容

インタビュー調査は、主に対象者のライフヒストリーと北上町とのつながりを把握する目的で、半構造化インタビューを行った。質問内容は、基本的に対象者のアンケートの回答内容に即しながら、その回答の理由・背景をたずねた。具体的には、まず、対象者の基本情報として進路・職業選択の背景、居住移動の経緯をたずねた。また、町外在住者には北上町との関わり方を友人・知人との付き合い、訪問目的、訪問頻度の面からたずねた。さらに、15項目の地元志向と理想の居住地条件について、なぜその評価・選択になったのかをたずねた。

1-7. 研究対象地について

1-7-1. 北上町の概要

ここで、対象地である宮城県石巻市北上町の概況について記しておく。北上町は宮城県北東部、北上川の河口に位置する地域だ。もともとは町制だったが、平成17年に近隣の1市6町が合併し、石巻市となった¹⁰。現在ではもとの1市6町にそれぞれ総合支所が配置されている。現在の人口は石巻市全体で142,766人、世帯数は61,587戸、そのうち旧北上町は2,337人で世帯数は950戸である。これは石巻市内の全7地域の中で、雄勝地域(1,216人)の次に少ない¹¹。また、北上町は大きく分けて3つの学区(相川、吉浜、橋浦)と約20の集落から構成されている(図1-1)。

北上町の特徴は、豊富な自然資源と固有の文化資源、また、それらを生かした生業の存在である。まず、自然の面では、エリアの大半を山林が占めており、イヌワシの生息地としても知られる翁倉山などが北側に連なる¹²。さらに東北最大の川である北上川の河口部に位置するため、地理的な条件のもと、様々な恩恵をうけている。その一つとして、日本有数のヨシ原を有しており、ヨシが風に揺れる音は1996年に「残したい日本の音風景100選」¹³にも選ばれている。野焼きや刈り取りなど、その風情ある景観だけでなく、ヨシ原は多くの野鳥や水生生物を育み、水質浄化にも役立っている。また、豊富な水資源を活かした農業や、河口部における漁業も古来より人々の生活を支えてきた。現在は、統計情報によると総農家は143戸で全世帯数の約15%が農業に従事し¹⁴、漁業従事者は196人で、人口のおよそ8%にあたる¹⁵。ただし、産業人口の多くは第2、第3次産業に従事しており、第1次産業における後継者の不足、高齢化

¹⁰ 石巻市 HP「市のプロフィール>市の概要>石巻市はこんなまち」参照。

¹¹ 令和元年11月現在。石巻市 HP「市政情報>統計情報>人口・世帯数(最新版)」参照。

¹² 石巻市 HP「市政情報>総合計画>基本構想・基本計画>石巻市総合計画2010年基本計画>第3編エリア別将来展望」参照。

¹³ 環境省による選定。環境省 HP「“残したい日本の音風景100選”パンフレット」参照。

¹⁴ 自給的農家、販売農家、専業農家、兼業農家をすべて足したもの。平成27年2月現在。石巻市 HP「市政情報>統計情報>統計書(第5章農林業 4.農林業センサス (1)農家数の推移)」参照。

¹⁵ 自営業者数と被雇用者数を足したもの。平成25年現在。石巻市 HP「市政情報>統計情報>統計書(第6章水産業 9.漁業センサス(1)漁業従事者世帯及び就業者数)」参照。

等の問題を抱えている¹⁶。一方、文化資源は、各集落に伝わる風習や神事をはじめ、女川集落や大室集落に伝わる神楽などがある。そしてこれらの文化資源や生業は、集落内の人々の相互扶助のもとに成り立ってきた。

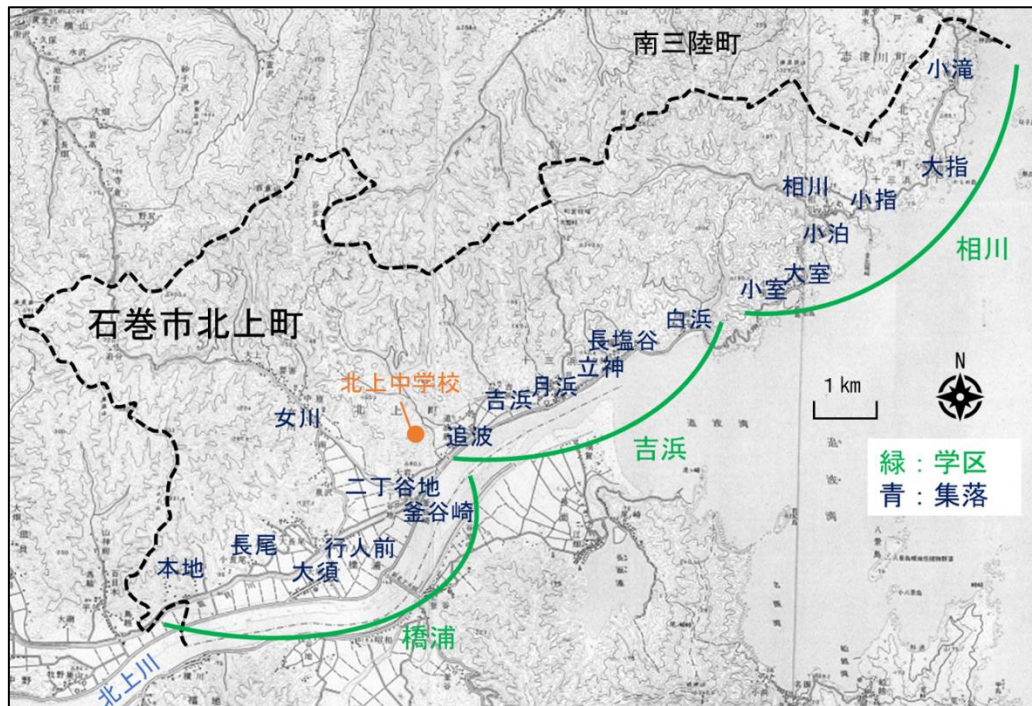


図 1-1 北上町の学区と集落
※国土地理院 25000 分の 1 の地図に筆者が加筆

1-7-2. 北上町の集落と相互扶助

北上町における現在の集落の成立は江戸時代の村落支配体制の開始にさかのぼる¹⁷。仙台藩の村落支配体制は寛永 17 年（1640）、仙台藩主伊達忠宗の時代に寛永検地によって確立し、現在の北上町においても村切が行われた。村切とは、本百姓の土地所持をもとに村落支配、年貢村請ができるように出作・入作（甲村と乙村の農民が互いの耕地に出向いて耕作すること）関係を整理したもので、北上町では橋浦、長尾、女川、十三浜村の村境が設けられた。この村切は自然地形に応じて区画されたものであり、地域的にも共同体の原型が作られたといえる。そして、この行政上仕切られた村の中で、村人たちは生産活動や生活の互助をするため、生活共同体を確立していった。それが現在の集落となった。

さらに集落内には、生活互助・再生産組織として契約講が存在していた。契約講は東北地方に分布する村落内の基幹組織で、仙台藩領内に多く存在していた。契約講は集落が共同体として生きていくための機能をもった組織であり、生活・生産・信仰・祭祀などの全般にわたって規約と統制力を有している。集落によってその規約の内容は異なるが、それぞれの集落内にお

16 注7のアンケートで明らかにされた。回答者の職業は回答者 1,679 人のうち、「会社員」が 391 人で最も多く、「農業」は 152 人で 8 割が 60 代以上、「漁業」は 141 人で 6 割が 60 代以上だった。

¹⁷ 1-7-2 は『北上町史（自然生活編）』（2004）の「第二部生活 第一章集落（ムラ）と社会組織」による。

ける協同慣行や生活互助慣行に関する規定が必ず記されている。例えば、追波や吉浜集落では「エハライ・サワソウジ」といって、年に2回、用排水路の手入れをするが、これには全員が出役する義務があった。また、漁場での採取慣行の一つに「クチアケ」（口開け）がある。クチアケは、アワビや海藻などの採取に関して繁殖の保護と乱獲を防ぐために設けられていた規制を一時解除するもので、公平性のため、出漁時間、舟数、人数、漁具などの制限がされていた。また、不幸や病気、被災などで家が多くの人々の労力を必要とする事態になった際に協力する規程も記されており、農作業における「ユイ」や屋根葺き、葬儀などにおいても集落内の助け合いが行われていた。北上町の人々は自然豊かな環境の中で、組織や決まりのもと、助け合いながら生活を営んできた歴史があり、近隣同士の強固な関係性を築き上げてきた。

しかし、高度経済成長期以降の経済・社会構造の変化、生産手段の発達や生活の変化の影響、さらには人口減少も相まって協同慣行は次第に薄れ、集落の生活基盤である契約講も変容していった。

1-7-3. 東日本大震災の影響

北上町を含む石巻市は2011年3月11日に起きた東日本大震災で甚大な被害をうけた。石巻市全域の津波浸水域は図1-2の通りである。石巻市の死者数は3,972人（関連死・行方不明者含む）で、岩手、宮城、福島などの全被災市町村の中で最多だった。北上町では268人（関連死・行方不明者含む）が犠牲となった¹⁸。また、家屋の被災では全1,151件のうち633件が「全壊」、463件が「半壊」もしくは「一部損壊」、被害がなかったのは55件だった。半数以上の家屋が全壊で家を失ったことがわかる（図1-3）。加えて、東日本大震災は住民の居住移動を促すこととなった。北上総合支所のデータによると、2016年の時点で、町内から町外への転出は計170世帯に及んだ¹⁹。なお、最も転出世帯が多かったのは月浜集落の33世帯で、次いで吉浜集落、追波集落で20世帯以上の転出、相川集落、小室集落、釜谷崎集落で10世帯以上の転出となり、特に吉浜学区で転出世帯が多いことが分かっている。北上町の平成17年から令和元年11月末までの人口動態（図1-4）を見ても、震災の翌年度平成23年度から人口が格段に減少していることが見て取れ、東日本大震災はかねてより進んでいた人口減少を加速させたといえる。また、少子高齢化も顕著にあらわれている。北上町の令和元年9月末における年代別人口（表1-3）を見ると、0～9歳の割合が5.7%で全世代の中で最も低いことが分かる。そして0～9歳の次に割合が低いのは20～29歳の若者で6.4%である。この数字は石巻市が統計上分けている11の地域（本庁、蛇田、稲井、渡波、荻浜、河北、雄勝、河南、桃生、北上、牡鹿）の中で最も低く、北上町は深刻な若者不足の課題を抱えている。

また、震災前まで北上町は3つの学区（相川学区、吉浜学区、橋浦学区）に分かれており、小学校が3つ、中学校が1つ（北上中学校）あった。しかし、東日本大震災の津波により相川

¹⁸ 令和元年10月末現在。石巻市HP「復興情報＞東日本大震災関連情報＞被災状況等＞被災状況（人的被害）」参照。

¹⁹ 北上総合支所への聞き取り調査より。

小学校と吉浜小学校が被災し（写真 1-1）、平成 24 年に閉校、翌年から北上町全体を一つの学区とし、北上小学校が開校した²⁰。現在は元の橋浦小学校が北上小学校となっているが、高台にある北上中学校の横に移転新築されることとなり、その工事が行われている最中である²¹。現在の生徒数は 90 人で、石巻市内の 33 校中、7 番目に少ない²²。なお、北上中学校は被災しておらず、現在は 47 人の生徒が通い、石巻市内の 19 校中、4 番目に少ない²³。

小学校の閉校は、現実的に必至だったとはいえ、OB・OG にとっては母校を失うこととなった。加えて、防潮堤の建設や町全体の土盛りなどにより、景観も大きく変化した。

さらに、前述した契約講は、もともと継続が危うい状態だったが、維持することが難しい状態となり、多くの集落で解散せざるを得ない状況となった²⁴。

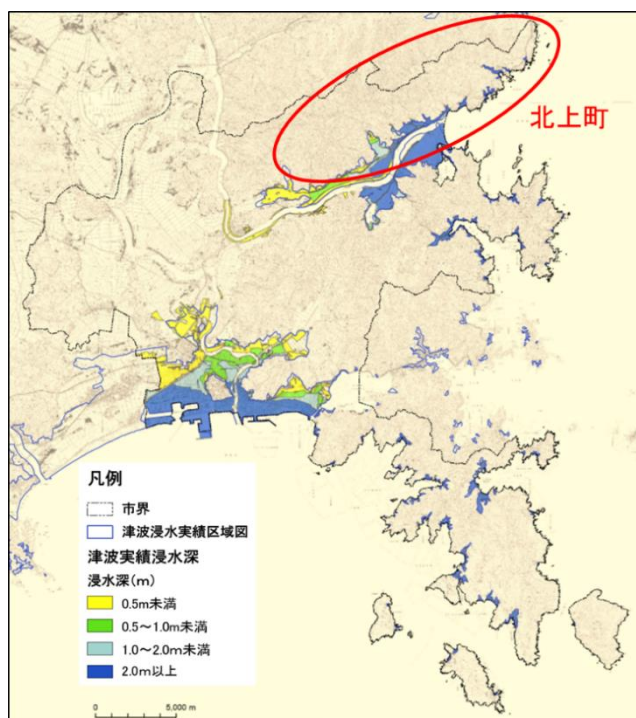


図 1-2 石巻市の浸水域
「東日本大震災災害検証報告書」（石巻市 HP）
より引用した図を筆者が一部加工

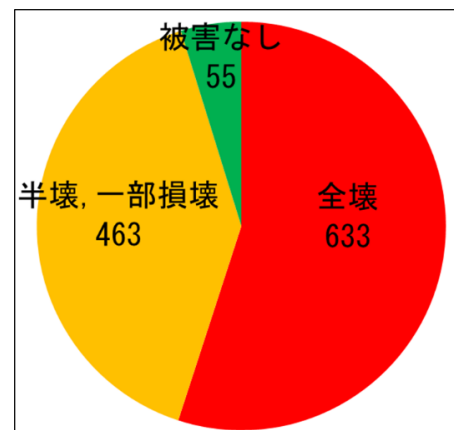


図 1-3 北上町内家屋の被災程度
「石巻市震災復興基本計画（H25 年 3 月）」
（石巻市 HP）より作成

²⁰ 本研究の対象者から得られたデータを示す際は、元の 3 つの学区分（相川学区、吉浜学区、橋浦学区）を用いる。

²¹ 石巻市 HP「教育委員会＞計画・施策・評価＞石巻市立小学校災害復旧整備計画＞被災した小・中学校の移転新築事業＞北上小学校移転新築工事の状況」参照。

²² 令和元年 5 月 1 日現在。石巻市 HP「教育委員会＞学校教育情報＞小中学校児童生徒在籍者数」参照。

²³ 同上。

²⁴ 2019 年 12 月現在、吉浜学区、相川学区のうち、契約講を残しているのは小室集落と小指集落、小滝集落のみ。財産を管理する目的で契約講を形式的に残している集落や、自治会に移行した集落もある。橋浦学区は把握していない。

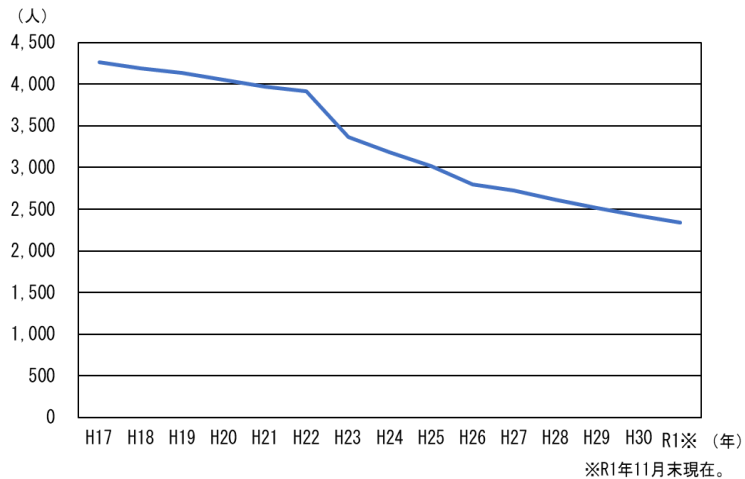


図 1-4 北上町の人口動態
「住民基本台帳による男女別人口及び世帯数の推移」
(石巻市 HP) より作成

表 1-3 石巻市内各支庁の年代別人口

	0～9 歳		10～19 歳		20～29 歳		30～39 歳		40～49 歳		50～59 歳		60～69 歳		70～79 歳		80 歳～		総合計
	人口	割合	人口	割合	人口	割合	人口	割合	人口	割合	人口	割合	人口	割合	人口	割合	人口	割合	
本庁	3522	6.5%	4572	8.4%	5558	10.2%	5588	10.3%	7295	13.4%	7026	13.0%	7533	13.9%	7628	14.1%	5531	10.2%	54253
蛇田	1828	7.5%	2370	9.7%	2142	8.8%	2603	10.6%	3606	14.8%	3160	12.9%	3323	13.6%	3182	13.0%	2228	9.1%	24442
稲井	465	7.1%	593	9.1%	555	8.5%	700	10.7%	835	12.8%	884	13.5%	1055	16.2%	732	11.2%	709	10.9%	6528
渡波	1069	7.3%	1311	9.0%	1426	9.8%	1508	10.3%	1880	12.9%	1841	12.6%	2192	15.0%	1948	13.4%	1400	9.6%	14575
荻浜	18	4.0%	39	8.7%	29	6.4%	39	8.7%	47	10.4%	53	11.8%	79	17.6%	68	15.1%	78	17.3%	450
河北	609	5.8%	796	7.5%	771	7.3%	1001	9.5%	1146	10.9%	1335	12.7%	1939	18.4%	1443	13.7%	1512	14.3%	10552
雄勝	28	2.3%	28	2.3%	79	6.5%	53	4.3%	85	7.0%	167	13.7%	248	20.3%	239	19.6%	295	24.1%	1222
河南	1520	7.9%	1677	8.8%	1465	7.7%	2166	11.3%	2391	12.5%	2333	12.2%	3029	15.8%	2407	12.6%	2156	11.3%	19144
桃生	417	5.9%	633	8.9%	517	7.3%	663	9.3%	849	11.9%	886	12.4%	1298	18.2%	962	13.5%	903	12.7%	7128
北上	133	5.7%	180	7.7%	151	6.4%	178	7.6%	268	11.4%	270	11.5%	442	18.8%	348	14.8%	379	16.1%	2349
牡鹿	65	2.7%	109	4.5%	175	7.3%	164	6.8%	194	8.1%	282	11.7%	506	21.0%	440	18.3%	469	19.5%	2404
計	9674	6.8%	12308	8.6%	12868	9.0%	14663	10.3%	18596	13.0%	18237	12.7%	21644	15.1%	19397	13.6%	15660	10.9%	143047

※令和元年 9 月末現在。「住民基本台帳による人口推移」(石巻市 HP) より作成。



写真 1-1 被災した吉浜小学校
(2011 年 3 月 筆者撮影)

1-8. 本論文の構成

本稿は、第2章でアンケート結果を、第3章でインタビュー結果を示し、第4章でそれらを合わせた総合考察を行う。第2章では、アンケートにより得られた回答者属性や震災の被災程度、および地元志向を示している。さらに、それらをクロス集計や統計分析することによって、若者自身や若者をとりまく対象地の実情、属性ごとの若者の地元志向の傾向を明らかにしている。アンケートだけでは詳細や背景が分からないものについても提示し、第3章および第4章の考察材料にしている。第3章では、インタビューにより得られた質的データをもとに、居住移動の経緯とつながりの実態を明らかにしている。若者と地域のつながりは大きく9つに分類し、それぞれについてその多様な実態と、つながりが育まれた背景、およびつながりの先にあるものについて考察している。また、つながりを維持する上での課題についても触れ、まちづくりについての考察材料としている。第4章では、第2章と第3章の結果をまとめ、主につながりを育むことや維持するための総合的な考察を、被災地としての性格を踏まえたうえで行っている。

2. アンケート結果

2-1. 回答者属性

58 人の回答者の属性は表 2-1 の通りである。結果は、まず、性別は男性 41%、女性 59%で、年齢は 23 歳が 34%で最も多かった。職業は社会人²⁵が 43 人で 74%、学生が 10 人で 17%、無職・家事専業が 5 人で 9%だった。社会人のうち、最も多かったのは会社員の 41%だった。また現住所は、筆者が 4 つの区分を設け、回答内容からそれぞれ判断して集計した。結果、北上町内在住者は 26%、北上町外石巻市内在住者は 26%、石巻市外宮城県内在住者は 29%で最も多く、宮城県外在住者は 19%だった。北上町内在住者の 15 人のうち、これまで町外に居住した経験がある回答者は 11 人で、経験がない回答者は 4 人だった。ほとんどの回答者が一度は北上町外に他出した経験があることがわかった。また、現住所における同居人をたずねたところ、一人暮らしは 23 人で 40%、同居人がいると判断できた回答者は 35 人で 60%だった。同居人では「母」が 24 人で最も多かった。また、「配偶者」と答えた回答者も 9 人いたことから、結婚というライフイベントを経験した回答者が少なくとも 9 人いることがわかった。さらに、回答者の出身学区は「相川」が 26%、「吉浜」が 36%、「橋浦」が 38%だった。また、兄弟姉妹の有無とその構成をたずね、筆者が生まれ順を判断したところ、「一人っ子」は 10%、「長子」は 40%、「次子」は 48%だった。車を持っていると回答したのは 37 人で 64%、持っていないと回答したのは 21

質問紙 No.	質問	カテゴリー	人数	割合
2	性別	男性	24	41%
		女性	34	59%
		無回答	0	0%
3	年齢	19	2	3%
		20	3	5%
		21	11	19%
		22	3	5%
		23	20	34%
		24	11	19%
		25	5	9%
		26	3	5%
		無回答	0	0%
5	職業	会社員	24	41%
		公務員	8	14%
		団体職員	1	2%
		専門的職業	5	9%
		自営業	2	3%
		パート・アルバイト	2	3%
		学生	10	17%
		無職・家事専業	5	9%
		その他	1	2%
4	現住所	無回答	0	0%
		北上町内	15	26%
		北上町外石巻市内	15	26%
		石巻市外宮城県内	17	29%
		宮城県外	11	19%
		無回答	0	0%
16	町外居住経験の有無 (N=15, 町内在住者のみ)	有	11	73%
		無	4	27%
		無回答	0	0%
6	現住所における同居人※	なし（一人暮らし）	23	40%
		父	18	31%
		母	24	41%
		祖父	12	21%
		祖母	16	28%
		兄弟・姉妹	8	14%
		恋人	1	2%
		配偶者	9	16%
		娘・息子	7	12%
		親戚	0	0%
		その他	3	5%
		無回答	0	0%
7	出身学区	相川	15	26%
		吉浜	21	36%
		橋浦	22	38%
		無回答	0	0%
12	兄弟・姉妹の有無	有	52	90%
		無	6	10%
		無回答	0	0%
12'	生まれ順	一人っ子	6	10%
		長子	23	40%
		次子	28	48%
		無回答	1	2%
14	車所有の有無	有	37	64%
		無	21	36%
		無回答	0	0%
15	年収 (N=43, 学生・無職以外)	100万円未満	2	5%
		100～200万円	6	14%
		200～300万円	17	40%
		300～500万円	14	33%
		500～700万円	0	0%
		700～1000万円	0	0%
		1000万円以上	0	0%
		不明	4	10%
		無回答	0	0%

注) No. 15と16以外はN=58。※は複数回答可。小数点以下は四捨五入で切り捨てて表示。論の構成の都合上、質問紙の順番とは異なる順番で表示。

²⁵ 社会人は「会社員」「公務員」「団体職員」「専門的職業」「自営業」「パート・アルバイト」「その他」を合計したもの。「その他」は記述内容より社会人に分類されるものと判断した。

表 2-2 現住所と属性のクロス集計

		小計	職業						生まれ順						車所有の有無				年収									
			社会人		学生		無職・ 家事専業		一人っ子		長子		次子		有		無		100万円未満		100～200万円		200～300万円		300～500万円		不明	
																			人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
小計		(人)	43		10		5		6		23		28		37		21		2		6		17		14		4	
現住所	北上町内	15	13	30%	0	0%	2	40%	4	67%	3	13%	8	29%	15	41%	0	0%	0	0%	4	67%	6	35%	2	14%		
	北上町外石巻市内	15	11	26%	2	20%	2	40%	1	17%	7	30%	7	25%	12	32%	3	14%	2	100%	0	0%	4	24%	4	29%		
	石巻市外宮城県内	17	13	30%	3	30%	1	20%	0	0%	7	30%	9	32%	8	22%	9	43%	0	0%	2	33%	5	29%	4	29%		
	宮城県外	11	6	14%	5	50%	0	0%	1	17%	6	26%	4	14%	2	5%	9	43%	0	0%	0	0%	2	12%	4	29%		

注) N=58。割合の値は人数の値をそれぞれのカテゴリーの小計で割ったもの。なお、年収は「500万円以上」の回答者がいなかったため省略している。

人で36%だった。さらに、社会人43人に年収をたずねたところ、200～300万円が40%で最も多かった。200万円未満の比較的年収が低い回答者もおよそ19%いることがわかった。

なお、「現住所」と「職業」「生まれ順」「車所有の有無」「年収」をクロス集計したのが表2-2である。表から、「職業」では「社会人」は宮城県内在住者が多く、「学生」は半数が宮城県外在住であることがわかった。後者は、石巻市内に大学の選択肢が少ないことが原因と考えられる。「無職・家事専業」は宮城県外には住んでおらず、全員が宮城県内に住んでいることがわかった。また、「生まれ順」では「一人っ子」の7割が北上町内に住んでいること、「長子」はほとんどが北上町外在住であること、「次子」は「宮城県外」在住者が少ないことなどがわかった。

「一人っ子」の結果の背景には家督相続の習慣の存在が考えられるが、「長子」と「次子」はその習慣の理にはかなわない結果となった。さらに「車所有の有無」では、「有」と回答した人が「北上町内」「北上町外石巻市内」で多く、「無」と回答した人は「石巻市外宮城県内」「宮城県外」で多かった。公共交通機関の発達度の違いが背景にあると考えられる。最後に「年収」では、200万円未満と回答したのは「北上町内」「北上町外石巻市内」「石巻市外宮城県内」在住者のみで、「宮城県外」在住者は全員が200万円以上と回答した。とくに、「100万円未満」と回答したのは「北上町外石巻市内」の2人のみで、年収が低いと判断された。

2-2. 東日本大震災の被災程度

東日本大震災の影響をどの程度受けたかを把握するため、2011年当時住んでいた家屋の被災程度をたずねた(表2-3)。まず、家屋の被災程度では「損壊なし」と回答したのは13人でおよそ22%だったのに対し、何らかの損壊があったと回答したのは45人で78%だった。とくに、全壊は28人と、回答者の約半数に及んだ。さらに、何らかの損壊があったと回答した45人に、その後の住居の状況をたずねた。その結果、被災の程度に関わらず「修繕していない」と回答したのは30人で、「修繕した」と回答したのは15人だった。なかでも、注目すべきは被災程度が大きい「大規模半壊」と「全壊」の回答である。まず、大規模半壊と回答した6人のうち5人が「修繕した」と回答した。その後、4人は「居住を継続している」と回答したのに対し、1人は「取り壊し、新築した」と回答した。一方、「全壊」と回答した28人のうち24人が「修繕していない」と回答し、そのうちの19人が修繕せずに「新築した」と回答した。「修繕した」と

表 2-3 回答者の実家の被災程度とその後の住居の状況

質問紙 No.	質問	カテゴリー	人数	修繕していない					修繕した						
				新築せず	新築した	中古 /賃貸	その他	小計	居住 継続中	取壊し 新築せず	取壊し 新築した	取壊し 中古 /賃貸	その他	小計	
9. 10	北上町 自宅 の被災程度 (N=58)	損壊なし	13	→											
		一部損壊	9		3	1	0	0	4	5	0	0	0	0	5
		半壊	2		0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	1
		大規模半壊	6		1	0	0	0	1	4	0	1	0	0	5
		全壊	28		2	19	1	2	24	1	0	3	0	0	4
		無回答	0		6	20	1	3	30	11	0	4	0	0	15

表 2-4 回答者の被災程度、現住所、同居人のクロス集計

		小計	被災程度					現住所の同居人	
			損壊なし	一部損壊	半壊	大規模半壊	全壊	一人暮らし	同居人あり
現住所	小計	(人)	13	9	2	6	28	23	35
	北上町内	15	7	4	1	1	2	0	15
	北上町外石巻市内	15	1	0	0	1	13	0	15
	石巻市外宮城県内	17	4	3	1	2	7	13	4
	宮城県外	11	1	2	0	2	6	10	1

注) N=58。

表 2-5 親族震災犠牲者

質問紙 No.	質問	カテゴリー	人数
11	親族震災犠牲者 (N=58)	いない	46
		いる	11
		無回答	1

回答した4人のうち、1人は「居住を継続している」と回答したが、3人は「取り壊し、新築した」と回答した。大規模半壊、全壊ともに「修繕した」のにも関わらず「取り壊し、新築した」という回答があった背景には、修繕した後に災害危険区域の指定を受け、立ち退きになったことが推測される。さらに、回答者の現住所（4区分）と実家²⁶の被災程度、現住所の同居人をクロス集計したものが表2-4である。「全壊」のおよそ半数の13人が「北上町外石巻市内」に住んでいることがわかる。回答者の現住所は実家の現住所と異なるケースもあるため、この集計から単純に実家の所在地や被災後の移転先を判断することはできないが、「北上町外石巻市内」には一人暮らしをしている人がいないことから、該当する13人のほとんどは北上町外石巻市内に実家を移転したということが考えられる。この場合の「同居人」は生殖家族²⁷や兄弟も考えられるが、そのケースはそれほど多くないと予想される。災害危険区域の指定により居住可能な地域が限られたケースをはじめ、やむを得ない理由で町外へ移転せざるを得なかった回答者が一定数いる事実をここで共有したい。

また、親族のなかに東日本大震災で犠牲になった方がいるかどうかをたずねたところ（表2-5）、「いない」と回答したのは46人で、「いる」と回答したのは11人だった。犠牲になった方の続柄は父や母、祖父母、曾祖父母、はとこ、いとこなどだった。

²⁶ 本論文では、「実家」は定位家族が住む家のことを指す。「定位家族」とは、自分が保育されてきた家族という意味で、家族社会学で一般的に用いられている定義である（森岡・望月，1987）。一方、自分が結婚して子を産み育てることによって充実させてきた家族は「生殖家族」と示され、本研究でもこれらの定義を援用する。

²⁷ 同上。

2-3. 北上町との関わり

回答者の北上町との関わり方を、「現在でも連絡を取り合う北上町出身の友人・知人の数」「北上町訪問頻度」「北上町訪問目的」の視点で把握した。まず、「現在でも連絡を取り合う北上町の友人・知人の数」（表 2-6）は、該当する人数を回答者に記入してもらい、筆者の判断で一定数ごとに区分した。集計の結果、最も多かったのは「2～3 人」が 18 人で 31%だった。「10 人以上」の回答者もおおよそ 28%で多かった。また、「0 人」で友人・知人との「つながり」が全くない人も 2 人いた。

さらに、北上町外在住の 43 人に「北上町訪問頻度」をたずねた（表 2-6）。「数年に 1 回」と「まったく訪れない」はともに 0 人で、北上町外在住者の全員が「年に 1 回」以上のペースで北上町を訪れていることがわかった。このなかには、被災により北上町外に実家を移転した若者も含まれている。頻度は「半年に 1 回」が 33%で最も多く、次に「月に 1 回」で 26%だった。これを現住所とクロス集計すると（表 2-7）、「北上町外石巻市内」在住者の最高頻度は「週に 1 回」、「石巻市外宮城県内」の回答者の最高頻度は「月に 1 回」、「宮城県外」の回答者の最高頻度は「2～3 ヶ月に 1 回」であり、現住所が北上町から遠くなるほど頻度が低くなることを示唆している。

次に、北上町外在住の 43 人に、「北上町訪問目的」をたずねた（図 2-1）。図 2-1 は訪問目的の単純集計と現住所別（4 区分）の集計をグラフにしたものである。まず、訪問目的のうち最も多かったのは「お墓参りなどの先祖供養（以下、「先祖供養」に略す）」が 28 人で、現住所に関わらず多かった。次いで「帰省」、「友人・知人に会う」が 18 人で多かった。現住所別にみると「北上町外石巻市内」在住者は「先祖供養」に次いで「景色・雰囲気を楽しむ」「神社」が多かった。前述の通り、「北上町外石巻市内」在住者は北上町から実家ごと移転したケースが多いと考えられるため「帰省」を目的とした訪問は比較的少ないが、北上町により近いという条件から、「景色・雰囲気を楽しむ」「神社」といった非定期的で一人でもできるような自由度の高い目的が多くなったと考察できる。また、「石巻市外宮城県内」在住者は「帰省」「先祖供養」「友

表 2-6 友人・知人の数と北上町訪問頻度

質問紙 No.	質問	カテゴリー	人数	割合
13	現在でも連絡を取り合う北上町出身の友人・知人の数 (N=58)	0人	2	3%
		1人	2	3%
		2～3人	18	31%
		4～5人	10	17%
		6～9人	8	14%
		10～19人	12	21%
		20人～	4	7%
		無回答	1	2%
17	北上町訪問頻度 (N=43, 町外在住者のみ)	週に1回	1	2%
		月に1回	11	26%
		2～3ヵ月に1回	9	21%
		半年に1回	14	33%
		年に1回	6	14%
		数年に1回	0	0%
		まったく訪れない	0	0%
		無回答	2	5%

表 2-7 北上町訪問頻度と現住所のクロス集計

		現住所			
		小計	北上町外石巻市内	石巻市外宮城県内	宮城県外
北上町訪問頻度	小計	(人)	15	17	11
	週に1回	1	1	0	0
	月に1回	11	5	6	0
	2～3ヵ月に1回	9	3	4	2
	半年に1回	14	6	2	6
	年に1回	6	0	4	2
	数年に1回	0	0	0	0
	まったく訪れない	0	0	0	0
	無回答	2			
	注) N=43。				

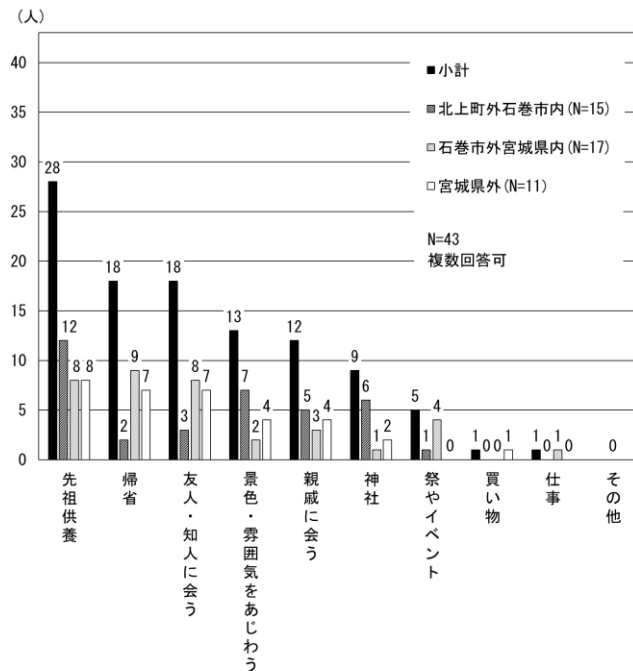


図 2-1 北上町訪問目的と現住所の関係

表 2-8 北上町訪問目的と訪問頻度の関係

		北上町訪問目的																				
		小計	先祖供養	帰省	友人・知人に会う	景色・雰囲気を感じよう	親戚に会う	神社	祭やイベント	買い物	仕事	その他										
			人数割合	人数割合	人数割合	人数割合	人数割合	人数割合	人数割合	人数割合	人数割合	人数割合										
北上町訪問頻度	小計	(人)	28	65%	18	42%	18	42%	13	30%	12	28%	9	21%	5	12%	1	2%	1	2%	0	0%
	週に1回	1	1	2%	0	0%	0	0%	1	2%	1	2%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
	月に1回	11	4	9%	7	16%	6	14%	2	5%	4	9%	1	2%	3	7%	0	0%	1	2%	0	0%
	2〜3カ月に1回	9	5	12%	5	12%	7	16%	5	12%	2	5%	1	2%	1	2%	0	0%	0	0%	0	0%
	半年に1回	14	13	30%	5	12%	4	9%	4	9%	4	9%	5	12%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
	年に1回	6	5	12%	1	2%	1	2%	1	2%	1	2%	1	2%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
	数年に1回	0	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
	まったく訪れない	0	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
	無回答	2																				

注) N=43。割合の値は人数の値をNで割ったもの。なお、北上訪問目的は複数選択可。

人・知人に会う」を目的とした訪問が多かった。注目すべきは、全体（43 人）で「祭やイベント」と答えた 5 人のうち 4 人が「石巻市外宮城県内」在住者だったことである。頻繁には通うことができない距離的な条件から、「祭やイベント」を一つのきっかけとして訪問していると考えられる。一方、「宮城県外在住者」は、多い順に「先祖供養」「帰省」「友人・知人に会う」「景色・雰囲気をあじわう」「親戚に会う」「神社」と、全体集計とほぼ同じ傾向になった。

最後に、訪問目的によって訪問頻度が異なることが予測できたため、「北上町訪問頻度」と「北上町訪問目的」をクロス集計した（表 2-8）。「先祖供養」は「半年に 1 回」の訪問が 30% と高かったのに対し、「帰省」「友人・知人に会う」「景色・雰囲気をあじわう」「親戚に会う」「祭やイベント」ではそれぞれ「月に 1 回」もしくは「2～3 カ月に 1 回」の訪問が最も多くなった²⁸。したがって、単純集計結果では訪問目的で「先祖供養」が最も多かったが、訪問頻度では他の目的に比べると低いことがわかった。

²⁸ 「買い物」「仕事」「その他」は回答者が 0 人か 1 人のため除く。

2-4. 理想の居住地条件

2-4-1. 理想の居住地条件の単純集計

若者にとって北上町が居住場所としてどのように意識されているかを探るため、「理想の居住地条件（全 25 項目から 5 つまで選択可）」をたずねた（図 2-2）。結果は概して、上位は居住環境や生活に関する項目が多かったのに対し、下位はそれとはあまり関係のない娯楽やルーツ、文化、景観に関する項目が多かった。最も多かったのは「公共交通機関が充実している」で、過半数を超える回答者が理想の居住地条件と考えていた。次いで「自由に買い物しやすい」「通勤・通学が便利」「病院・福祉施設が充実している」が並んだが、「自然環境に恵まれている」を選んだ回答者も 22 人で、比較的多かった。北上町の現状を見れば、上位 4 つの生活利便性に関する条件は北上町では乏しいと判断できる。しかし北上町は「自然環境に恵まれている」という条件にはあてはまる。ただし、生活にかかわる項目の中では「近所とのつながりが強い」も北上町の特徴と言えるが、選択した回答者は 6 人であまり重要とされていなかった。また、

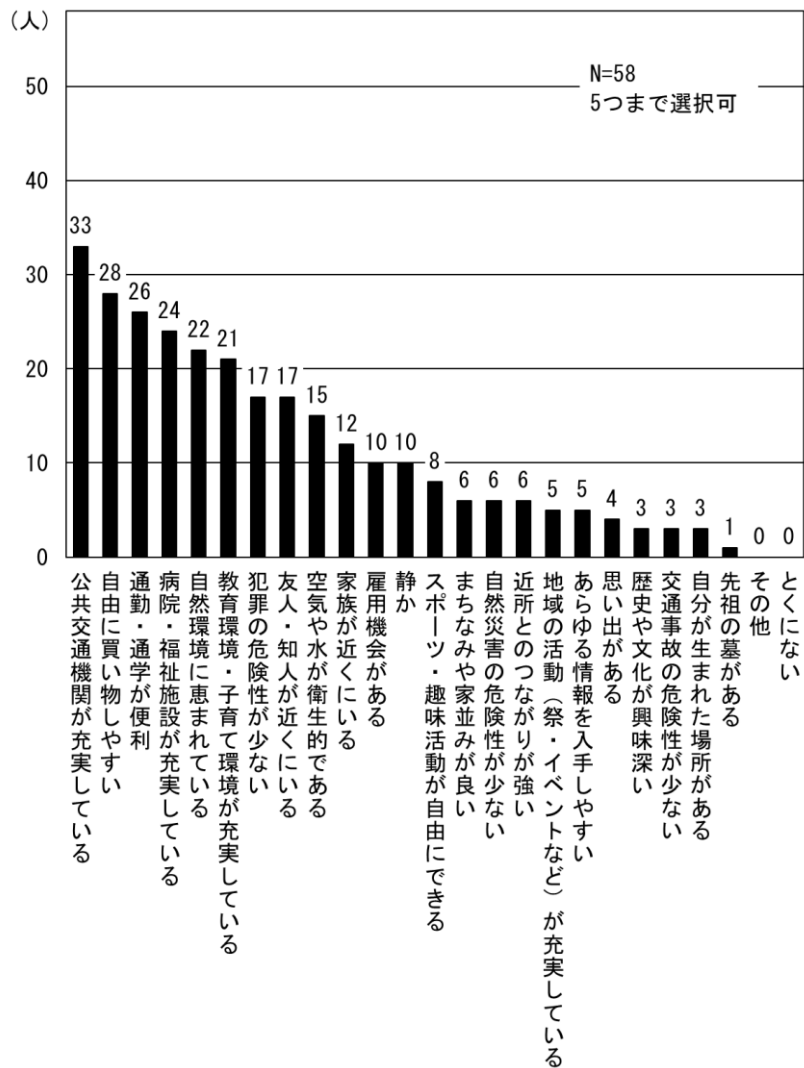


図 2-2 理想の居住地条件

安全面でみれば「犯罪の危険性が少ない」が17人であったのに対し、「自然災害の危険性が少ない」は6人で、「交通事故の危険性が少ない」は3人で少なかった。多くの回答者が震災で被災した経験がある中、自然災害という要素は居住地選択にとってあまり重要でないことがわかった。また、「家族が近くにいる」よりも「友人・知人が近くにいる」を選択した回答者が多かった。

2-4-2. 理想の居住地条件と属性の関係

理想の居住地条件は現住所の周辺環境の違いやライフイベントの経験の違いから異なることが予想された。そこで、理想の居住地条件と現住所（4区分）の関係（図2-3）、理想の居住地条件と職業（3区分）の関係（図2-4）を示した²⁹。まず、理想の居住地条件と現住所の関係（図2-3）では、「公共交通機関が充実している」や「通勤・通学が便利」、「教育環境が充実している」は現住所別で意識の差異はほとんどないといえる。一方、現住所の違いによって回答者割合に20%以上大きい差異があったものは、「自由に買い物しやすい」「病院・福祉施設が充実している」「自然環境に恵まれている」「犯罪の危険性が少ない」「家族が近くにいる」

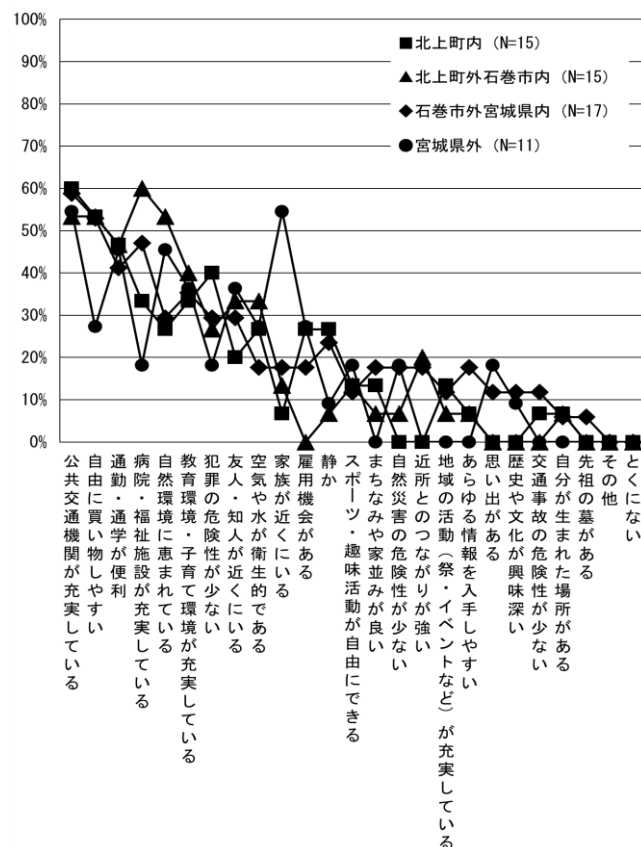


図 2-3 理想の居住地条件と現住所の関係

²⁹ 図 2-3 の割合算出方法は、クロス集計して算出した回答者数を「北上町内」「北上町外石巻市内」「石巻市外宮城県内」「宮城県内」のそれぞれの N で割った。図 2-4 も同様に回答者数を「社会人」「学生」「無職・家事専業」のそれぞれの N で割った。なお、「社会人」の分類は 2-1.回答者属性で示したものをを用いた。項目の並び順は図 2-2 にならった。

「雇用機会がある」「静か」「近所とのつながりが強い」だった。それぞれが置かれている状況によって求める条件が異なることを示唆している。とくにここで触れておきたいのは「自然環境に恵まれている」と「家族が近くにいる」の2つである。まず「自然環境に恵まれている」を選択した回答者は、割合でみれば「北上町外石巻市内」在住者で最も高く、「北上町内」在住者で最も低かった。「北上町外石巻市内」在住者の特徴はほとんどが震災で実家を被災し移転を余儀なくされたことや、北上町訪問目的では「景色・雰囲気を感じよう」という回答が他の現住所に比べて多かったことなどがあげられ、やむを得ない理由で離れた北上町を何らかの形で“追っている”姿勢があることが想像できた。次に、「家族が近くにいる」は「宮城県外」在住者で最も割合が高かった。先に触れた通り、「宮城県外」在住者の半数は「学生」であり、図 2-4 を参照しても「家族が近くにいる」は学生の回答者割合が高いことから、宮城県外に他出した学生でも、いずれは定住家族がいる地元に戻りたいと考えている回答者が多いと推測できる。なお、この場合の“家族”を定住家族と捉えるか、生殖家族と捉えるかは回答者によって異なるが、学生がイメージする家族であれば前者である可能性が高い。

次に、理想の居住地条件と職業の関係（図 2-4）では、ほとんどの項目で「社会人」「学生」「無職・家事専業」間で意識が大きく違うことがわかる。このことから、ライフイベント（進学、就職、結婚、出産など）の経験とライフコースの段階によって、意識が異なる可能性が示唆された。たとえば、生活の利便性に関する「自由に買い物しやすい」や「通勤・通学が便利」では、「学生」と「無職・家事専業」は両極端にある。「無職・家事専業」は生殖家族と同居し

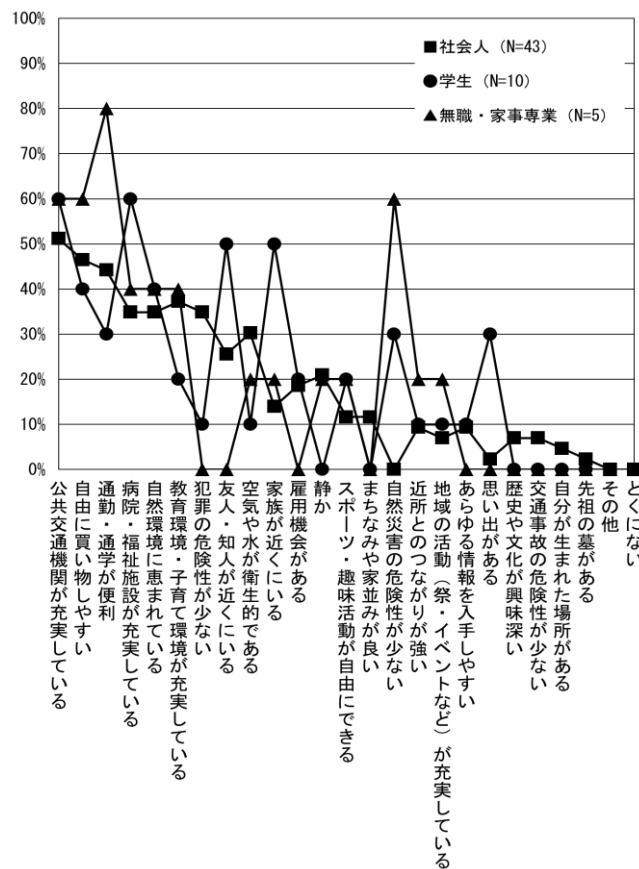


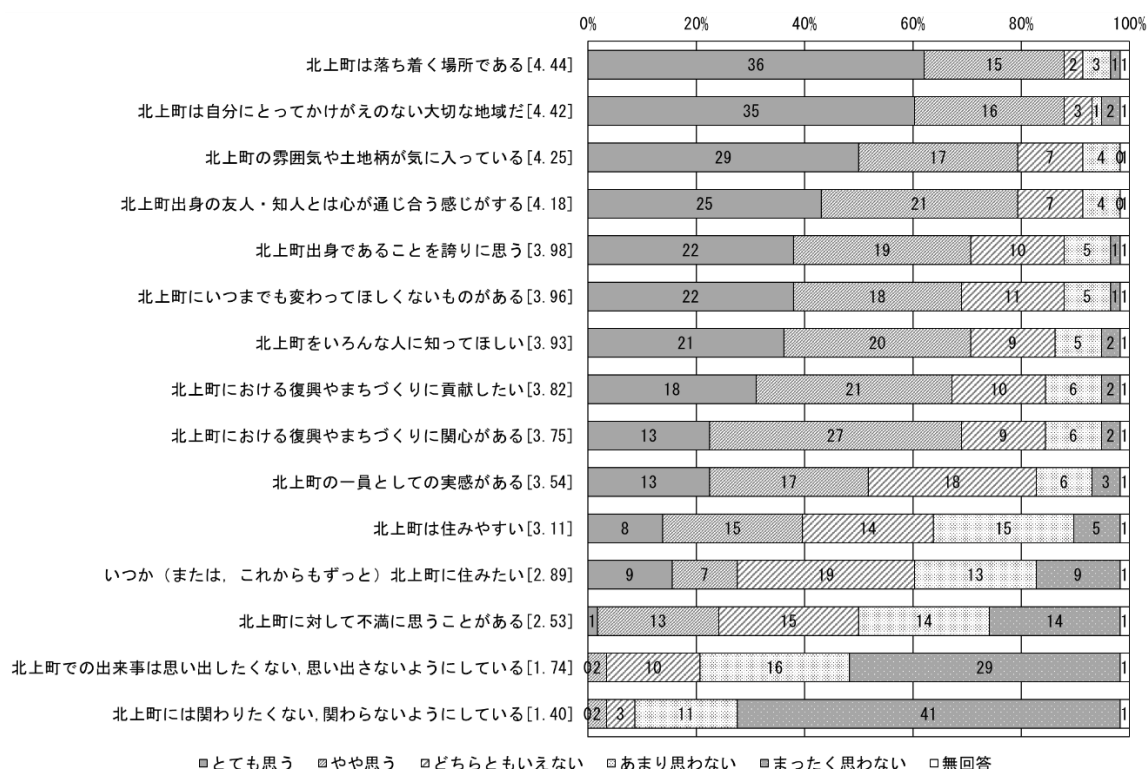
図 2-4 理想の居住地条件と職業の関係

ているケースが多いと考えられ、配偶者や子供の生活も考慮して利便性を優先させていると考えられる。一方、「友人・知人が近くにいる」に注目すると、「無職・家事専業」は0%なのに対し、学生は半数が選択している。それぞれにとって“友人・知人”の存在がどれだけ重要なのかを示唆している。また、「学生」は「思い出がある」を選択した回答者が30%で比較的多く、ここでもライフイベントの経験の違いによって優先する条件が異なることが示唆されている。また、「自然災害の危険性が少ない」も属性によって大きく差が生じ、「無職・家事専業」では6割が選択している。ただし、「自然災害の危険性が少ない」を選択した回答者（全6人）の属性をみると、6人中6人が「女性」であったこと、6人中5人が「次子」であったこと、6人中4人が「橋浦学区」出身だったこと、6人中4人が「同居人あり」だったことなどから様々な要因が考えられた。

2-5. 地元志向

2-5-1. 地元志向の単純集計

対象者の地元志向（地元である北上町をどう思っているのか）の傾向を探るため、15項目の地元志向を設け、5段階評価（5：とても思う、4：やや思う、3：どちらともいえない、2：あまり思わない、1：まったく思わない）で把握した（図2-5）。図2-5は15項目を平均値が高い順に表示している。全体的に肯定的地元志向の12項目が上位に、否定的地元志向の3項目は下位に分けられた。肯定的地元志向では、多くの項目で「とても思う」「やや思う」と回答した人が



注) N=58。[]内の数値は平均値。グラフ内の数値は回答人数。

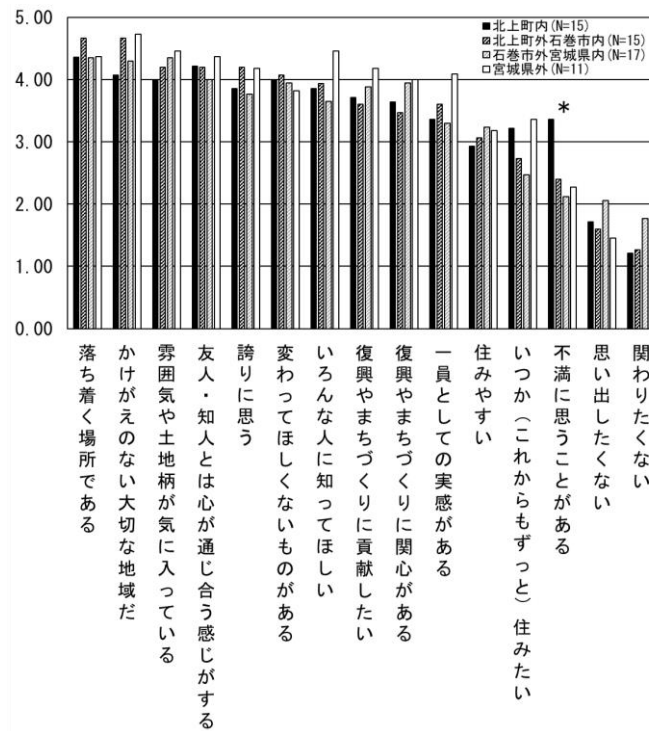
図2-5 地元志向

過半数を超えた。全体としては、多くの対象者が北上町に対して肯定的な地元志向を持っていると考えられる。上から、「北上町は落ち着いた場所である」「北上町は自分にとってかけがえない大切な地域だ」の2項目では9割近くの回答者が「とても思う」「やや思う」と評価し、「北上町の雰囲気や土地柄が気に入っている」「北上町出身の友人・知人とは心が通じ合う感じがする」の2項目は8割近く、「北上町出身であることを誇りに思う」「北上町にいつまでも変わってほしくないものがある」「北上町をいろんな人に知ってほしい」「北上町における復興やまちづくりに貢献したい」「北上町における復興やまちづくりに関心がある」の5項目でおよそ7割だった。「北上町の一員としての実感がある」はおよそ5割の回答者が「とても思う」「やや思う」と回答し、「どちらともいえない」と評価した回答者が18人で最も多かった。また、「北上町は住みやすい」「いつか（または、これからもずっと）北上町に住みたい」では「とても思う」「やや思う」が半数に満たず、平均値も低かった。北上町は居住地としてはあまり肯定的には捉えられていないことがわかる。また、「いつか（または、これからもずっと）北上町に住みたい」では「どちらともいえない」が19人で最も多かったことは、若者が将来の居住地を決めきれない状況にあることを示唆している。一方、否定的地元志向の3項目では「北上町に対して不満に思うことがある」の平均値が2.53と最も高かった。「北上町での出来事は思い出したくない、思い出さないようにしている」「北上町には関わりたくない、関わらないようにしている」の2項目は「とても思う」「やや思う」と評価したのが2人のみで、「まったく思わない」「あまり思わない」が8～9割程度だった。とくに、「北上町には関わりたくない、関わらないようにしている」という項目の平均値が最も低かったことは、北上町外在住者が何らかの形で関わりを持とうとしているという結果にも通じる。

2-5-2. 地元志向と属性の関係

地元志向の平均値は回答者の属性によって差が生じることが予想できたため、「理想の居住地条件」と同様に「現住所（4区分）」「職業（3区分）」の観点で平均値の差を分析した。はじめに、「現住所」の違いによって平均値にどのような差があるかを分析した（図2-6）³⁰。まず、「地元志向」と「現住所」の関係をみるにあたり、一元配置分散分析を行った。分析の結果、「不満に思うことがある」で $F(3, 53) = 3.91, P < .05$ となり、平均値に有意な差があることがわかった。したがって、統計的に「現住所」の違いは北上町に対する不満度と関係していると考えることができ、とくに、「北上町内」在住者は不満度が高いことがわかった。また、全体をみると肯定的地元志向12項目のうち9項目で「宮城県外」の平均値が最も高く、「宮城県外」在住者は北上町を肯定的に捉えている傾向があるといえることができる。とくに県外在住であるのにもかかわらず「一員としての実感がある」「いつか（これからもずっと）北上町に住みたい」の項目で最も平均値が高いことが特徴的だった。また、「宮城県外」在住者は「いろんな人に知ってほしい」の平均値も比較的高かった。一方、否定的地元志向のうち「思い出したくない、思い出さないようにしている」と「関わりたくない、関わらないようにしている」では、「石巻市外宮

³⁰ 図2-6及び図2-7の項目の並び順は図2-5にならった。なお、項目名は簡略化している。



注) *：分散分析の結果、 $P < 0.05$ で平均値に差があった項目。

図 2-6 地元志向と現住所の関係

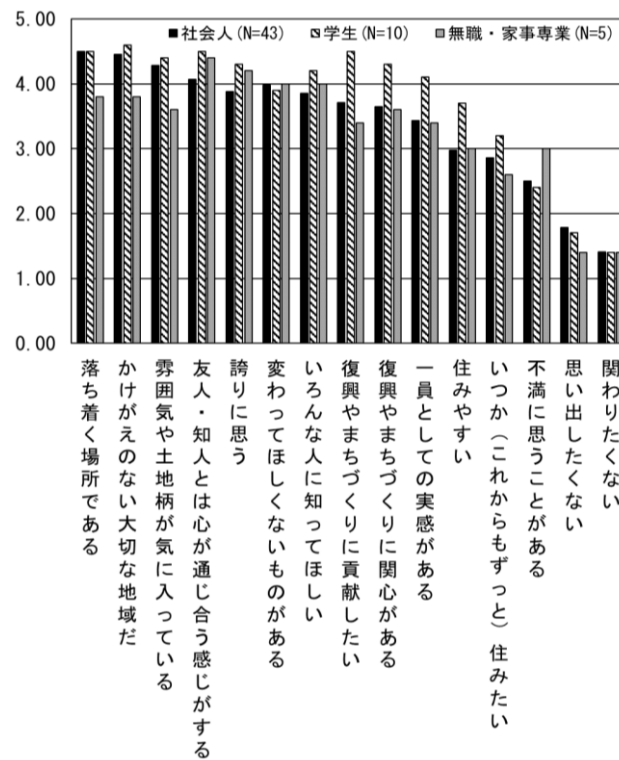


図 2-7 地元志向と職業の関係

域内」在住者の平均値が最も高く、北上に対して否定的な志向が比較的強いということが示唆された。

次に、「職業」によって地元志向の平均値にどのような差があるかを分析した（図 2-7）。これについても一元配置分散分析を行ったが、有意差のある項目はなかった。全体をみると、肯定的地元志向 12 項目のうち 11 項目で「学生」の平均値が最も高かった。とくに、「復興やまちづくりに貢献したい」や「復興やまちづくりに関心がある」の平均値が比較的高くなっていることから、今後の進路選択に幅があり、フットワークが軽い学生の性格が反映されていると考えられる。また、注目すべきは「無職・家事専業」の平均値が「落ち着く場所である」「かけがえのない大切な地域だ」「雰囲気や土地柄が気に入っている」で低いこと、「不満に思うことがある」で高かったことだ。「無職・家事専業」は「社会人」や「学生」に比べて、北上町に対して特別な感情があまりないということや、2-4-2. 理想の居住地条件と属性の関係の結果を踏まえると、「理想の居住地条件」においても「無職・家事専業」は生活利便性を重視していたことから、それに関する不満が高いのではないかと推測することができる。

2-5-3. 地元志向と北上町との関わり関係

地元志向は若者の北上町との関わり方と関係すると予想できたことから、「今でも連絡を取り合う北上町出身の友人・知人の数」と「訪問頻度」との関係を分析した。まず、地元志向の平均値が「今でも連絡を取り合う北上町出身の友人・知人の数」の違いによってどのような差があるかを分析した（図 2-8）。はじめに、一元配置分散分析をしたところ「友人・知人とは心が

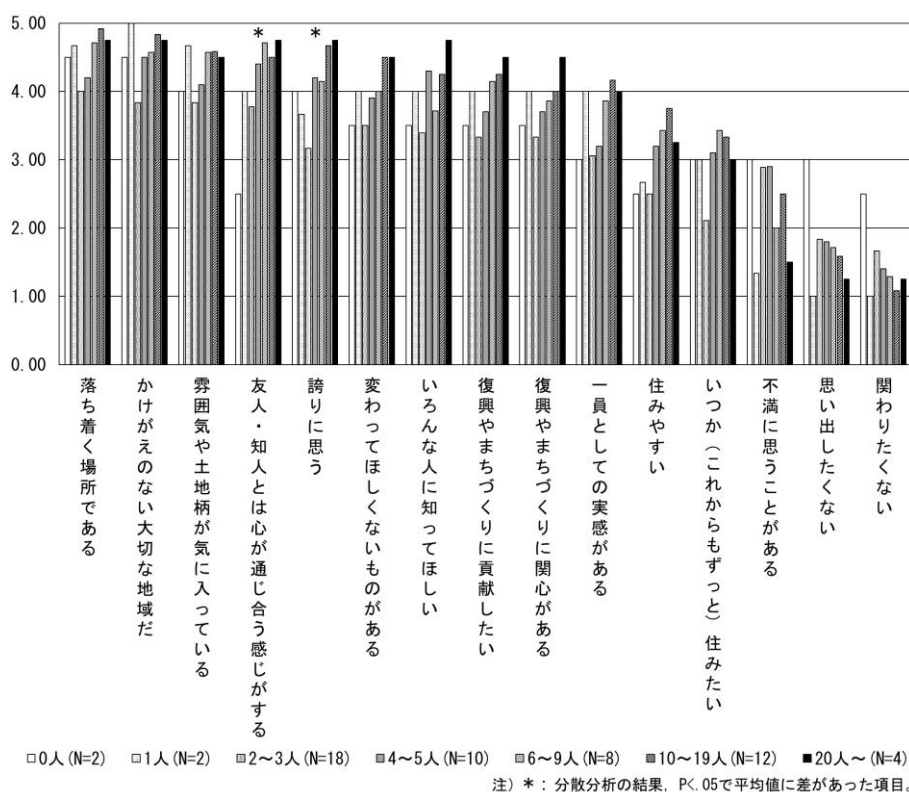
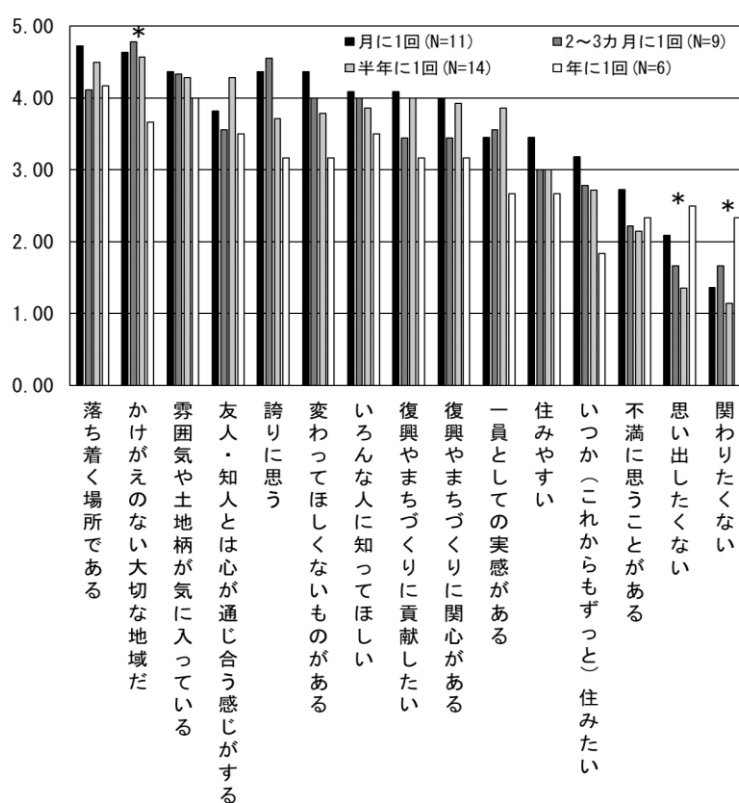


図 2-8 地元志向と「今でも連絡を取り合う北上町出身の友人・知人の数」の関係

通じ合う」で $F(6, 49) = 3.57, P < .05$ 、「誇りに思う」で $F(6, 49) = 4.37, P < .05$ となり、平均値に有意な差があった。前者の項目では友人の数が「6～9 人」や「20 人～」で平均値が高かったこと、「0 人」や「1 人」「2～3 人」で平均値が低かったことを踏まえれば、友人・知人との付き合いの維持が友人・知人との意識上のつながりに大いに関係していることがわかった。また、友人・知人の数は、誇り意識とも関係があることがわかった。全体的にみると、肯定的地元志向では友人・知人の数が多い回答者で平均値が高い項目が多いことがわかる。一方、否定的地元志向の 3 項目すべてで「0 人」の平均値が最も高かった。以上より、友人・知人との付き合いの維持とその充実度は、地元志向と関係があるといえる。

さらに、地元志向の平均値が「北上町訪問頻度」の違いによってどのような差があるかを分析した³¹ (図 2-9)。まず、一元配置分散分析を行うと、「かけがえのない大切な地域だ」で $F(3, 36) = 2.95, P < .05$ 、「思い出したくない、思い出さないようにしている」で $F(3, 36) = 2.94, P < .06$ 、「関わりたくない、関わらないようにしている」で $F(3, 36) = 3.56, P < .05$ となり、平均値に有意な差があった。「かけがえのない大切な地域だ」では「2～3 ヶ月に 1 回」と「年に 1 回」の回答者で平均値に大きな差があった。また、「思い出したくない、思い出さないようにしている」「関わりたくない、関わらないようにしている」では「半年に 1 回」と「年に 1 回」の



注) * : 分散分析の結果、 $P < .05$ で平均値に差があった項目。

図 2-9 地元志向と北上町訪問頻度の関係

³¹ 北上町訪問頻度について「週に 1 回」と回答したのは 1 人のみ、「数年に 1 回」「まったく訪れない」と回答したのは 0 人だったため、これらの項目は分析から除外した。

回答者で平均値に大きな差があった。全体的にみると、「月に 1 回」を選択した回答者の平均値は、肯定的地元志向 12 項目のうち 8 項目で最も高かった。とくに、訪問頻度が高い人ほど居住欲があり、直接的な関わりが居住欲と関係していることがわかった。これをはじめ、北上町を「月に 1 回」訪問する人は他の項目でも肯定的地元志向が高く、「年に 1 回」訪問する人は否定的地元志向が高いといえる。以上より、友人・知人とのつながりや訪問頻度の面で北上町によく関わりを持っている人ほど肯定的な地元志向が高いということが示唆された。

2-6. 小括

アンケート結果から、対象者である若者や北上町を取り巻く現状、若者が北上町にどのように関わっているか、または北上町をどのように捉えているかを考察した。

はじめに属性の把握、分析から「つながり」を考えるうえで基礎となる若者や北上町の現状を垣間見ることができた。まず、現住所と属性の関係から、社会人は宮城県内在住者が多く、宮城県という広い枠組みでの地元を拠点に働く若者が多いこと、高校・大学と進学するには必然的に町外へと他出しなければいけない現状、無職・家事専業も地元を拠点としていることなどが明らかになった。また、生まれ順と現住所の関係から、一人っ子で北上町内在住者が多かったことを受け、家督相続の習慣の存在が示唆された。ただし、長子と次子の結果はその理論に沿わなかった。その背景はインタビュー調査結果に託したい。また車所有の有無から、石巻市内における公共交通機関の不十分さが指摘できた。さらに、「石巻市外宮城県内」や「宮城県外」在住者の年収は比較的安定しているが、「北上町外石巻市内」で年収 100 万円未満が 2 人いるなど、不安定な生活を送る対象者の存在も明らかになった。以上より若者の視点では、石巻市内や北上町内の生活利便性、収入、雇用機会・進学機会に課題があることが推測できた。加えて、東日本大震災の影響で過半数の対象者が「大規模半壊」もしくは「全壊」の被害をうけていた。修繕したが取り壊し、最終的に実家を移転した回答者が一定数いたことや、「全壊」のおよそ半数にあたる回答者が「北上町外石巻市内」に実家を移転したことなどから、やむを得ない理由で他出を余儀なくされた若者の存在が明らかになった。

次に、対象者の北上町との関わり方を考察した。アンケートの対象者のうち、北上町外在住者の全員が「年に 1 回」以上のペースで北上町に通っていることが明らかになった。その中には、震災の影響で北上町内に実家がない対象者も含まれる。若者が、何らかの形で北上町との関わりを保とうとする姿勢を伺い知ることができた。また、北上町への訪問目的では「お墓参りなどの先祖供養」が現住所問わず最も多かった。先祖を大切に作る習慣が若者の意識にも根付いているといえるのではないだろうか。ただし、訪問頻度の視点でみると、「先祖供養」より「帰省」「友人・知人に会う」「景色・雰囲気を感じよう」「親戚に会う」「祭やイベント」を目的とした訪問の方が頻度は高かった。足を運ぶ機会の多さや関わり方の展開可能性としては、「友人・知人に会う」や「景色・雰囲気を感じよう」「祭やイベント」を目的とした訪問に期待を寄せることができる。また、関わり方は現住所によっても異なることが明らかになった。訪問頻度では、現住所が北上町から遠くなるほど低くなることが示唆された。最も北上町から遠

い「宮城県外」在住者では「先祖供養」を目的とした訪問が最も多く、頻度の低さを裏付ける結果となった。一方、「北上町外石巻市内」は被災後、実家を町外に移転した回答者が多いため、「帰省」を目的とした訪問は比較的少なかったが、「景色・雰囲気をあじわう」や「神社」を目的とした訪問は比較的多かった。これは北上町により近いという条件から、非定期的で一人でも達成できるような自由度の高い目的が多くなったと推測する。それとは反対に、「石巻市外宮城県内」は頻繁に北上町に通うことはできない距離的な条件から「祭やイベント」を一つのきっかけとして訪問する人が多いといえる。とくに北上町では近年、“ツール・ド・東北”のエイドステーション³²が設けられたり、震災後に白浜地区に整備された“白浜ビーチパーク”³³で毎月ワークショップが開催されている。町外在住者にとってもオープンなイベントであるため、若者と地域のつながりにおいても期待することができる。

次に、若者にとって北上町が居住場所としてどのように意識されているかを探るため、理想の居住地条件を様々な角度から分析した。全体として、居住環境や生活に直接関係する条件が多く選ばれていたのに対し、それとはあまり関係のない娯楽やルーツ、文化、景観に関する条件を選択した回答者は少なかった。最も多かったのは「公共交通機関が充実している」で、次いで生活利便性に関する項目が並んだため、生活利便性に関して課題を抱える石巻市内は居住地としては理想ではないと捉えられていると考えられる。一方、「自然環境に恵まれている」を選んだ回答者も 22 人で、比較的多かった。北上町は生活利便性は乏しいが、「自然環境に恵まれている」という条件にはあてはまり、豊富な自然環境は北上町を理想の居住地として見出す要素と捉えることができる。ただし、生活にかかわる項目の中では「近所とのつながりが強い」も北上町の特徴と言えるが、選択した回答者は 6 人であり重要とされていなかった。その背景の解明はインタビュー調査に託したい。また、理想の居住地条件を職業別で比較すると、「無職・家事専業」は買い物や通勤・通学などの生活利便性に関する項目を優先しているが、「学生」は友人・知人との近さや思い出に関する項目を他の 2 者より優先していた。同年代でもライフイベントの経験の有無によって理想の居住地に関する意識が異なることが示唆された。さらに、理想の居住地条件を現住所別にみると、「自然環境に恵まれている」について「北上町内」在住者は回答者の割合が最も低かったが、「北上町外石巻市内」で最も多かった。「北上町外石巻市内」在住者の特徴はほとんどが震災で実家を被災し移転を余儀なくされたことや、北上町訪問目的では「景色・雰囲気をあじわう」という回答が他の現住所に比べて多かったことなどがあげられ、やむを得ない理由で離れた北上町を何らかの形で“追っている”姿勢があることが想像できた。一方、「家族が近くにいます」を理想の居住地条件に選んだ割合は「宮城県外」在住者で

³² ツール・ド・東北は、東日本大震災の復興支援、および震災の記憶を未来に残していくことを目的に 2013 年から毎年開催されている自転車イベントのこと。主催は株式会社河北新報社とヤフー株式会社。自転車コースの中にはライダーが休憩するためのエイドステーションがいくつかあり、北上町にも設置されている。エイドステーションのスタッフは地元住民を含んだボランティアで構成されており、住民による沿道の応援なども大会の見どころの一つとなっている。

³³ 白浜ビーチパークは、東日本大震災でほとんどの家屋が被害を受けた白浜集落の土地を利用して、2019 年 4 月にオープンした多機能公園。椅子やテーブル、自炊場が完備されており、夏季は海水浴場として、オフシーズンでもワークショップなどのイベントを定期的で開催している。イベントの多くは、北上地域復興応援隊や一般社団法人ウィーアーワン北上などが主催している。

最も高かった。「宮城県外」在住者の半数は「学生」であり、図 2-4 を参照しても「家族が近くにいる」は学生の回答者割合が高いことから、ここでは学生の回答が大きく反映されたと考えることができる。加えて、この場合の“家族”を定位家族と捉えるか、生殖家族と捉えるかは回答者によって異なるが、学生がイメージする家族であれば前者である可能性が高い。したがって、宮城県外に他出した学生でも、いずれは定位家族がいる地元に戻りたいと考えている回答者が多いと推測できる。

最後に、若者の意識上の「つながり」を考えるため、地元志向を把握した。全体としては、多くの対象者が北上町に対して肯定的な地元志向を持っていると考えてよいだろう。「北上町には関わりたくない、関わらないようにしている」という項目の平均値が最も低かったことは、町外在住者が何らかの形で関わりを持とうとしているという結果にも通じる。ただし、居住地としてはあまり肯定的に捉えられていない傾向があることがわかった。「北上町に対して不満に思うことがある」という項目では「北上町内」在住者や、「無職・家事専業」の平均値が高かったことから、“不満”は居住環境や生活利便性に関するものであると推測できる。加えて「無職・家事専業」は、全体的には平均値が高かった「北上町は落ち着く場所である」や「かけがえのない大切な地域だ」、「雰囲気や土地柄が気に入っている」の項目で平均値が最も低く、地元志向は否定的な傾向にあると言える。したがって、生活利便性に関する不満と地元志向には何らかの関係性があると推測することができる。さらに、地元志向を現住所別にみると「宮城県外」の平均値が最も高い項目が多く、北上町を肯定的に捉えている傾向があるということが出来る。とくに県外在住であるのにもかかわらず「一員としての実感がある」「いつか（これからもずっと）北上町に住みたい」の項目で最も平均値が高かった点に着目したい。前者は一見矛盾する結果となったが、背景は推測できなかったためインタビュー調査に託したい。後者は理想の居住地条件で触れた「宮城県外に他出した学生でも、いずれは家族がいる地元に戻りたいと考えている回答者が多い」という考察とも通じ、U ターンの可能性を見出すことができる。また、「宮城県外」在住者は「いろんな人に知ってほしい」の平均値も比較的高く、その背景には他出による多くの人との出会いがあると考えられる。したがって、地元志向には“他出経験”が関係していると推測することができる。一方、否定的地元志向のうち「思い出したくない、思い出さないようにしている」と「関わりたくない、関わらないようにしている」では、「石巻市外宮城県内」在住者の平均値が最も高く、北上町に対して否定的な志向が比較的高いということが示唆された。ただし、この背景はアンケート結果から推測することができなかった。

そして、北上町との関わりと地元志向の関係を把握するため、今でも連絡を取り合う北上町出身の友人・知人の数によって地元志向にどのような違いがあるか分析した。その結果、友人・知人との付き合いが維持されているか否かが友人・知人との意識上のつながりと関係していることがわかった。付き合いが維持されていて充実している人は全体の肯定的地元志向も高いことがわかった。反対に、「0 人」と回答した人では否定的地元志向が高いことがわかり、友人・知人との付き合いは「つながり」を考えるうえで重要な要素と捉えることができた。一方、北上町訪問頻度と地元志向の関係をみると、「月に 1 回」と回答し、訪問頻度が比較的高いと判断された回答者は肯定的地元志向が高い傾向にあり、「年に 1 回」で訪問頻度が比較的低いと判断

された回答者では否定的地元志向が高い傾向にあった。とくに、「北上町は住みやすい」や「いつか（または、これからもずっと）北上町に住みたい」などの居住に関する項目は、訪問頻度が高い人ほど高く評価されていた。直接的な関わりが居住意向に影響するものとして期待することができる。以上より、友人・知人とのつながりや訪問頻度の面で北上町によく関わりを持っている人は地元の北上町に対して肯定的志向をもっていることが示唆された。その因果関係や要因の詳細についてはインタビュー結果で触れることとする。

3. インタビュー結果

3-1. 対象者について

3-1-1. 対象者の属性、基本情報

インタビュー対象者の属性、基本情報を表 3-1 に示す。現住所の区分はアンケート結果で用いた 4 区分で、選定した 19 人の内訳は「北上町内」が 4 人、「北上町外石巻市内」が 3 人、「石巻市外宮城県内」が 6 人、「宮城県外」が 6 人だった。インタビュー対象者の ID (A～S) はその現住所が北上町に近い順に A から割り振ったものである。表の色分けはこの現住所別 (4 区分；「北上町内」は緑、「北上町外石巻市内」は青、「石巻市外宮城県内」は黄、「宮城県外」は桃) に設定している。なお、現住所と実家現住所を区別して記載しているものは、定位家族との別居を意味する。たとえば、G は北上町外石巻市内に妻と二人で暮らしており、定位家族は同じ北上町外石巻市内に別居している。石巻市外宮城県内と宮城県内の区分内における表示順は、定位家族が住む実家の場所が北上町に近い順に並べてある。他には性別、年齢 (インタビュー時)、職業 (インタビュー時)、出身学区、出身集落、被災程度、キョウダイ構成、配偶者・子の有無、町外居住経験 (北上町内在住者のみ)、北上町訪問頻度 (北上町外在住者のみ) を記載した。なお、I と Q はキョウダイ関係である。

表 3-1 対象者の属性、基本情報

ID	性別	年齢	職業	現住所	実家現住所	出身学区	出身集落	被災程度	キョウダイ構成 ※4	配偶者/ 子	町外居住 経験	北上町訪問頻度
A	男	24	会社員	北上町	北上町	相川	相川	一部損壊	A	無	×	／
B	女	24	無職・家事専業	北上町	北上町	橋浦	大須	大規模半壊	姉・B	有/有	○	／
C	女	24	会社員	北上町	北上町	橋浦	女川	一部損壊	兄・C	無	○	／
D	男	24	会社員	北上町	北上町	橋浦	本地	一部損壊	D・弟・妹	無	×	／
E	男	24	会社員	宮城県石巻市	宮城県石巻市	相川	小室	全壊	姉・E	無	／	2～3カ月に1回
F	男	22	会社員	宮城県石巻市	宮城県石巻市	吉浜	吉浜	全壊	F・妹・妹	無	／	月に1回
G	男	25	会社員	宮城県石巻市	宮城県石巻市※1	吉浜	追波	全壊	G・弟・妹	有/無	／	半年に1回
H	男	24	専門的職業	宮城県塩釜市	北上町	相川	相川	損壊なし	H・妹	無	／	2～3カ月に1回
I	女	25	会社員	宮城県仙台市	北上町	相川	大指	損壊なし	姉・I・弟・妹	無	／	月に1回
J	男	25	会社員	宮城県岩沼市	北上町※2	相川	小指	全壊	姉・J	無	／	2～3カ月に1回
K	女	24	専門的職業	宮城県仙台市	宮城県石巻市	吉浜	月浜	全壊	K・弟	無	／	年に1回
L	女	24	公務員	宮城県仙台市	宮城県石巻市	吉浜	月浜	全壊	兄・L	無	／	年に1回
M	女	22	専門的職業	宮城県大崎市	北上町・宮城県石巻市※3	相川	相川	全壊	M・妹	無	／	月に1回
N	男	24	公務員	山形県	北上町	橋浦	本地	一部損壊	N・弟・弟	無	／	2～3カ月に1回
O	女	22	学生	栃木県	北上町	相川	小指	全壊	O・弟	無	／	半年に1回
P	女	24	学生	東京都	北上町	橋浦	大須	大規模半壊	P・妹・弟	無	／	2～3カ月に1回
Q	男	23	会社員	神奈川県	北上町	相川	大指	一部損壊	姉・姉・Q・妹	無	／	半年に1回
R	女	22	学生	千葉県	宮城県石巻市	吉浜	白浜	全壊	兄・姉・R	無	／	半年に1回
S	女	25	会社員	東京都	宮城県石巻市	吉浜	追波	全壊	S	無	／	年に1回

※1. Gは北上町外石巻市内に妻と二人で暮らしており、定位家族は同じ北上町外石巻市内に別居している。

※2. Jは北上町の実家には誰も住んでいない。仏壇を置いておく目的で家を新築した。

※3. Mは両親と祖父母が別居しており、両親は北上町外石巻市内に、祖父母は北上町内に住んでいる。M自身は高校卒業まで北上町内の実家に祖父母と妹と同居。

※4. 左から生まれが早い順に掲載している。例) Aは一人っ子。Fは3人キョウダイの長男。Iは4人兄弟の次女。Iとキョウダイ関係にあるQは4人兄弟の長男である。

3-1-2. 対象者の居住移動、経歴、特徴

対象者の居住移動と経歴について、表 3-2 の一覧にまとめた。それぞれ上段が実家の新築・修繕の有無と移動、下段が対象者本人の居住移動と経歴を示している。色が実家や本人の現住所（4 区分；「北上町内」は緑、「北上町外石巻市内」は青、「石巻市外宮城県内」は黄、「宮城県外」は桃）を表している。線の区切りは、上段においては家屋の移り変わり、下段においては経歴の移り変わりを示している。

表 3-1 と表 3-2 から分かることとして、まず被災の有無と被災後の実家の居住移動について言及したい。19 人のうち、実家が「大規模半壊」及び「全壊」の被害をうけたのは B、E、F、G、J、K、L、M、O、P、R、S の 12 人だった。そのうち、北上町外に実家を移転したのは E、F、G、K、L、R、S の 7 人で移転先はすべて「北上町外石巻市内」で石巻市外に実家を移転した対象者はいなかった。その他の B、J、M、O、P は北上町内に残ったことがわかる。北上町外石巻市内に実家を移転した対象者の存在はアンケート結果で指摘した通りであり、特に同区域に住む E、F、G はアンケート結果の訪問目的や理想の居住地条件で触れた「北上町を何らかの形で“追っている”姿勢がある」に該当するのではないかと予想することができる。ただし、G は結婚というライフイベントを経験している点で E や F とは意識が異なることが予想される。

また、他出経験の観点で分かることとして、まず北上町内在住者は他出した経歴を持つ対象者が 4 人中 2 人（B、C）だった。両者とも県外には他出しておらず、地元に着定していると言える。ただし、B は G と同じく結婚というライフイベントを経験しているため、他の 3 者とは意識を異にする部分があると予想できる。一方、北上町外在住者には県外へ他出した経験を持つ人が多かった。

さらに、家督相続の理に沿えば、長男または一人っ子、姉妹の場合は長女が定位家族の元に残ることになる。19 人の中では A、D、E、F、G、H、J、M、N、Q、S の 11 人がそれに該当するが、現住所にはばらつきがあり、アンケート結果と一致した。

最後に、高卒で職に就いた対象者は A、C、D、E、F、N で、北上町内を含めた石巻市内に多かった。一方、O、P、R は学生であり、3 者ともに宮城県外在住である。

ここからは対象者 19 人のそれぞれの居住移動、経歴、特徴を紹介する。

表 3-2 対象者の居住移動と経歴

	被災程度	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
A	実家 本人	中学生	高校生	(新築)			会社員			
B	実家 本人	大規模半壊 (修繕)	中学生	高校生	専門学校	会社員	無職・家事専業			
C	実家 本人	一部損壊	中学生	高校生		会社員①			会社員②	
D	実家 本人	一部損壊	中学生	高校生		団体職員				会社員
E	実家 本人	全壊	避難(親戚宅)	高校生	(新築)		会社員			
F	実家 本人	全壊	(修繕)	中学生	(解体)	(新築)		会社員		
G	実家 本人	全壊	避難(北上中学校構飯設団地)	高校生	(母実家を改築)	4年制大学		専門職 ※実家と別。妻と2人暮らし。		
H	実家 本人	損壊なし	中学生	高校生	専門学校	会社員①	会社員②	会社員③		
I	実家 本人	損壊なし	(2009年に同集落の高台に家を新築)	高校生	4年制大学	(新築)		会社員		
J	実家 本人	全壊	高校生(姉宅)	実家なし	4年制大学			会社員		
K	実家 本人	全壊	避難所 中学生	仮設住宅	災害公営住宅	4年制大学		(新築)	専門職	
L	実家 本人	全壊	避難所	高校生	避難(親戚宅)	4年制大学		(新築)	公務員	
M	実家 両親 本人	全壊	(修繕)	(両親はMさんが小学生の頃から別居)	高校生		短期大学	専門職		
N	実家 本人	一部損壊	中学生	高校生	職業研修	公務員				
O	実家 本人	全壊	避難所	仮設団地(相川)	(新築)	4年制大学				
P	実家 本人	大規模半壊 (修繕)	避難所 中学生	高校生	4年制大学			大学院		
Q	実家 本人	一部損壊	(2009年に同集落の高台に家を新築)	中学生	高校生	4年制大学		会社員		
R	実家 本人	全壊	避難	仮設住宅	(新築)	高校生	4年制大学			
S	実家 本人	全壊	避難所	高校生	短期大学	母の叔母が一人で暮らしていた家に移住 転職が続く	会社員			

※それぞれ上段が実家の新築・修繕の有無と移動、下段が対象者本人の居住移動と経歴を示している。色が実家や本人の現住所(4区分:「北上町内」は緑、「北上町外石巻市内」は青、「石巻市外宮城県内」は黄、「宮城県外」は桃)を表している。緑の区切りは、上段においては家屋の移り変わり、下段においては経歴の移り変わりを示している。

【北上町内在住者】

○A [男、24 歳、会社員（メーカー系）、相川学区出身]

- ・被災程度：被災なし。2014～2015 年に新築、実家の場所は変わらず。
- ・経歴：石巻市内の高校を卒業後、就職。現在は、北上町内の実家に両親と同居し、石巻市内の職場に車で通勤中。町外に住んだ経験なし。
- ・特徴：一人っ子で、家を継ぐ前提で育ってきた。高校を卒業するあたりから、相川集落の消防団に所属。最近、石巻市のスポーツ推進委員³⁴にも就任した。

○B [女、24 歳、無職・家事専業、橋浦学区出身]

- ・被災程度：大規模半壊。修繕して今も住み続けている。
- ・経歴：石巻市内の高校を卒業後、仙台で一人暮らしをしながら専門学校に通う。東松島市でお菓子屋さんに就職するが、入社後半年で退職。結婚と出産を経験し、現在は北上の実家で定住家族と生殖家族と同居中。
- ・特徴：2 人姉妹の次女だが、姉が石巻市内の酒屋に嫁いだため、自身が名字を継ぐことになり、婿をとった。夫は毎日仙台市内に車で通勤しており、生活上の不便さを感じている。夫の転勤のタイミングで実家を出て行きたいと思っている。

○C [女、24 歳、会社員（医療系）、橋浦学区出身]

- ・被災程度：被災なし。
- ・経歴：石巻市内の高校を卒業後、石巻市内で一人暮らしをしながら整骨院で勤務。忙しさが原因で 2019 年に転職。現在は北上町内の実家で母、兄、祖父母と同居し、石巻市内の職場に車で通勤している。
- ・特徴：兄がいるため、イエを継ぐことはあまり考えたことはないが、北上の実家やお墓を大事にしていきたいという強い気持ちがある。また、北上の自然に関する話題への熱量が高く、自然がとても好きな気持ちが伝わってきた。

○D [男、24 歳、会社員（メーカー系）、橋浦学区出身]

- ・被災程度：被災なし。
- ・経歴：石巻市内の高校を卒業後、農協職員として働く。給料の低さや忙しさなどが原因で 2019 年に民間会社に転職。現在は北上町内の実家から通勤するが、近いうちに石巻市内へ引っ越し、初めて一人暮らしをする予定。
- ・特徴：将来的には、長男として北上町の実家に戻って住み続けることを考えている。地域行事の手伝いなどもしている。

³⁴ 石巻市の HP によると、スポーツ推進委員は、住民に対するスポーツの実技指導、その他スポーツに関する指導、助言を行う非常勤職員のことを指し、教育委員会が委嘱している。各地区（旧市町）より選出され、1 期につき 2 年で任務を行っている。A の話によれば、北上地区内では、公園の管理・設計に関する話し合いなどもあり、A も参加したことがある。

【北上町外石巻市内在住者】

○E [男、24 歳、会社員（水産系）、相川学区出身]

- ・被災程度：全壊。母を亡くす。親戚宅での避難生活を経て、石巻市河北町に現在の家を新築。
- ・経歴：石巻市内の高校を卒業後、水産加工工場に勤務。石巻市内の実家に父と祖父とで暮らし、職場には車で通勤している。深夜や早朝の勤務で不規則な生活が続いたため、現在は新しい仕事を探している。
- ・特徴：2～3 ヶ月に 1 回ほど北上町を訪れ、海を見たり、釣りをしに行く。「将来的に北上に別荘を建てたい」、「北上町民でもありたい」という発言があり、北上町は今でも好きなことが伺える。

○F [男、22 歳、会社員（材料系）、吉浜学区出身]

- ・被災程度：大規模半壊。被災後、修繕したが災害危険区域に指定され、石巻市河北町に新築。
- ・経歴：石巻市内の高校を卒業後、民間会社に勤務。現在は両親、祖父母、妹と同居しているが、近いうちに石巻市内のアパートを借りて婚約者と同居する予定。
- ・特徴：被災直後の避難生活や修繕後の移転など、居住を転々としてきた。北上町には比較的高頻度で訪問し、自然アクティビティや友人とのコミュニティの面で関わりをもっている。

○G [男、25 歳、会社員（医療系）、吉浜学区出身]

- ・被災程度：全壊。被災後、仮設住宅での暮らしを経て、石巻市河北町に元からあった母の実家を改装し、家族全員で引っ越した。
- ・経歴：石巻市内の高校を卒業後、栃木県の 4 年制大学に通う。大学卒業後は石巻市内の病院に勤務。結婚を経験し、現在は石巻市内に妻と 2 人で同居中。2020 年春に子供が生まれる予定。
- ・特徴：北上町の生活利便性の低さや今後の発展が見込めないことを指摘し、北上町には期待を寄せていない。北上町に対し特別な感情は持っていないが、半年に 1 回訪問し、思い出に浸ることはある。

【石巻市外宮城県内在住者】

○H [男、24 歳、専門的職業（建築系）、相川学区出身]

- ・被災程度：被災なし。
- ・経歴：石巻市内の高校を卒業後、山形の職業訓練校に通い、建築士の資格を取る。数年間、職場を転々とし、1 年ほど前から塩釜市内の建築会社に勤務。現在は塩釜市に一人暮らししている。
- ・特徴：北上町は嫌いではないが、北上町における家族、友人、近所との関係が希薄で、地元に戻るモチベーションはあまりない。

○I [女、25 歳、会社員（アパレル系）、相川学区出身]

- ・被災程度：被災なし。震災前（2009 年）に高台に家を新築していた。元の家は、震災当時、家族の生業である漁業の作業場・加工場になっていたが、津波で流された。
- ・経歴：石巻市内の高校を卒業後、東京で一人暮らしをしながら 4 年制大学に通う。大学卒業後、仙台で就職。現在は一人暮らし。4 人キョウダイの次女で、Q の姉。
- ・特徴：特に目的はないが、実家には高頻度で帰っている。友人と会うことが多く、この学年の相川学区の友人同士の結束は強い。J もその一人。実家は漁業を生業とするが、とくに縛りはなく、自由に進路選択をしてきた。

○J [男、25 歳、会社員（金融系）、相川学区出身]

- ・被災程度：全壊。母を亡くす。北上町には仏壇を置くためだけの家を、小指集落の集団移転地に新築。普段は、その家には誰も住んでいないが、近くに住む叔母が様子を見に来る。お盆や彼岸に親戚が集まる拠点にもなっている。
- ・経歴：石巻市内の高校を卒業後、東京の 4 年制大学に通う。大学卒業後は東北全域に拠点を置く金融機関に就職。現在は岩沼市に一人暮らしで、同市内の職場に通う。
- ・特徴：東京に住む憧れがあったが、家族・親族や自身のこれからのことを考えて戻ってくることを選択した。相川学区の友人コミュニティ（I 同様）は結束力が強く、定期的に集まっている。

○K [女、24 歳、専門的職業（医療系）、吉浜学区出身]

- ・実家：全壊。被災後、月浜集落のお寺で避難生活（1 か月）、石巻市内河北町の二子地区の親戚宅で避難生活（2 年間）、同地区仮設住宅（1 年間）、石巻市河南町蛇田地区の災害復興住宅（3 ～4 年間）と転々とし、2018 年に蛇田地区に新築。母と弟が暮らす。
- ・経歴：石巻市内の高校を卒業後、仙台で一人暮らしをしながら 4 年制大学で看護を学ぶ。大学卒業後、仙台市内の病院に看護師として勤務。現在も仙台市内で一人暮らしを継続している。将来は保健師になることを目指している。
- ・特徴：北上町で暮らしていた時の家族関係や友人関係で悩んだことがある。総じて、北上におけるコミュニティの狭さ、人間の価値観の狭さに嫌悪感を持っているが、自然や思い出など好きな面もある。

○L [女、24 歳、公務員、吉浜学区出身]

- ・被災程度：全壊。被災後、月浜集落のお寺で避難生活をした後、石巻市内河北町の親戚宅に居住。2018 年の暮れから石巻市河北町の二子地区に家を新築。
- ・経歴：石巻市内の高校を卒業後、岩手県の 4 年制大学に通う。大学卒業後は研修を経て、宮城県仙台市で一人暮らしをしながら、公務員として勤務している。

- ・特徴：二子地区の実家周辺には元の北上町の顔見知りが多く住んでいる。また、父が仕事で北上に通っているため、北上町の知り合いとも情報交換できている。もとの近所同士の関係性は何らかのかたちで保たれており、本人もその恩恵を感じている。

○M [女、22 歳、専門的職業（医療系）、相川学区出身]

- ・被災程度：全壊。修繕し、現在は祖父母が住んでいる。両親は M が小学生の時から石巻市内に別居しているが、M は震災後も中学、高校と北上町内の実家から通学した。

- ・経歴：石巻市内の高校を卒業後、仙台で一人暮らしをしながら、短期大学で看護を学ぶ。2019 年度から大崎市内に移り住み、同市内の病院で看護師として勤務。

- ・特徴：被災をして、石巻市内の両親の元へ移る可能性があったが、本人は自分の意志で北上町に残ることを決めた。友人たちと共に震災を乗り越えた意識があり、北上町には帰属意識がある。しかし、北上町の実家には祖父母しか住んでおらず、いずれ石巻市内の両親の家が拠点になる事実を受け入れなければいけないと思っている。

【宮城県外在住者】

○N [男、24 歳、公務員、橋浦学区出身]

- ・被災程度：被災なし。

- ・経歴：石巻市内の高校を卒業後、研修を経て、山形で公務員として勤務している。今後、東北の全域内で転勤が考えられる。

- ・特徴：長男だが、家督相続に関しては自由な風潮でイエ意識はない。しかし、将来的に北上町に戻りたい意識はある。北上の静かで落ち着く環境は気に入っているが、誇りには思っておらず、北上のまちづくりに対しては限界があると感じている。

○O [女、22 歳、学生、相川学区出身]

- ・被災程度：全壊。被災後、相川保育所で避難生活をし、知人宅や仮設住宅を転々として、2016 年に、元の小指集落のすぐそばにできた小指団地に家に移転・新築した。

- ・経歴：石巻市内の高校を卒業後、栃木県にある 4 年制大学へ通っている。

- ・特徴：半年に 1 回の頻度で北上町の実家に帰省。長女だが弟が家を継ぐ前提であることから、将来的に北上町に住むつもりはない。

○P [女、24 歳、学生、橋浦学区出身]

- ・被災程度：大規模半壊。修繕し、現在は両親、祖父母、弟が住んでいる。

- ・経歴：石巻市内の高校を卒業後、仙台市内の大学で看護学を学ぶ。大学卒業後は東京の大学院に通い、助産師を目指して勉強している。2020 年春から東京で働くことが決まっている。

- ・特徴：語り部活動をした経験もあり、北上町以外での経験や外部者との接触が豊富。様々な経験をし、複合的に北上町への愛着が醸成された。定期的に帰省し、都会にはない北上町の自然や雰囲気をあじわっている。

○Q [男、23 歳、会社員（IT 系）、相川学区出身]

- ・被災程度：被災なし。（キョウダイ関係の I と同じ。）
- ・経歴：石巻市内の高校を卒業後、千葉の 4 年制大学に通い、卒業後は神奈川で大手民間会社に勤務。将来的に教員になりたいという夢を持っている。
- ・特徴：4 人キョウダイの長男ということもあり、将来の居住場所や生殖家族のことをしっかり考えている。将来的に北上町に戻りたいという確固とした意志はないが、自分の原体験に即しながら北上町における環境はプラスに評価している。

○R [女、22 歳、学生、吉浜学区出身]

- ・被災程度：全壊。被災後、親戚宅や仮設住宅を転々とし、2014 年 11 月に石巻市河北町に新築。
- ・経歴：石巻市内の高校を卒業後、千葉県の 4 年制大学に通い、福祉について学ぶ。2020 年春から千葉県内の病院で福祉相談員として勤務することが決まっている。東日本を管轄するグループ会社のため、その範囲内で転勤がある。
- ・特徴：3 人キョウダイの末っ子だが、家督相続に関してキョウダイ間の交渉があり、自身もよく考えている。北上町の友人や土地に愛着を持っており、地元にも拠点を置く会社を職場として選んだ。

○S [女、25 歳、会社員（インフラ系）、吉浜学区出身]

- ・被災程度：全壊。被災後、およそ 3 か月間、北上中学校体育館での避難生活が続いた。その後、母の叔母が一人で暮らしていた家に移住。母、祖父母、母の叔母が同居している。
- ・経歴：石巻市内の高校を卒業後、仙台の短期大学で保育を学んだ。その後、関東で保育所に勤務したがイメージとそぐわず退職。引き続き関東で派遣社員として様々な職を経験し、現在はインフラ会社に勤務。
- ・特徴：北上には思い入れがあり、決して嫌いではないが、価値観の強要や狭さに疑問を抱いていた。その点で、東京での生活は心地がよく、これからも住み続けるつもりだ。また、「北上にもし家があったらもっと高い頻度で帰っていたかもしれない」と語り、現在の石巻市内の実家にはめったに帰らない。

3-2. 分析方法

3-2-1. 若者と北上町のつながりの媒体を抽出するコーディング

本研究では、若者と北上町のつながりの実態、およびその育み方を明らかにするため、インタビューによって得られた語りを整理する必要があると判断した。したがって、インタビューデータは、コーディングという方法で分析を行った。コーディングは、データに 5~10 字程度のコードをつけていく作業で、そのコードはデータの内容を簡潔に表すものを設定する。したがって、第一段階の分析として、19 人すべての語りを文字に起こしたうえで、語りをある程度のまとまりに分類する目的でコーディングを行った。この際、類似したコードが複数作られていないか、さらに細分化できるコードはないか、などを確認しながら繰り返しコーディングを行い、最終的に 118 のコードができた。なお、このコーディングの作業には MAXQDA (Release11.1.4) を用いた。

次に、つくられたコードに着目し、コードの分類を行った。このとき、インタビューの中で対象者が“北上町への志向”や“現在の北上町との関わり方”を語る際、軸となっていたものに着目して分類を行った。その結果、コードは大きく [友人・知人に関する語り] [近所づきあいに
関する語り] [空間としての「家」に関する語り] [家督相続に関する語り] [家族に関する語り]
[先祖に関する語り] [北上町の自然に関する語り] [北上町の地域の歴史・文化に関する語り]
[北上町での思い出に関する語り] の 9 つに分類できた。これら 9 つは、先述したように、対象者がインタビューの中で“北上町への志向”や“現在の北上町との関わり方”を語る際に軸となっていたものである。したがって「友人・知人」「近所」「空間としての家」「家督相続の習慣」「家族」「先祖」「自然」「歴史・文化」「思い出」の 9 つは、北上町と若者のつながりを媒介する“媒体”と判断することができた。

ここで、これら 9 つを北上町と若者のつながりを媒介するもの、という視点で見たとき、9 つに分類されたコードと語りの内容が適切かどうかを再考した。その中から、現時点における対象者と北上町の間を考えると関係がないと考えられる語りは除外した。とくに [北上町での思い出に関する語り] は、ただ単に北上町での思い出を振り返る語りが多く、思い出自体が現在の対象者本人に何らかの影響を与えていると判断できない語りは分類から除外した。

また、118 のコードのうち、これら 9 つの媒体に分類できなかったコードもある。これらは 19 人の語りをコーディングした際に、整理するために便宜上設定したコードである。例えば、「ライフイベントによる意識の変化」、「居住場所の考慮事項」、「まちの変化に対する不満」、「生活利便性」、「他出経験」などである。なお、次に紹介する第二段階目の分析では、これらのコードも用いている。

3-2-2. コードの分類とコードの関係性の分析

以上より、インタビュー結果ではこの9つの媒体（①友人・知人、②近所、③「家」、④「イエ」、⑤家族、⑥先祖、⑦自然、⑧歴史・文化、⑨思い出）に着目し、これらを媒介とした若者と北上町のつながりの実態とその形成要因を明らかにする。したがって、第二段階目の分析はそれを明らかにする目的で、118のコードを9つの項目ごとに、【実態】と【形成要因】の2つの枠組みで分類した。【実態】には、媒体が対象者によってどのような文脈で語られたかを示すコードを分類し、【形成要因】には、その【実態】を形成した要因に関するコードが分類されている。分析結果で用いる図（図3-1から図3-9）では、それらのコード同士を線で結び、関係性を示している。この、【実態】と【形成要因】の分類ならびに関係性の分析は、“対象者一人ひとりの語りの文脈”と“対象者の属性や経歴”を十分に念頭に入れながら、筆者の視点で行ったものである。なお、118のコードのうち、分析に用いなかったコードや、9つの分析で繰り返し用いたコードもある。また、分析結果の図のコードの下のアルファベットはコードについて言及した対象者であり、アルファベットがついていないコードは、詳細コードを分類する際に設けた上位コードである。

さらに、【実態】と【形成要因】を明らかにしたうえで、それぞれの媒体が北上町と若者のつながりに果たす【役割】と、それぞれの媒体で若者と北上町のつながりを維持・充実させるうえでの【課題】を考察した。よって、次節以降では、①～⑨の各項目内に【実態】、【形成要因】、【役割】、【課題】に関する4つの小節を設けている。

なお、これ以降使用する「北上町と若者のつながり」という言葉は、9つの項目が“北上町への志向”や“現在の北上町との関わり方”を語る際に軸となっていたものであることを踏まえ、“志向”という意識上のつながり、および具体的な“関わり”のどちらの意味も含むものとして使用している。

3-3. 分析結果

3-3-1. 友人・知人を媒介とした若者と地域のつながり

3-3-1-1. 友人・知人と若者の関係の実態

はじめに、若者は友人・知人を介して、北上町とどのようなつながりをもっているのかを見ていきたい。そのために、まず、北上町と若者のつながりを媒介すると考えられた友人・知人は、対象者によってどのような文脈で語られたのかを明らかにした（図3-1）。その結果、若者と友人・知人の関係の実態は、大きく4つに分類できた。

1つ目は、比較的「定期的に会う」という実態である。ただし、会う場所に注目してみると、IとJは「北上で会う」のに対し、D、M、O、Rは「石巻、仙台で会う」と述べた。「北上で会

う」では、例えば J が次のように語り、同学年の相川学区の友人同士で定期的に集まっていることを示した。

J の語り

「相川の同級生は（北上町に）ほとんど残ってると思う。外に出てる人の方が少ないけど、バーベキューはそういうの関係なく年に 1 回集まる。毎年やってんの、小室の海岸で。みんな楽しいの好きな人だちばかりだから」（コード：「定期的に会う」「北上で会う」）

一方、D、M、O、R は友人に会うにしても北上町ではなく、石巻市内の市街地や仙台で集まると述べた。D は北上町内在住で近くに住む同級生と会う時も市街地に足を運ぶという。アンケート結果では、北上町への訪問目的では「友人・知人に会う」が比較的多かったが、そもそも北上町を拠点に会っているとは限らないことが明らかになった。

反対に、「会わない」傾向にある人はほとんどが「関わりが希薄化」していると述べた。ただし、L、M、R は、希薄化しているものの「定期的に会う」と述べており、友人・知人は「特別な存在」、「居心地の良さ」を感じるとも述べている。「もともと希薄」だったと述べたのは E、H、K の 3 人で、「SNS」を通じたつながりについて触れたのは L、M の 2 人だった。L と M はともに「関わりが希薄化」しているとも述べ、「SNS」はその関係性を補完する役目を担っていると考えられる。

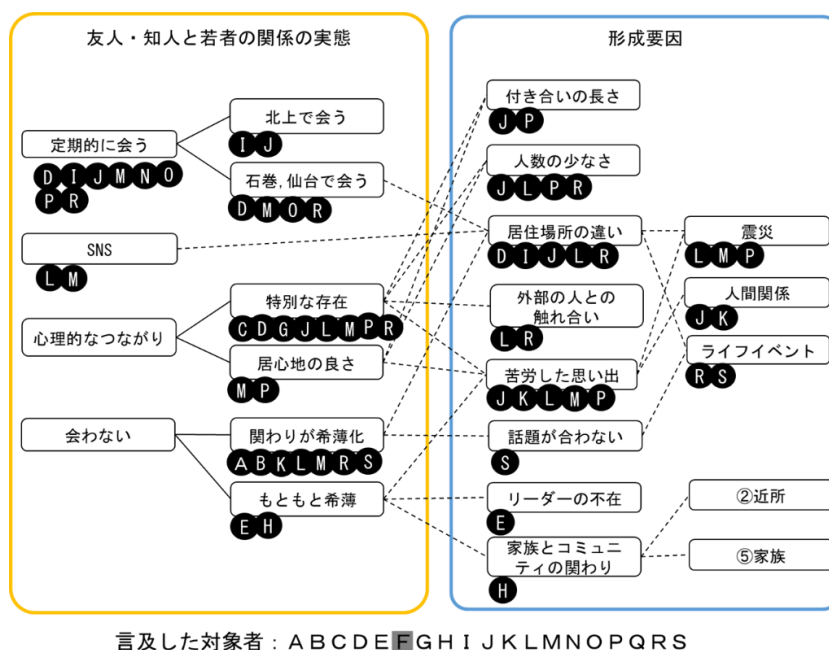


図 3-1 友人・知人と若者の関係の実態とその形成要因

3-3-1-2. 友人・知人と若者の関係の形成要因

では、友人・知人との関係の違いは、何が要因となっているのだろうか。

まず、会う場所に関わらず「定期的に会う」と述べた人は、同時に「心理的なつながり」をもっていると述べた人が多い。D、J、L、M、P、R がそれに該当する。そしてその「心理的なつながり」の形成要因を分析すると、「付き合いの長さ」、「人数の少なさ」、「外部の人との触れ合い」、「苦労した思い出」が原因となっていることがわかった。たとえば R は次のように述べ、友人・知人との心理的なつながりを実感している。

R の語り

「北上で良かったな、ってめっちゃ思います。成人式とかでみんなで集まったときに、なんかみんないい人だなって思いました。高校でいったん他の人に触れたから分かったんだと思います。中学校の時は嫌だったんですよ。30 人しかいねえし、みたいな。でも後から考えたらよかったなって。イメージ的には大きい学校ってギスギスしてそうじゃないですか。でも（北上は）いじめとか遭遇したことないし。」（コード：「特別な存在」「人数の少なさ」「外部の人との触れ合い」）

また、「心理的なつながり」の形成要因のうち、「苦労した思い出」は小・中学校での「人間関係」に関する語りと「震災」に関する語りに分けられた。例えば「震災」は、M が「みんなで乗り越えた」、P が「その経験を一緒に経験した人がいて、それ分かってくれる人がいて、っていうのはすごく嬉しい」という文脈で語られ、東日本大震災は友人・知人との心理的なつながりを考える上ではプラスの影響を及ぼしていた。また、小・中学校での「人間関係」で「苦労した思い出」があると話す J と K を見てみると、J は「定期的に会う」と話しているのに対し、K は「会わない」と述べている。

K の語り

「まあ当時の北上中学校（のうちの学年は）人間関係悪かったもんね。だからそういうの考えると（みんな）心優しいとは思えないんだ。若い故っていうのもあると思うけど、まあ、別に、特別いいと思わない」（コード：「苦労した思い出」「人間関係」）

J の語り

「（北上中学校と相川中学校が）一緒になった時だったから仲悪かったよね。今でこそ友達と話すけどさ、マジで仲悪かったからね、うちの学年。中 2 のキかねえ（気が強い、従順でない）時に（一緒に）なったからね。」「相川中学校がね、みんなたぶん大好きだったんだよ。あの平屋の木造校舎ね。みんな（統合するのが）嫌だったね。」「この同級生は特別っていうか、もう家族みたいな感じ。みんなそれは言ってる。そんぐらい仲いいから」（コード：「苦労した思い出」「人間関係」）

Jは、中学1年生の時まで相川中学校に通っていたが、中学2年生の時に相川中学校と北上中学校が統合し、それから北上中学校の校舎に通う生活が始まった。Jによれば、元の2つの中学校の生徒の間には対立があり、その過程でIも含む相川学区の同級生らとの絆が生まれたと考えられる。この時点では、Kとの明確な違いを見出すことはできなかったが、現在の友人・知人との心理的なつながりには、震災で友人・知人と苦労した経験を含め、団結したり、深い話をし合ったりなど、友人・知人と“思い”を共有する経験が影響していると考えられる。

一方、「会わない」傾向にある人の背景は何だろうか。図にあるように、多くの対象者が「関わりが希薄化」していると述べ、それぞれの「居住場所の違い」や学業・職業の忙しさなどを原因として挙げた。「居住場所の違い」は、それぞれの進学・就職の違いだけが原因でなく、「震災」の影響もある。

Lの語り

「(北上に行ったところで) 友達がいるわけでもないし、お墓行って、お寺行って、かな。
(北上の友達とは) 会わないなあ。高校から家離れたからあんまり会わないなあ」(コード:「関わりが希薄化」「居住場所の違い」「震災」)

また、「ライフイベント」の経験の違いが、話題のずれ違いを生んだと感じている対象者もいた。

Sの語り

「なんか(地元の) 仲いい子、みんなもう結婚しちゃってほとんど子供もいるし、集まっても話題が全然合わないの。昔話は全然盛り上がるけど、みんなローンがどうのとか旦那がどうのとか。私は、もっとこういう働き方したいんだけどさ、とか自分の悩みなんだよね。だからわざわざ帰ろうって思わないかもしれない。」(コード:「関わりが希薄化」「話題が合わない」「ライフイベント」)

アンケート結果でも、ライフイベントの経験の違いによって意識が異なるという結果がもたらされたが(2-4-2)、この語りはそれを裏付けることにもなった。ライフイベントの違いは、同学年の友人・知人の間に一種の“壁”を作る要因になり得るのである。

一方、「もともと希薄」と述べたEは「集める人がいない、リーダーシップとる人がいないんだと思う」と述べ、「リーダーの不在」を指摘した。この発言は学年や学区、集落ごとに特色があることを示唆している。

そしてHは、自身の友人との関係の希薄さは、「家族と(地域)コミュニティの関わり」に起因するのではないかと考えている。

H の語り

「あんまり、ちっちゃい頃地元のコミュニティに混じれなかったっていうのも、実はそんなに俺、小学校の人と仲が良い感じじゃなくて。親とかにもよるところも大きいのかもしれないけど。相川の人たちって海やってる人とか自営やってる人とか多いからそういう人たちの結束は強いのかもしんない。そこに入れる人たちってのは仲良くできんだけど、そうじゃない人たちはそうでもないのかなって。」「やっぱり帰っても何もすることないよなって結局一人になっちゃう。」(コード:「もともと希薄」「家族とコミュニティの関わり」)

H 自身の考えは、家族とコミュニティの関係性が若者と友人・知人の関係性の元になっていることを示唆している。⑤家族のあり方が大きな役割を果たしていることについては他の項目の解説でも触れる。

3-3-1-3. 友人・知人が若者と北上町のつながりに果たす役割

次に、これまで見てきた若者と友人・知人の関係が、北上町と若者のつながりに果たす役割について考察する。ただし、①友人・知人に分類された語りからは、それを示す明確な語りは見当たらなかった。しかし、アンケート結果では北上町訪問目的で「友人・知人に会う」と回答した人が 43 人中 18 人で比較的多かったことが明らかになっており、インタビューでも I や J が小室集落の海岸でバーベキューをすることがあるといった事実が明らかになった。このことから、友人・知人と若者の関係の維持は、若者が北上町に直接的な関わりをもつきっかけになることが分かり、その関係維持の重要性を指摘することができる。

また、居住場所の違いなどから直接的な関わりが少ない対象者にとって、心理的なつながりそのものが「拠り所」としての意識や「帰属意識」につながっているケースもある。その例として L や P の語りが挙げられる。

L の語り

「北上出身はもちろんなんだけど、石巻出身ってなると大学のとときとか今の職場とかもだけど、同じ出身とかだとなんかもうそこだけで飲みに行こうか、とかできるから。帰属意識じゃないけど。北上の人とは余計そういう感じがする」(コード:「特別な存在」)

P の語り

「私のことをちっちゃい頃とかすごい長い間知ってくれてる人がいて、私が私のことをわけ分かんなくなったときに、私のことを私より理解してくれてる人がいるっていうので、付き合いの長さなのかもしれないけど、人も少なかったし一人一人と関わる時間が長かったのかもしれないし、だから知ってることも多いしって考えるとやっぱり違うな

と思う。同じところに住んで（感覚的なことが）なんとなく分かることも多い。そういうのってやっぱりいいあって」（コード：「特別な存在」「居心地の良さ」）

3-3-1-4. 友人・知人を媒介に若者と北上町のつながりを維持・充実させるうえでの課題

次に、友人・知人を媒介に若者と北上町のつながりを維持・充実させるうえでの課題について考察する。これまでの分析から、友人・知人を介した若者と北上町のつながりを維持・充実させるには、震災やライフイベントによる居住場所の違い、あるいは学区・学年ごとの違いなどが鍵となりそうであることが分かった。しかし、これらは不可抗力であり、そこから具体的な課題を見出すのは難しい。しかし、改善の余地があると考えられる課題も2つあった。1つ目は若者が集まる場所についてである。北上町内において居住場所がバラバラになってしまった若者たちを集める拠点としての場所があれば、直接的な関わりを増やすことができる。また、北上町に住んでいる友人同士がわざわざ石巻の市街地や仙台で会うという現状を改善することができ、関わりの頻度や関わりやすさにつながることを期待できる。2つ目は、親とコミュニティの関わり方である。Hは自分自身が友人同士のコミュニティに馴染めなかった原因を自営業の存在にまで言及している。親がコミュニティに馴染んでいるか否かという意味では、友人・知人とのつながりを醸成するうえで、家族と近所の関係性は重要なものであると考えることができる。

3-3-2. 近所を媒介とした若者と地域のつながり

3-3-2-1. 近所と若者の関係の実態

インタビューでは、若者から北上町の近所づきあいについて言及があった。元来、北上町は近所同士のつながりが強く、その環境の中で育ってきた若者たちは近所に対してどのような認識をもっているのだろうか。まずは、その実態について見ていきたい（図3-2）。

まず、直接的な関わりとしては、何らかの形で「関係維持」しているケースが目立った。例えば、北上町内在住のA、Dは、集落の伝統行事に参加している。中でもAは相川集落の消防団やスポーツ推進委員に所属しており、近所との関係性もより強固だった。一方、東日本大震災による被災、移転などがあった北上町においては近所同士のコミュニティの維持が課題となっている。そのような中、対象者からは今でも「変わらず受け入れてくれる」という語りがあった（I、L、O、Q、R）。例えば、Oは小指集落出身で家を被災し、震災後、もとの小指集落のすぐそばにできた小指団地に家を移転した。小指団地にはもとの小指集落の住民がそのまま移転したため、Oは「みんな知ってる人だし、帰って挨拶してもそのまま世間話が始まるし」と、帰省するたびに変わらない付き合いがあることを感じている。また、「変わらず受け入れてくれる」と語った対象者のうち、とくにLの事例を見てみたい。Lは、実家の移転先の石巻市河北

町二子団地³⁵について「近所の人とか仲いいし。今でも可愛がってくれるから、それはすごい思う。周りとかのつながりは大きいから。帰ったときとか、実家の周りが知ってる人だと安心する」と語る。移転先の二子団地には、決して元の集落のコミュニティがそのまま移転したわけではないが、顔見知りのいる環境にとっても満足しているようだった。また、先祖供養の目的で以前住んでいた月浜集落を訪れた時に近所との関係の維持を実感したエピソードについても話してくれた。

L の語り

「この前もおいしいもの食べさせてもらった。『(家の) 裏でタケノコ獲れて煮たから食べて』って。」「やっぱ良くしてもらった。町の人に今でも良くしてもらえるしっていうのはあるかな。周りもいい人だったから、まあ人に恵まれたからっていうのもあると思う」(コード:「変わらず受け入れてくれる」)

L は、実家が町外に移転して約 8 年経った今でも変わらない付き合いがあることに、有難さを感じているようだった。

さらに、L の父親は今でも仕事で北上に通い続けているため、「情報交換」ができているという。L の父親は震災以前から自営業でプロパンガスの配布、点検を行っており、二子団地に移転した今でも北上町に通い、家々をまわっている。したがって、父親を介した知人同士の情報交換がされている。事実、他の対象者 M にインタビューした際、M の北上町内の自宅のガスも L の父親の管轄範囲であるため、M 自身も L の父親と直接話をすることがあるという。つながりを維持する「キーパーソン」の存在があるいうことができる。

一方、直接的な関わりについて言及はなかったが、意識的な部分で近所に対してポジティブな印象をもつ対象者もいた。全体的に「あたたかい」や「助け合いができる」、「子供にやさしい」といった語りが多かった。しかし、「わずらわしい」、「なじめない」といったネガティブな印象をもつ人もいた。さらに、K は「長くいると嫌になっちゃう」と述べ、「一定の距離を保ちたい」と思っている。

³⁵ 二子団地は、北上町からおおよそ 20km ほど離れた場所にある比較的大きな集団移転地。河北町や雄勝町、北上町の各地区から約 320 世帯が移り住んだ(石巻かほく 2019 年 3 月 11 日朝刊記事より)。3 つの元町民は、それぞれの町ごとにある程度まとまって住んでいる。

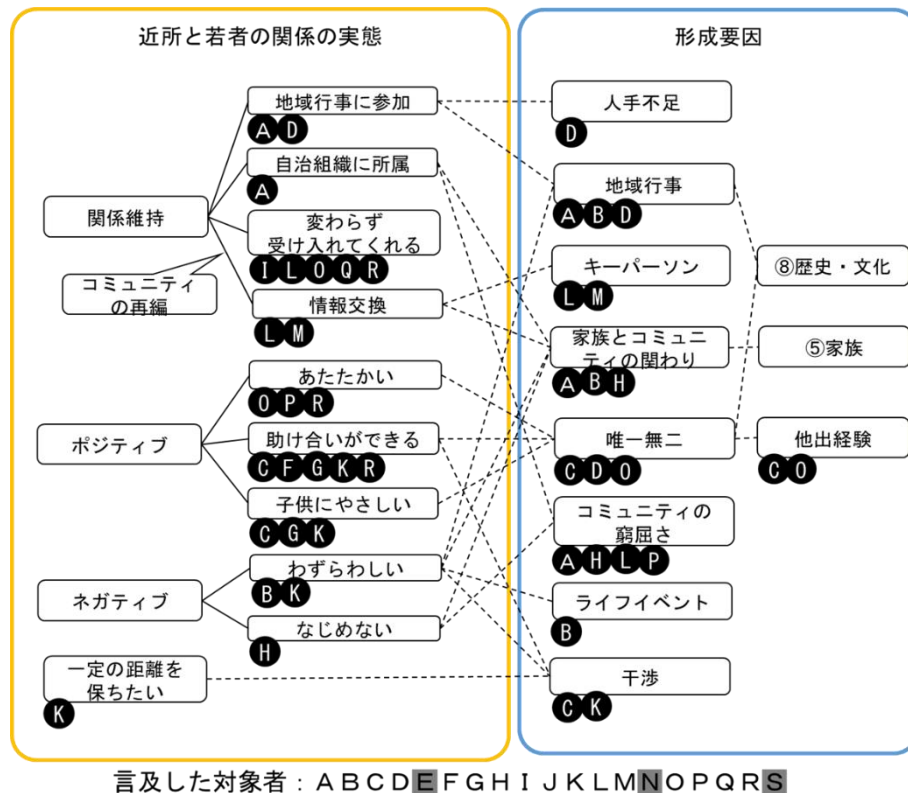


図 3-2 近所と若者の関係の実態とその形成要因

3-3-2-2. 近所と若者の関係の形成要因

次に、これまで見てきた近所と若者の関係の実態が形成された要因に着目する。

まず、A や D が「地域行事に参加」して直接的な関わりを持つことができた背景には、「地域行事」そのものの存在があることは言うまでもないが、D からは「人足りないから（参加している）」（コード：「人手不足」）という語りがあった。D 自身は、後述するように行事の担い手になることには決して消極的ではないため、「人手不足」は良いきっかけになっていると捉えることができるが、裏を返せば地域行事の存続が危うい状況が明らかになった。この課題については⑧歴史・文化の項目で改めて述べたい。

一方、A や D が積極的に参加しているのに対し、同じく北上町内に住む B は近所づきあいに多少のわずらわしさを感じている。

B の語り

「文化が激しいというか。しぼりみたいなの。お祭り行事とかの地域のやつに参加しなきゃいけないとかあるじゃない」「(家族は) お祭りとかそういうのはやるもんだと思ってる。本人たちはめんどくさいとは思ってるけどね。やんなきゃいいじゃんって思うんだけど」「まあ (私は) やんないけど。(そう思い始めたのは) 結婚してからかな。旦那も嫌だと言っててる」(コード：「わずらわしい」「ライフイベント」)

B は、家族のネガティブな言動に加え、結婚という「ライフイベント」を通して担い手の立場になったことで心境の変化があったという。ライフイベントの経験は近所付き合いの捉え方に影響すると考えることができる。

また、その B の例や先述した L の父親の例に見るように、若者にとっては、家族がどれだけ地域コミュニティと関わりがあるか、家族が近所付き合いをどう捉えているかが鍵となりそうだ。それを示す代表的な事例が A である。地元の消防団に所属する A は「家族とコミュニティの関わり」のおかげで今があると語った。

A の語り

「地域の雰囲気とかもあるけど、その辺は俺の親っていうか自分の家の人たちも周りからそんなに悪い印象もたれてないってのもあって、良くしてもらえてるっていうのもあって、仲良くできてるかな。地域行事とかも楽しいし、いい感じだよ。親が頑張ってたからね。親もだけど、俺の周りの人が入りやすいような環境を作ってくれてるから。だって幼稚園とか小学生の俺に対して、高校生とか大人の人たちがスっかけてくれる（ちょっかいをかけてくれる）わけだから。楽しいおっちゃんおにいちちゃんみたいな感じで。その関係が今でもずっと続いてるって感じ。」（コード：「地域行事に参加」「自治組織に所属」「地域行事」「家族とコミュニティの関わり」）

この語りから、改めて家族とコミュニティの関係が若者と近所との関係性を育むものとして重要であることがわかる。

一方で、「コミュニティの窮屈さ」を感じているという語りは多くの対象者で見られた。A は消防団について、「この前 4 個下の子が入ってきた。そいつが一番年近い。消防団も結局知り合いつながりで入ってきてるから『入れよ、入れよ』みたいな感じで」と述べる。彼の言う「知り合いつながり」というシステムは、組織の中においては発言しやすい雰囲気を作るなどの良い影響もある。しかし、裏を返せば①友人・知人で前述した H の例に見るように、“知り合い”以外がコミュニティへ入りづらい状況を生み出していると言える。事実、H は近所同士のコミュニティに対しても「なじめない」と思っている。

一方、「他出経験」が地域コミュニティへのポジティブなイメージを生み出している事例も見られた。例えば O は、北上町における地域コミュニティについてポジティブなイメージを述べた上で、他出先の栃木で感じたことを話してくれた。

O の語り

「周りの人がみんな家族みたいで、距離がちかいし」「栃木に行ってちょっとびっくりしたのはご近所付き合いがちょっと薄い。こんなに違うんだって思ったところなので。（北上町の近所づきあい）あんまり好きじゃないって人もいるけど、私は好きでした」（コード：「あたたかい」「唯一無二」「他出経験」）

O の語りからは、“他出”が、北上の近所づきあいを客観的に見つめる機会になっていることが伺える。アンケート結果においても地元志向の中で「北上町のことをいろんな人に知ってほしい」の評価は「宮城県外」在住者で最も高かったため、地元志向には“他出経験”が関係しているという考察と合致する。

最後に、地域コミュニティに対してネガティブなイメージをもち、「一定の距離を保ちたい」と語る K の背景を探りたい。K は地域コミュニティの「あたたかい」や「子供にやさしい」といった側面を認めつつ、「干渉」する付き合いの仕方に疑問を抱いている。

K の語り

「(北上は) 嫌いな方。すごい景色とか自然は大好きなのね。でも人間関係が。田舎ゆえに干渉し合ったりとかするじゃん。たとえば『あそこの人、昼に出てったけど夕方戻ってこない』とか。意外と生活が窓から見えてるの、それをすごい気にしてて、それって気にする必要ある？って、自由じゃんって、そういう考えだから。そこまで見られたりしてるって思うと嫌だなって」(コード:「一定の距離を保ちたい」「干渉」「わずらわしい」)

一方、C も「干渉」する付き合い方について触れたが、K とは反対に、C はそれを「助け合いができる」と肯定的に捉えている。

C の語り

「やっぱりご近所さんとのつながりが強くないとダメだって。何がダメかって分かんないけど、『あれ、今日あの家電気ついてないな』とか、『今日は洗濯もの干してないな』みたいなのがあったら(家に)行くって。そういうの田舎でしか無理だよな。」(コード:「助け合いができる」「干渉」「唯一無二」)

C と K はどちらも町外へ他出した経験を持ち、今回のインタビューでは C と K の明確な背景の違いを明らかにすることはできなかった。しかし、K は、他の媒体の項目でも、北上町とのつながりが希薄なことがわかっている。この点については、全体の考察に託したい。

3-3-2-3. 近所が若者と北上町のつながりに果たす役割

では、近所と若者の関係性は若者と北上町のとつながりに、どのような役割を果たしているのだろうか。

はじめに、A や D が地域行事に参加している事例にみられるように、若者が近所と直接的な関わりをもつことは、若者を地域につなぎとめる役割を果たしているということができる。とくに、A は消防団の他に、北上地区のスポーツ推進委員にもなっており、公園づくり計画など

のまちづくりにも積極的に関わっている。近所との強い関係性は、若い担い手を育む要因となっていることを証明した。

また、インタビューで「北上町の一員としての実感がある」（アンケートの15項目の地元志向のうちの1つ）が高い人にその要因を聞くと、「近所とのつながり」が挙げられることがしばしばあった（A、Q）。

Q の語り

「この前おばあさんの初盆で、お寺で和尚さんから卒塔婆をもらうっていうのがあって、親がいそがしくて自分が頼まれた。なんかそういうのにも参加したいし、参加した時に『だれだれの息子です』って言うのと『あーそうなんだ！』みたいになるのが、やっぱり一員としての実感があるっていう根拠」

アンケートの分析結果では「宮城県外」在住者で「一員としての実感がある」が最も高かった。Q は関東在住であり、これに該当することから、こうした風習や伝統的な習慣、地域行事を介した近所との付き合いが、県外在住者でも一員としての実感を増幅させる機会になり得ていると考えることができる。この点は⑧歴史・文化でも触れたい。

一方、近所との関係性は、一定数の若者にとって居住場所の“考慮事項”になっており、北上町での居住意向に影響しているといえることができる。例として、C と D の語りを紹介する。

D の語り

「住みやすいとは思ってるよ。近所づきあい良いし、地域の行事とかにも出てるし、そういう分には。都会にはないじゃん。その辺はやっぱいいなって」（コード：「住みやすさ」「唯一無二」）

C の語り

「なんか小さい時にビスケットくれるおじいさんがいて、友達と二人でビスケットおじさんって呼んでたんだけど、地域 みんなで子ども育てるっていうじゃん。まさにあれだね。だから別に知らない子でもそういう風にビスケットとかもらってたし。都会でやってたら不審者じゃん。」（コード：「子供にやさしい」「唯一無二」）

近所との関係性に対して全体的にポジティブなイメージをもっている C は、こうした「子供にやさしい」側面を特に評価し、結婚して子供が出来てからでも、北上町に住み、北上町で子供を育てたいと考えている。

また、インタビュー調査の中で「北上町にいつまでも変わってほしくないものがある」（アンケートの15項目の地元志向のうちの1つ）が高い人にその要因を聞くと、「近所とのつながり」が挙げられた（D、J、M、P、Q）。東日本大震災でコミュニティの再編が繰り返されるのを目の当たりにしてきた若者たちだからこそその意見だと考えることができる。変わってほしくない

いう気持ちは、若者たちにとってもそれが心の拠り所になっている証拠であり、故郷とのつながりを大切にしたいという意識の表れといえるだろう。

3-3-2-4. 近所を媒介に若者と北上町のつながりを維持・充実させるうえでの課題

若者は、近所との関係性について、良い面と悪い面を認識していることが分かった。良い面は若者の居住意向に影響するなど、一定の効果が期待できた。しかし、その一方で「コミュニティの窮屈さ」や「干渉」という側面をネガティブに捉えている対象者も一定数いた。アンケート結果の「理想の居住地条件」において、「近所とのつながりが強い」を選択した人が比較的少なかった背景には、このような側面を若者が嫌う傾向があるからだと考えることができる。今後は、Bのような子育て世代を含む若者、または子供たちを寛容に受け入れるコミュニティについて考えていく必要がある。

また、都市への他出経験によって、近所同士の付き合いの有難さや貴重さを認識し、受け入れやすくなる傾向がある。今後は、若者の他出という選択肢を尊重する風潮が家庭や教育機関に求められる。

さらに、①友人・知人に続き、家族とコミュニティの関係性が重要であることが明らかになった。友人・知人や近所同士の仲間など、人と人との社会的つながりには「家族」が中心的役割を果たすといえ、親のコミュニティへの関与の姿勢そのものが、子に影響すると考えてよいだろう。

なお、地域行事にまつわる課題については⑧歴史・文化の項目で触れる。

3-3-3. 「家」を媒介とした若者と地域のつながり

3-3-3-1. 「家」と若者の関係の実態

北上町では震災以前から、ほとんどの住民が一軒家に居住する。インタビュー対象者は全員が一軒家出身であり、空間としての「家」につながりを感じているケースが複数見られた。これは、アンケートではくみ取ることのできなかつた北上町と若者のつながりであり、ここではその実態について紹介したい。ただし、震災で家を被災した対象者の語りと、被災していない対象者の語りは分けて論じる必要がある（図 3-3）。

まず、被災していない対象者にとっての「家」について見ていきたい。C はインタビューの中で、自身の「家」の成り立ちに触れ、「残していきたい」という強い思いを語ってくれた。

C の語り

「あの家はめっちゃ大事にしてるのね。なぜかっていうと、おばあさんの父親って戦争で亡くなってるからおばあさんすごく貧乏だったの。でもそのおばあさんの叔父さん（戦争で亡くなった父親の兄弟）にあたる人がいっぱいいろんなところにいってお金をため

て今の家を建ててくれたのね。今も家族ぐるみでやり取りしててそれくらい深いつながりがあるのね。だからおばあさんは今の家をめちゃめちゃ大事にしてるんだ。で、その話を聞いてるから自分もめっちゃ大事にしてる。苦労して苦労して苦労してやっと稼いだお金で建てた家なの。おばあさんそういう話けっこうするから。ずっと小さい頃から言われてきた」(コード:「残していきたい」「ルーツ」)

C(女性)は上に兄がいるため、自身が家を継ぐことは考えたことがないが、家自体を大切にしていきたいという気持ちが強い。彼女は、他の語りからも北上町を好きな気持ちが伝わってくるが、まさにこの“家を大切にしていきたい”という気持ちこそが北上町とのつながりを保つ要素となっているということができる。

Cが祖父母と家の存在意義を共有している一方、Hは家族(特に祖父母)との価値観の違いを感じている。Hはその語りの中で、例として、祖父母が「家」そのものへのこだわりをもっていることを例に挙げ、疑問を呈した。

Hの語り

「おじいちゃんの知恵、おばあちゃんの知恵っていうけど俺はもうあれは全部嘘だと思ってる。そんなの聞いたってためになんねえじゃん、時代が違いすぎて。ためになることもあるんだけど、昔の感覚で、たとえば『海やってれば安泰だから』みたいな。いやいやいやいやみたいな。あと『お前家督継げよ、ここにいれば家もあるし』みたいな。いやいやスーパーもないし、どうやって生活してくんですか?みたいな」(コード:『家』にこだわりなし」「家族とのすれ違い」「生活利便性」)

この語りから、Hは、生活利便性を考えれば北上町の「家」にこだわる必要はない、という考えであると捉えることができる。

また、空間としての家は「イエ」意識とともに語られることがあった。AやOは家を新築した際に(Aは被災していないが震災後に新築、Oは小指集落の家を被災し、浪田集落に移転・新築)、長男の生殖家族がそこに住む想定で、家の構造や部屋割りを考えたという。

Aの語り

ー筆者「家は継ぐの?」

ーA「そうだね。もう家建てちゃったし、新しく。5年くらい前。もともと古かったし、俺が家を継ぐ前提で、子供部屋とかそれなりに想定したサイズの一軒家を。子供部屋とかそれなりに想定したサイズの一軒家を。」(コード:「生殖家族を想定した構造」)

Oの語り

「結局あの家は弟のものになる。私は、いずれはどっかに出ていくんだから、みたいな雰囲気がある。新居で部屋決めるときとかも、私が良いつて言った部屋だと風水的に家

から出ていけない、みたいな。おばあちゃんとかは結構気にしちゃって、いつまでも（家を）出れないんじゃないかとかって。」（コード：「生殖家族を想定した構造」）

これらの語りは、空間としての「家」と家督相続の意味での「イエ」が密接な関係にあることを示唆している。

次に、津波により大規模半壊、または全壊の判定を受けた B、J、M、O、P の「家」について見ていきたい。大きく、「北上に残る」と「町外へ移転」の 2 つに分かれ、「北上に残る」対象者は「新築」か「修繕」をして住み続けている。「新築」は先ほど例に挙げた O と J、「修繕」は B、M、P であるが、J は特殊な例であることに触れておきたい。J の母親は東日本大震災の津波で犠牲になり、実家は全壊だった。もともと父親と疎遠だった J は姉や親戚らと話し合い、仏壇を置くための家を高台に建てることにした。

J の語り

「でも家って言っても誰も住んでいる人はいない。周りに親戚がいっぱいいるんだけど、お墓参りとか行ったときにどこもこう休めるところがない。あと仏壇を今まで叔母ちゃん（J の母親の妹）のところに置かせてもらってたんだけど、ずっとそういう風にするわけにもいかないし。叔母ちゃんだけの家だったらいいんだけど普通に義理の叔父さんも一緒にいるわけだし。だからその仏壇の置き場所を考えなきゃいけないってなって。で、どうせだったら浜（相川学区）に、あんまり大きくなくても、お墓参りに行ったときにお正月でもお盆とかでもみんなで泊まれるようなごがあればいいねっていう話になった。」「結局その家が建ったおかげで前よりもいとか親戚とかも『ちょっと行ってくるねー』って連絡来て行ってくれたりするからさ、すげーなんか、みんな喜んでんだろなって思ったし、そうやって頻繁に出入りがあるならホコリたまることないしさ。」（コード：「新築」「仏壇を置くための家」）

J は宮城県岩沼市在住だが、①友人・知人でも触れたように、現在でも定期的に北上町に通い、同級生と会っている。したがって、仏壇を置く目的で作られた誰も住まない「家」の存在が、親戚や友人、近所とのつながりを保つうえで重要な意味をもっているといえる。この J の事例は、空間としての「家」という存在が北上町とのつながりを保つうえでどれだけ重要かを示すものでもあるだろう。

一方、町外へ定位家族の家を移転した対象者は E、F、G、K、L、R、S で、全員が「北上町外石巻市内」に移転しており、E、F、K、L、R は「新築」した。なお、F は全壊した実家を一度修繕しているが、その後、災害危険区域の指定を受け、移転・新築した。また、G はもともと母親が生まれ育った実家を改装し、家族全員で移り住み、S は母親の叔母にあたる親戚の家にそのまま家族全員で移り住んだ。なお、アンケート結果では「修繕せず、中古物件を購入・賃貸契約した」が 1 人いたが、今回のインタビュー対象者の中にはいなかった。

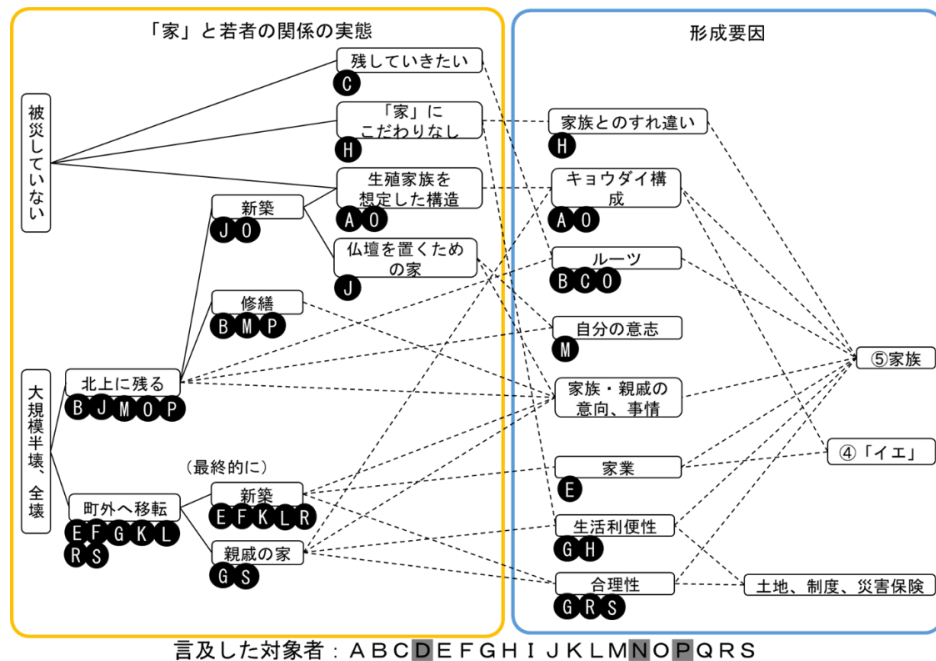


図 3-3 「家」と若者の関係の実態とその形成要因

3-3-3-2. 「家」と若者の関係の形成要因

家のあり方は対象者それぞれであり、一概に比較したり、まとめたりすることは控えたい。しかし、多くの対象者の「家」との関係性の背景には、家族や「イエ」意識が大きく関係していることがわかった。まず、被災していない対象者については、家族とのコミュニケーションによって「ルーツ」が共有されていたり、家の構造そのものに「キョウダイ構成」が関係していることがわかった。また、被災した対象者の、その後の居住決定にも「家族」が大きく反映されていることがわかる。ただし、被災した対象者の「家」との関係性を全体的にみると、最終的に「北上に残る」選択をした対象者には「家族・親戚の意向、事情」の他に「ルーツ」や「自分の意向」が反映されているのに対し、「町外へ移転」した対象者には「家族・親戚の意向、事情」の他に、「キョウダイ構成」、「家業」、「生活利便性」、「合理性」などの形式的要因が挙げられた。まず「北上に残る」を選んだ O と M の例を挙げる。

O の語り

「結構、うちの父とかもあそこを離れたことがない人なので。震災後とか、家どこに建てる？っていう話になったときもうちの家族は北上町一択だったので、外に出るっていう選択肢はなくて。愛着はある方だと。」(コード「ルーツ」「家族・親戚の意向、事情」)

M の語り

「震災のあとも、別に建てたうちにみんなで移動しようっていう話になったりもしたんですけど、その時もやっぱり『ここ離れたくない』って言った。両親はもう引っ越そうっていう感じだったんですけど。」「戻れるなら戻りたいな、って思うんですけど、でも

実際相川の実家の他に別に家（両親が住む石巻市内の家。両親とは M が小学生の時から別居。）を建ててはいたんですよ。だからたぶんそっちに全員（いずれ）移動するんだろうなって。だからそもそも相川の家はもう無しにするんだろうな一って感じですね。」
（コード「自分の意志」）

M は「自分の意志」で北上町に残ることを決めているが、「家」と祖父母の存在こそが北上町とのつながりを保つ要因になっており、いずれ、それらを媒介としたつながりを失う日が来る事実を受け入れざるを得ない状況だ。

一方、「町外へ移転」を選択した対象者の中で E、G、R、S を例に挙げ、移転の背景について触れておきたい。

E の語り

「家族で北上に残るみたいな話はぜんぜん出なかった。おじいさんがもう海できなくなったから。もともと漁師やってて、まあ、もう船も流されたし。」「学校通うとかの面ではよかったっちゃよかったかもしれないけど、まあ俺的には北上に戻りたかったっていうのがあったから。でもまあお父さんとおじいさんに従うしかなかったし、そこ（現在の E の実家の場所）に家建てるって決まったから、じゃあしょうがないかなって感じ」
（コード「家業」「家族・親戚の意向、事情」）

G の語り

「今家族が住んでるところがもともとお母さんの実家なのね。で、古い家だったからそこをちょうど立て替えて今にいたる。だからそんなになんか残るとかじゃなくて、そっちのほうの手取り早かった。」「なんかもともと家族とも話したことがあるけど、北上町から石高（石巻高校）通うのとか、まじで無駄だよねっていう。うん。遠いしね。かといって北上町で何すんのっていう。北上町でしかできないことってなんかある？ 逆に。」
（コード「生活利便性」「合理性」）

R の語り

「高台移転するかしないかみたいな話があった。おじいさんおばあさんがいたから、早めに新しい家を建てて引っ越ししたほうが仮設に住むとかよりストレスがなくていいんじゃないかみたいな話が親の間であって、それで早めに土地を買った。白浜に住むってなったら結構時間がかかったから、高台移転するにも整備とかしなきゃいけないし。」
（コード「合理性」）

S の語り

「すごい合理的というか、そこに感情はなかった。事実として、オバ（S の母の叔母）さんが高齢で一人暮らし、そして一軒家。で、自分ち（北上で被災した実家）があの時地

震の保険には入ってたけど津波の保険には入ってなくて、地震の分しかお金が下りなかったからそんなにお金が入ってこなくて。また土地買って家建ててってなって、後世は私しかいないから建てたところで自分で終わっちゃうかもしれないし。建てるよりこっちに入った方がいいでしょってなった。」（コード「キョウダイ構成」「合理性」）

以上より、それぞれの対象者にはそれぞれの状況があり、その状況に合わせて家族や自分にとって最適な選択をしていることがわかった。やむを得ず、町外へと移転した対象者の多様な背景を明らかにすることができた。

3-3-3-3. 「家」が若者と北上町のつながりに果たす役割

「家」の存在は若者にとって拠点となるものであり、家族や「イエ」意識と関連しながら、若者を地域につなぎ留める役割を担っている。また、C の例に見るように、ルーツを共有することは「家」や土地など、空間的な場所への愛着を育み、若者の居住意識に影響している。

また、J の例に見るようないわゆる“別荘”としての「家」は、今後の若者と地域のつながりのあり方を考えるうえで期待できる。J は「家」のおかげで家族や親戚とのつながりを感じており、また、J が頻繁に北上町に通い、友人と会っていることから、友人・知人との関係維持にも寄与していると考えられる。

3-3-3-4. 「家」を媒介に若者と北上町のつながりを維持・充実させるうえでの課題

「家」は地域への定着を促す存在として言及してきたが、H の事例を援用すれば「家」の存在に固執する考え自体が“古い考え”であるという捉え方もある。また、G も生活利便性を優先する考えをもち、「家」や土地への執着はないと発言した。一軒家に居住する文化をもつ北上町において、こうした若者の意識は受け入れがたい風潮にあると推測できるが、若者と地域のつながりを考慮する上では、「家」に対する価値観を強要しない寛容さも必要であると言えるだろう。

また、家を被災した対象者に焦点を当てると、「町外へ移転」した対象者の中には、自分の意志が反映される余地が全くなかった対象者がいた。一方、自分の意志が居住場所に反映された M はそれと対照的な例と言え、M の選択は、その後も友人や近所の住民との関係維持を可能にさせている。ただし、被災の程度やその時々状況の違いがあるため、一概に比較することは控えたい。

一方、被災して町外へ実家を移転した S は移転後の実家に帰るモチベーションはない。

S の語り

「今、もとあった実家の場所は家建てれないから立ち退きになっちゃったけど、もし家建て直せるとか、北上に家建てたらなんかもうちょっと帰ってたのかなとか思う」

若者たちは、町外へ移転せざるを得なかった事実を受け入れる一方で、このような心理的なつながりをもっている。このような水面下にある若者の意識をくみ取り、尊重する環境をつくる必要があるだろう。

3-3-4. 「イエ」を媒介とした若者と地域のつながり

3-3-4-1. 「イエ」と若者の関係の実態

アンケート結果では、「一人っ子」の「北上町内」在住の割合が高かったことから、北上町内における家督相続の習慣の存在が明らかになった。しかし、インタビューでは家督相続をめぐる若者の実態は様ではないことが明らかになった（図 3-4）。

はじめに、実家が町内にある対象者と、実家が町外に移転した対象者では「家」そのものや土地に関する条件が異なるため、両者は分ける必要がある。まず、実家が町内にある対象者には、家督相続の理のままに自分の居住場所を決めている若者が一定数いた。例えば、A、D、O である。A（男性）は、③「家」でも触れたように、家督相続する前提で、新居の構造が決定された。また、D（男性）は「将来的に戻りたいみたいな意識はぜんぜんある。長男だし」（コード：家督相続の風潮「ある」、北上町に住む意識「ある」）と述べる。一方、O（女性）の家庭では家督相続の風潮があるが、家督は、長男である弟が相続することになっており、自身は北上に住むつもりはないという。

O の語り

「弟が継ぐって家族の暗黙のルールみたいな。私はどこが不満で出ていきたいとかじゃないですけど、出ていくんだろうなあって。おばあちゃんが結構、女の子は結婚して外に出て行かないとって言うてるし、両親が退職したら家のローンとかを負うのはまあ弟だろうっていう話にはなってるので。」（コード：家督相続の風潮「ある」、北上町に住む意識「ない」、「家族（祖父母）に言われてきた」）

また、B のような事例もある。B は 2 人姉妹の次女であり、元々家督を相続する立場ではなかった。しかし、姉が酒屋に嫁いだために自身が継ぐことになり、婿をとった。

B の語り

「私はその時は『自由でいいよ』って言われて『じゃあ旦那さんの名字に』って思ったら、なんかそういうことにはいかないらしいとおばあさんが言ってた、とお母さんから聞いた。えー、話が違うじゃんってなって。とりあえず名字だけは継いでほしいって言われたから、じゃあ名字だけならいいよってなったんだけど。で、一回（B と夫の）2 人で暮らしてたのね。しばらくしてから実家に戻ったら、（勝手に）“〇〇（B の名字）

家”を継ぐ的な話になってて。いやいやみたいな。でもまあ勝手に（そのうち）出てくけどね。」（コード：家督相続の風潮「ある」、北上に住む意識「受け入れたくない」、「家族（祖父母）に言われてきた」「キョウダイ構成・キョウダイ間交渉」）

B は、半ば強制的に名字を継ぐことになり、北上に住むことにも前向きではない。B の夫は仙台まで通勤しており、いずれ転勤のタイミングで実家を出て行くことを決めている。

また、M³⁶は B と同じ 2 人姉妹であり、インタビューから家庭内における家督相続の風潮を明らかにすることはできなかったが、妹との間でイエに関する認識の共有があるという。

M の語り

「どっちは残りたいね、みたいな話は結構する。もともと父親が婿養子なので、私たちもどっちかでお婿さん欲しいよねって。『(M の名字)』としていたいよね、みたいなのはありますね」(コード：イエを継ぐ意識「ある」、「キョウダイ構成・キョウダイ間交渉」)

一方で、実家が町外にある G、R、S は、全員が、自分自身の家は家督相続のしぼりは強くない、比較的自由的な風潮であると回答した。このことから、家庭内において家督相続のこだわりが強くないことは、町外への移転決定の要因の一つになったとも解釈することができる。ただし、偶発的な結果である可能性もある。

さらに、実家住所の町内外にかかわらず、多くの対象者に共通する実態がある。例えば、家庭内の家督相続は「自由な風潮」であるにもかかわらず、イエを継ぐことを意識している若者がいることである。ここでは G と Q の例を挙げる。

G の語り

「おれの育ちけど、小さい頃からそういうの気にしなくていいみたいな。まあちょっとは気にするけど、別に俺の決めたことだったらなんでもオーケーって感じの家だった」(コード：「自由な風潮」、イエを継ぐ意識「ない」)

Q の語り

「自分の家は、継げ、みたいなのはない。でもたぶん父親（漁師）の方は、ちょっとは継いでほしいって気持ちがあるのかもしれない。（自由な風潮を作りながら）寂しい気持ちってのがああるのかもしれない。うちの母親は『自由にやってくれ』って感じ」(コード：「自由な風潮」、北上町に住む意識「わからない」)

G、Q とともに長男という立場であるため、多少なりともイエの継承を気にしており、Q のように親の顔色をうかがっている様子もわかった。

³⁶ M は北上町内に自身が長らく住んできた実家があり、かつ北上町外石巻市内に両親が住む実家があることから、図 3-4 では「実家が町内にある」と「実家が町外にある」の双方にあたる分類にした。

また、B や M の例でみてきたように、キョウダイ間で家督相続に関する交渉が行われているのも特徴的である。R（女性）は3人キョウダイの末っ子で上に兄と姉がいるが、姉が結婚したことで自身も継ぐ立場になり得る状況になった。R は、親とキョウダイ間の交渉で揺れる、複雑な心境を語ってくれた。

R の語り

「兄弟間でどうするどうする？みたいな感じですよ。お姉ちゃん結婚して、名字変わったんですけど、(一番上の)お兄ちゃんは東京に居て、どうするの？ってなってる。親からは『R しかないよ』って言われるんですよ。『帰ってくるんでしょ？』の前提なんで、どうしようって。お姉ちゃんの結婚式のときに、お兄とホテルの部屋が同じで『え、どうする？』みたいな話になった。(兄は) こっちに戻ってきても飯野川³⁷の実家には同居しないって、そんな感じだった。結論は出てないですけど親からは『R だよ』って言われてる。親は自由にしていいよって立場だったんですけど、その割に言ってくる」(コード：「自由な風潮」「キョウダイ構成・キョウダイ間交渉」)

この R の例をはじめ、複数のキョウダイをもつ対象者にとって、生まれ順は絶対的なものではないことがわかる。アンケート結果で、「長子」と「次子」の居住場所にばらつきがあったのも、このようなキョウダイ間の交渉があるからだと推測できる。

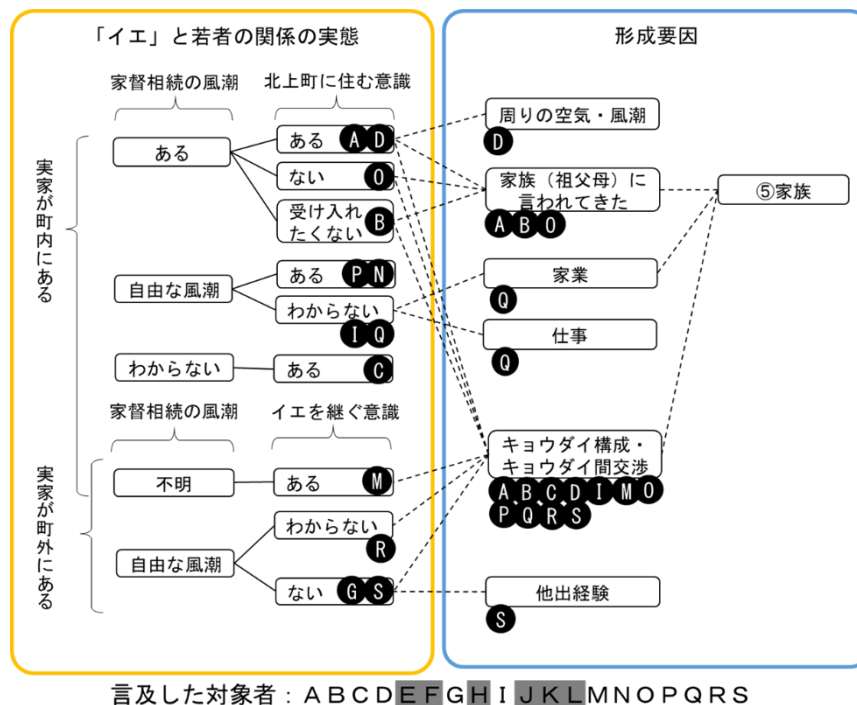


図 3-4 「イエ」と若者の関係の実態とその形成要因

³⁷ 飯野川は、河北町の一部を表す地域名。R の実家は、震災後、河北町の飯野川に移転した。

3-3-4-2. 「イエ」と若者の関係の形成要因

これまで見てきたように、多くの若者に家督相続の意識があることがわかった。そしてその意識の形成要因をたずねると多くの対象者が「家族（とくに祖父母）に言われてきた」と言及したことから、ここでも家族によるはたらきが背景にあることがわかった。

また、「キョウダイ構成・キョウダイ間交渉」によって「イエ」意識は左右されることも明らかにした。

さらに、以下の Q の例に見るように、「家業」の存在が「イエ」を考えるうえで大きな要因となるケースもある。

Q の語り

「自分は父親が師匠みたいな感じだった。漁師の仕事とか小さい頃手伝って、そういうのを教えてもらった。ほんとだったら自分が伝統とかをやっていかなきゃとか、ほんとだったら自分がそういう立場（長男）だからそういう気持ちはある。」（コード：「家業」）

Q は関東でシステムエンジニアの仕事をしており、さらにその先に教員の仕事にも興味をもっているという。このように、自分の仕事ややりたいこととの間で葛藤があり、「継ぐ」ことについてははっきりと決めることができていない若者がいるのは事実だ。

また、D（男性）は家督相続を助長する「周りの空気・風潮」の存在を明らかにした。

D の語り

「そういうもんだろ、みたいな。そういう感覚。親は言わないけど周りで言ってる人はいるじゃん。いろんな人の話聞いて。親には言われてないけどそういう気持ちはあるなー」（コード：家督相続の風潮「ある」、北上町に住む意識「ある」、「周りの空気・風潮」）

最後に、「一人っ子」という共通点をもつ A（男性）と S（女性）だが、両方で「イエ」意識は異なることに触れておきたい。A も S も昔から継ぐ意識があったが、S は上京して様々な考えに触れることで「イエ」に対する考えが変わったと語った。

S の語り

「ちっちゃい頃の方が家を継がなきゃとかお墓を残さなきゃとか、結婚するんだったら絶対お婿さんもらわなきゃいけないとか思ってた。お母さんもそこは気にしないでいいよって言ってたのがあったけど、とはいえ勝手に義務感があった。でも東京来たら全然名字変えない人もいるし、結婚をわざわざする人もいないし、いろんなあれがあって、（東京に来てから）ブロックがぼろぼろと崩れた」（コード：「自由な風潮」「キョウダイ構成・キョウダイ間交渉」「他出経験」）

A と S では性別の違いや、「家」の被災程度の違いがあるため単純に比較することはできない。しかし、他出経験が、地元を客観的に見つめる機会となり、S の言う“勝手な義務感”を断ち切ることができたといえる。

3-3-4-3. 「イエ」が若者と北上町のつながりに果たす役割

インタビュー調査から、「イエ」を意識して居住場所について考えている若者が一定数いることが明らかになった。「イエ」意識は、若者にとって人生を考えるうえで重要な考慮事項であり、進路選択にも影響を及ぼす。事実、D は高卒で団体職員に就いたが、その職を選んだ理由を聞くと、「おれ石巻で働こうと思って、長男で。そうすつとまあ、いいところに入りたいわけですよ」と答えた。また、A は小さい頃から親などに「イエ」を継ぐ前提で育てられてきた。A はそのことを決してネガティブには捉えておらず、地元に着定する意志は強い。A は近所とのつながりも充実しているため、それも大きな要因ではあるが、「イエ」意識の根付きが若者を地域につなぎ留める一定の役割を果たしているといえることができるだろう。

3-3-4-4. 「イエ」を媒介に若者と北上町のつながりを維持・充実させるうえでの課題

それぞれの家族の事情や被災による家の移動を踏まえると、「イエ」とのつながりは決して一様なものではなく、本研究では「イエ」意識がこうあるべきという議論をするつもりはない。

ただし、これまで見てきたように「イエ」意識には危うさがある。例えば、O の事例にみるように、女性を外に出すしきたりでもあり、必ずしも若者を地域につなぎ留め得ないことに注意が必要である。また、いくつかの対象者は、家督相続の風潮が地域自体に漂っているのを察知し、“勝手な義務感”を抱いているケースがある。

一方で、C、N、P の事例をみると、彼らは家督相続に関して自由な立場、もしくは親に「自由にしてい」と言われており、家督相続のしほりが無い立場であるにも関わらず、北上町への居留意欲はあるということがわかっている。例えば、N は3人兄弟の一番上であり、「転勤だからたぶん叶わないと思うんだけど、一応生まれ育った町、北上町があるから、住めたら住みたいかな」と考えている。長男として「イエ」意識があるかを尋ねると、「いや別にそこは、うちの親はもう継ぐとかは別に考えなくていいから好きなようにしろって」と述べた。以上より、本研究の主張としては、若者と北上町とのつながりを維持・充実させる上で「イエ」意識は決して絶対的なものではないことを強調し、他の要因によって北上町への居留意欲は十分に芽生え得るものであるという事実をここで共有しておきたい。

3-3-5. 家族を媒介とした若者と地域のつながり

3-3-5-1. 家族と若者の関係の実態

これまで見てきたように、「家族」という要素はつながりの形成要因として何度も挙げられた。北上町とのつながりを考えるうえで“核”となる「家族」と若者は、どのようにつながっているのか見ていきたい（図 3-5）。

まず、インタビュー対象者のうち、家族についての言及があったのは D、E、F を除いた 16 人である。そのうち、家族と比較的強い関係性をもつと判断された対象者と比較的弱い関係性をもつと判断された対象者に分けられる。

はじめに、関係性が比較的強いと判断された対象者について見ていきたい。例えば、C は自ら「(家族と) めっちゃ仲いいよ」と述べており、語り全体からも家族との間に「活発なコミュニケーション」があることがわかった。

C の語り

「おじいさんとかおばあさんと『紅葉始まったね』みたいな会話をするのもさ、またいいよね。そういう話をするのも好きなの。昔の話とかも」（コード：「活発にコミュニケーション」）

また、I、J、Q、S は、たびたび、家族の「そばにいる必要性を感じている」ことを明かしてくれた。S が「親の世話とかもあるし、私一人っ子だからいずれ面倒みるんだろうなと思うけど」と話したり、I が「何かあったときにすぐ行ったりとかできる」と述べるように、緊急時のことを想定して、親の近くに住む必要性を感じている若者の存在が明らかになった。アンケート調査の結果では、宮城県内で働く若者が多いことが明らかになったが、このような家族の緊急時対応もその一要因として考えられる。

さらに、「家族が北上を大事にしている」という主旨の語りも目立った。筆者がインタビュー対象者に「北上に愛着があるか」という質問をしたとき、「家族も北上の人で、北上を大事にしているから」と語った対象者は 3 人いた（L、O、P）。

P の語り

「周りの大人たちがすごい北上町を大事にしてたっていうのは大きかったかな。お父さんもそうだし、おじいちゃん、おばあちゃんとかも北上町で育ってきた人たちで、すごくいい環境で育ってるってのは常々言われてた気がする。」（コード：「家族が北上を大事にしている」）

また、A や L は②近所でも触れたように「家族とコミュニティの関わり」が充実しており、家族を介した近所とのつながりがある。

一方、家族との関係性が比較的弱いと判断できた対象者はB、H、Kである。Bは北上町内で定位家族と生殖家族と共に住んでおり、結婚を経験してからは定位家族への「執着がない」と述べ、ライフイベントの経験による意識の変化を示した。HとKは「(家族と)一定の距離を保ちたい」と述べており、どちらも石巻市外宮城県内に一人暮らしをしている。

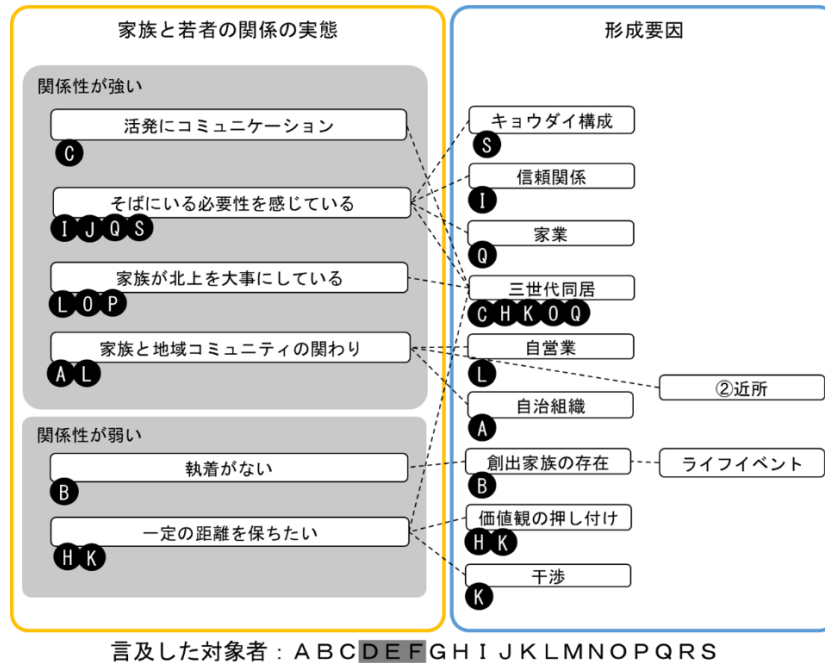


図 3-5 家族と若者の関係の実態とその形成要因

3-3-5-2. 家族と若者の関係の形成要因

まず、家族とのつながりが強いと判断できた対象者のうち、「そばにいる必要性を感じている」対象者は、単純に家族との「信頼関係」を頼りにしている対象者（I）や、「家業」の存在を背景として挙げる対象者（Q）がいた。「キョウダイ構成」からそのように考えていると判断できたのは、家族と若者の関係の実態で例を挙げたSが、「私一人っ子だから」と発言していたからである。また、AやLは先に触れた通り、親を介した北上町との関わりがあり、その背景には、Lの父親が震災後でも自営業を続けたり、Aの親が自治組織に入りやすい環境を作ってくれた事実がある。そして、多くの対象者の語りの中で、頻出したのが「おじいちゃん、おばあちゃん」というワードである。実態で例に挙げたCの発言にも祖父母の存在があり、「三世代同居」は家族とのつながりを育むうえで大きな要因になっていることが明らかになった。

ただし、C、O、Qにとって「三世代同居」がプラスの影響を与える一方で、同じく「三世代同居」を経験したHとKは、家族との関係性は希薄だと判断できた。HとKはどちらも祖父母に価値観を押し付けられた経験をもっている。まず、Hは③「家」でも触れたように、祖父母の考えについて「そんなの聞いたってためになんねえじゃん、時代が違いすぎて」と捉えており、祖父母について以下のように言及した。

H の語り

「うちじいちゃんとお父さんと三世代で暮らしてんだけど、じいちゃんたちがね、すげえキかねえタイプで、ちょっとね、うちにいると辛くてね。それでこっちのほうに出てきたっていう経緯があって。なかなか今はいいかなって。遠くから見守らせてもらいますって」(コード:「三世代同居」「価値観の押し付け」「一定の距離を保ちたい」)

H にとっては、「家族」が自分の居住場所を選ぶ要素になっていた。また、K は祖父母との価値観のすれ違いに加え、地域全体の価値観の狭さを指摘した。

K の語り

「地域が狭いがゆえに干渉しすぎてるところが嫌い。ほっとしておきなよっていう感覚をもってほしい。なんか知りたがりが多いかも。狭いがゆえに自分の考えはあってる、みたいな。価値観が狭いんだよ、きっと。だから『こうした方がいいんだ』って押し付けてくる感じがすごい嫌だった。『公務員になりなさい』とか『公務員が一番いいんだぞ』ってじっちばっぱに言われてた。いろいろ調べたうえで言ってるの？って。果たしてほんとうにそうなのかと。偏った考えというか」(コード:「三世代同居」「価値観の押し付け」「干渉」)

K は小さい頃に祖父母だけでなく、親にも勉強を強いられるなど、家族に「干渉」された経験をもつことから、「石巻でもいいけど、身内とべったりするのが嫌だから、一定の距離を保ちたくて仙台、みたいな。(身内は)めんどくさいって思っちゃう。すごい干渉してくるから。毎日だとちょっと嫌だな、みたいな。家族とはある程度離れたいかも。」(コード:「一定の距離を保ちたい」と述べ、H と同じく、一定の距離を保とうとしていた。K は家族と離れてから関係が良くなったと述べるが、「三世代同居」によって居心地の悪さを感じ、結果的に北上町を“遠ざける”ことになった。アンケート結果では、この H や K と同じ「石巻市外宮城県内」在住者で否定的地元志向「関わりたくない」や「思い出したくない」の評価が高かった。H と K の事例は一例であるため、一概に「石巻市外宮城県内」在住者の傾向として捉えることはできないが、アンケート結果の背景には、何らかの思い出したくない過去の経験があり、北上町や石巻市とは「一定の距離を保ちたい」という考えがあると推測することができる。

3-3-5-3. 家族が若者と北上町のつながりに果たす役割

若者と家族との関係は、若者と①友人・知人との関係、②近所との関係、③「家」との関係、⑥先祖との関係、⑦自然との関係などに影響を及ぼしている。詳細はそれぞれの項目で触れているが、「家族」は北上町と若者のつながりの基盤になりうるものであるといえることができる。

また、家族との関係性は居住場所や生殖家族の考慮事項、自身の進路選択にも影響していることがわかった。例えば、Q は「三世代同居」の環境や家業がある環境で自分が育ってきたこ

とを誇りに思っており、「近くにいるというより、家族と一緒に住むってのは意外と大事に思ってる。まあ子どものために一緒に住みたいと思ってる。三世代にこだわる」という自分の考えをもっている。将来的に地元に戻ってくることを前向きに考えているため、「三世代同居」は若者と北上町とのつながりにプラスの影響を及ぼしているといえる。

3-3-5-4. 家族を媒介に若者と北上町のつながりを維持・充実させるうえでの課題

これまで見てきたように、家族は、地域と若者のつながりを維持するうえで重要な役割を果たしていることがわかる。ただし、三世代同居による価値観の強要、家庭内における執拗な干渉は、若者と地域を“遠ざける”可能性を孕み、注意が必要だ。K は自身の苦い体験をもとに解決策を考えたという。

K の語り

「公務員にしろって言われ続けたことが嫌だったんだよね。もうちょっと見聞を深めてアドバイスしてほしいっていう思いがあった。あと子供たちも、私が仙台出てからいろんな価値観に触れ合うことができたから、早いうちからいろんな人と触れあう機会があった方がいいと思った。だから町を出ていろんな人と触れ合えば、いろんな価値観で物事を言えるようになるから、そういうのを作った方がいいかなって思う。たとえばボランティアでいろんな人が入ってきたからこそ、いろんな人と触れ合えたと思うの。だからそういうのがもっと今後でてくれば、人生もよりいろんな価値観のもとに充実できるかなって」

彼女は、地域全体で様々な価値観に触れ合う場を創出することが必要だ、と熱をもって語ってくれた。K は①友人・知人や②近所との関係もあり肯定的に捉えておらず、社会的つながりに頼ることができなかったと思われる。彼女は、現在の居住地に移った後の環境について「心地いい」と述べるが、彼女が語ってくれたような“いろんな価値観と触れ合える”機会があれば、地域の窮屈さに対する認識が変わり、早いうちに頼りにできる居場所が見つかったのかもしれない。

3-3-6. 先祖を媒介とした若者と地域のつながり

3-3-6-1. 先祖と若者の関係の実態

アンケート結果では、「お墓参りなどの先祖供養」を目的に北上町を訪問する対象者が多かったことから、若者の間にも先祖供養の習慣が根付いていることを指摘した。インタビューでは、先祖を意識した語りは、数としては少なかった。しかし、中には、非常に強く先祖とのつながり

りを感じている対象者もいた。それらの語りを参照し、若者が先祖をどのように認識しているか、その実態を見ていきたい（図 3-6）。

まず、「お墓参りの習慣」について触れてくれたのは C、O、P、S である。そのうち O、P、S は現住所が関東であり、S は実家が町外にあるにもかかわらず、帰るたびにお墓参りに行っていることがわかった。C、O、P、S の中では、とくに、P にお墓参りの習慣が強く定着しているようだった。

P の語り

「多少の義務感はあるかもしれない。小っちゃい頃からお墓参り行かないと夢に出てくるみたいなこと言われてて、たまに私もそれ（夢）を見てて、こっち（東京）来てからとか地元離れてから。だから、あ一行かなきゃいけないんだ、と思う。定期的に行かないと、守ってやってるのに墓参りにも来ないのか、みたいな。定期的に（夢に）出てくるから、そろそろ行かないとなって。お盆とかの時期にちょうど行けることって少ないけど、時期を逃しても定期的には行くようにしてる。」（コード：「お墓参りの習慣」）

この語りから、P はとくに先祖とのつながりが強いと判断することができる。アンケート結果においても、「お墓参りなどの先祖供養」は町外在住者の訪問目的として最も多く選択されていたことから、習慣は若者にも根付いているということが出来る。

また、C や S からは北上町内のお墓を「自分のお墓として」考えているという発言があり、加えて C は「お墓の存在意義」についても触れた。

S の語り

「お墓も、もし自分が死んじゃったら北上と結婚先とお母さんがいる方のお墓で骨分けて、って言ってる」（コード：「自分のお墓として」）

C の語り

「やっぱり大事だね。お墓はまじで大事。できれば私もあそこに入りたい。もし子供とか孫ができたら、骨をちょっとだけでも北上のほうに入れてほしいって言う。ご先祖様があつての私たちだからさ、やっぱりお墓は大事にした方がいいと思う」（コード：「お墓の存在意義」「自分のお墓として」「ルーツ」）

「お墓の存在意義」については O も触れており、O と北上町をつなげているものについてたずねると、「（震災後、北上町内に）住むって決めたことも大きいし、うちは古くから習慣とか大事にするので、お墓があって実家があるってのが大きいかなって」（コード：「お墓参りの習慣」「お墓の存在意義」）と述べ、家族やお墓の存在を強調した。

さらに、お墓以外において先祖を意識する語りもあった。例えば P は、以下に示すように、震災や他出したことがきっかけで先祖の存在を意識したという。

P の語り

「震災がかなり大きいと思う。それがあったから自分が育ってきたところはどういうところだったか、どれくらいいい場所だったかみたいなことを振り返る」

「いずれ危険区域に設定されたらそこに住む人がいなくなるよね。そこに住む人がいなくなるってことはその土地の名前がなくなって使われなくなっていくじゃない。そういうのってすごい悲しいなって。知っている人を増やすってすごい重要なことなのかなって。自分が死んだ後もそれが残っていくってことで、つながっていくことだから」(コード：「先人が生きてきた事実」「ルーツ」「震災」)

P は、この語りの中で「先祖」という言葉は使っておらず、その存在が強調されているわけではないが、ルーツを意識した語りであることから、先祖とのつながりを意識しているといえる。また、H もアンケートの地元志向「北上町出身であることを誇りに思う」の評価が高く、その理由として先祖の存在を挙げた。

H の語り

「なんか昔っからそこに住んでた人がいて、自分もそこに生まれたんだなって思うと、他にもいろんな場所があるなかで、よりによって北上町みたいな。そう考えると面白いなーみたいな」「どういう人が住んでたんだろうとか、どういう暮らしをしてたんだろうって考えるとそこに生まれたのがなんかすごいいいことなんだなーみたいな。そういう意味での誇りかな。」(コード：「先人が生きてきた事実」「ルーツ」)

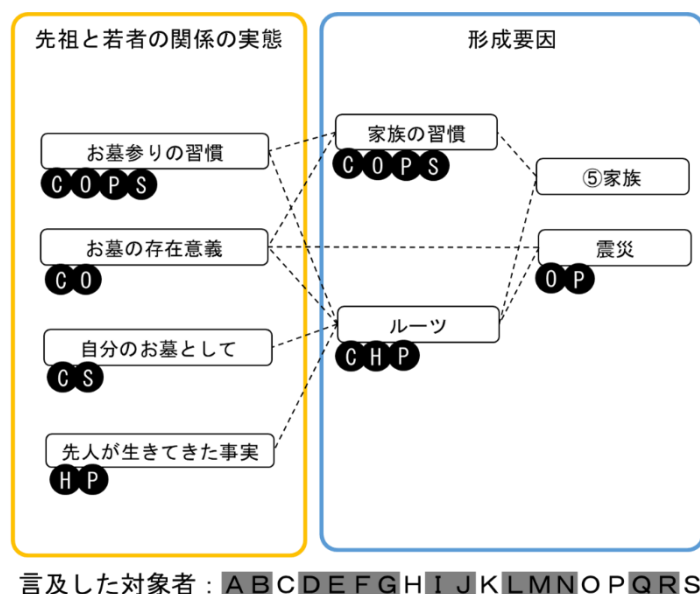


図 3-6 先祖と若者の関係の実態とその形成要因

3-3-6-2. 先祖と若者の関係の形成要因

語りの分析から、若者本人の「お墓参りの習慣」の背景には、その家族自体に習慣が根付いていることが大きな要因になっていることがわかる。例えば、先祖と若者の関係の実態で例に挙げた P は、「守ってもらってるからお礼に行かなきゃいけないとずっと言われてて」「お父さんがけっこうそういうの大事にする人で。イエとかお墓とか先祖とか。けっこう口酸っぱく言われてた」と、家族内で習慣の共有があることを示した。

また、「お墓の存在意義」について言及していた C は③「家」の項目でも触れたように、家族との活発なコミュニケーションによって「ルーツ」を共有しており、それが同時に本人と先祖とのつながりの意識を形成したといえる。C の事例からは、ルーツの共有機会が若者と地域のつながりにおいて重要な役割を果たしているということができ、改めて「家族」の中心的役割が明らかになった。

さらに、P は先に触れたように「震災」がきっかけで自分が住んでいた北上町について振り返り、誰も住めなくなった土地の存在から、先祖とのつながりを保つべきであることを示唆している。「震災」によって転出を余儀なくされた若者がいる一方で、「震災」は若者と地域のつながりを強化した役割も果たしたといえる。

3-3-6-3. 先祖が若者と北上町のつながりに果たす役割

アンケート結果を踏まえると、お墓参りは訪問頻度としてはそれほど高くないが、北上に足を運ぶきっかけとして若者の間に定着しているといえた。一方で、アンケートの理想の居住地条件においては「先祖のお墓がある」を選択したのはたった 1 人であり、インタビューにおいても「お墓」を居住地の条件とする若者はいなかった。しかし、C や S の“自分の骨を北上町のお墓に入りたい”という趣旨の発言は、今後の人生を通して北上町に関わっていたいという意識の表れと捉えることができる。事実、C は祖父母と共有しているルーツやお墓について、「こういう話を、後世っていうか、自分の子供とかにも絶対教えてあげたいなって思う」と述べ、将来にわたって北上町と関わりを持ち続ける意志を示した。

また、「先人が生きてきた事実」を意識することは帰属意識や誇り意識に影響する。例えば、先に触れた H がそれに該当する。H はこれまで見てきたように、①友人・知人や②近所との関係性は希薄だが、先祖とのつながりにより北上町への帰属意識や誇り意識を感じることができている。H の事例からは、先祖とのつながりを意識することが、若者と北上町のつながりを育む上では重要だといえることができる。

3-3-6-4. 先祖を媒介に若者と北上町のつながりを維持・充実させるうえでの課題

これまで見てきたように、先祖を媒介に若者と北上町のつながりを維持・充実させるには、先祖とのつながりを意識できる環境を整えることが重要である。そのためには、C の事例に倣

い、家庭内や教育機関においてルーツの共有機会を充実させる必要がある。また、Pは「そこに住む人がいなくなるってことはその土地の名前がなくなって使われなくなっていくじゃない。そういうのってすごい悲しいなって」と述べ、震災を機に先祖とのつながりが失われつつあることを懸念している。東日本大震災で町が大きく変化した現状を踏まえれば、今後は何らかの形でルーツを残しておく作業自体が重要な役割を果たし、その方法について検討することが求められる。

3-3-7. 自然を媒介とした若者と地域のつながり

3-3-7-1. 自然と若者の関係の実態

自然については、D、Oを除いた全員から言及があった。さらに、その全員が北上町の自然を肯定的に評価していることがわかり、若者の自然への愛着は強い傾向にあるということが出来る（図3-7）。

まず、「自然への愛着が強い」と判断できたのは、自然を介した「北上町との関わりがある」ことを示した語りと、北上町の自然に関して「気に入っているところ」があるとした語りである。前者は、主に海に関する語りが多かった。例えば、「釣り、海で泳ぐ」などのアクティビティを通じた関わりがあると語ったのはC、E、Iである。

Cの語り

「釣り結構するのね。1か月に2回とか3回。だって北上のいい所って言ったらなんといっても海が近い所じゃん。おじいさんも釣りめっちゃ好きでさ」（コード：「釣り、海で泳ぐ」「身近さ」）

Eの語り

「たまに海行きたくなって。釣りとか、たまにやったりする。泳ぐのは好きじゃないけど。」（コード：「釣り、海で泳ぐ」）

Iの語り

「去年までは（毎年）泳いでたよ。今年は泳いでないけど。」（コード：「釣り、海で泳ぐ」）

このうち、北上町内に実家があるのはCとIであり、Iは仙台市に一人暮らししているが帰省する度に自然との関わりがあることを示した。また、Eは「北上町外石巻市内」在住者だが、2～3ヵ月に1回の頻度で北上町を訪れ、自然を介した北上町との関りがあることを示した。

さらに、「景色を眺める」と語ったのはC、K、Pの3人である。例えば、Pに帰省した時に何をするか尋ねたところ、以下のように語ってくれた。

P の語り

「神社ですっと、ボーっと景色を眺めてる。することはないけど。夕方ぐらいの時間に行って景色が変わっていくのを見て、暗くなってきたから帰ろう、みたいな。なんかその時間の流れがゆっくりなのが良くて。仙台にいた頃も東京にいた頃もそうだけど、なんかやることがあってなんかに追われてて、ゆっくり景色を見る時間もないって感じだけど。(北上にいと)時間の流れ方が違うからそこにいるだけで落ち着く、みたいな」
(コード：「景色を眺める」「のんびり・落ち着く」)

P は、普段の都会の暮らしから離れ、北上町の自然と触れることでリフレッシュしていると捉えることができる。一方、K は被災後の移転により、町内に実家は無いが年に 1 回ほど北上町を訪れ、「景色を眺める」という。

K の語り

「誰かに会いに行くってわけでもないしさ。高校の友達が車持ちだから一緒にドライブすることもあるって、たまに海が見たくなって。白浜のビーチパーク、どんなもんかなとかって見に行ったりとか。海開きとか、タイミング合えば行きたいかも」(コード：「景色を眺める」)

これまで触れてきたように、K は社会的つながりが希薄だと判断されるが、北上町における自然には誇りをもっており、K にとっては“自然”が関わりをもつきっかけになっていることがわかる。

一方、多くの対象者から北上町の自然について「気に入っているところ」が挙げられた。B、C、G、P からは「のんびり・落ち着く」が挙げられた。「のんびり・落ち着く」は P の事例で先述したように、直接的な関わりにも通じており、町外に実家を移転した G も、「まあ落ち着くね。だからたまに車で(北上町に行く)」と語った。さらに、A、C、L、P からは「身近さ」、R からは「空気がおいしい」、B、K、L からは「食べ物」、C からは「動物」が「気に入っているところ」として挙げられた。中でも、C からは頻りに「やっぱり自分は自然が好きだから」「めっちゃ自然好きだからさ」という発言があり、北上町の自然に関する語りがかなり多かった。彼女へのインタビューからは、彼女の自然への愛着は非常に強いことが感じられた。

一方、B は自然に対する愛着が低いと判断された。

B の語り

「落ち着くっちゃ落ち着くけど、私が好きな感じのまちは自然と都市が混ざっているような感じなのね。緑がある感じでのんびりしてるのは好きなんだけど、ちょっとあまりにも自然すぎるのかなあ。自然多すぎかなって感じかな。」(コード：「あまり必要としない」)

Bは同時に、「スーパーとか買い物するところがない」など、生活利便性に関する不満を挙げている。Bは結婚・出産を経験しており、これまで触れてきたように北上町には特別な思い入れがない。この点はアンケート結果の考察と一致し、彼女が触れる“都市性”はこうした生活利便性に関する不満が背景にあると考えられる。ただし、Bは以下に示すように、北上町に変化を望んではない。

Bの語り

「北上町は北上町でそのままであってほしいかなって」「あそこがさ、スーパーがないから嫌だとか言っちゃったけど、建ったら建ったで逆に『え、こんなの建ったの?』みたいな思うかも」

アンケートの地元志向「北上町に対して不満に思うことがある」の背景として、多くのインタビュー対象者が生活上の不便性を指摘していた一方、このBと同じように「便利に変わることは望ましくない」と語る対象者は他にもいた。AとCがそれに該当し、A、B、Cは自然豊かでなじみのある景観を大切に思う気持ちがあることが分かった。また、三者ともに北上町内在住者であることから、普段住んでいる分、変化に敏感であると推測できる。

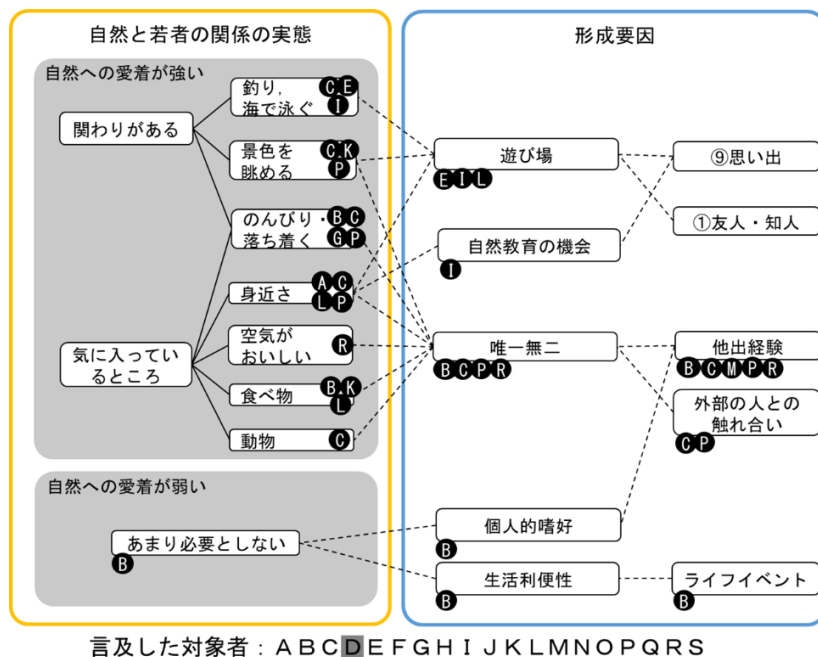


図3-7 自然と若者の関係の実態とその形成要因

3-3-7-2. 自然と若者の関係の形成要因

自然とのつながりにおいて、直接的な関わりや気に入っているところを挙げた対象者は、そのつながりの形成要因として“昔（子供の時）”の思い出を振り返ることが多かった。帰省するたびに海で泳ぐと述べていたIは「小学生の時、めっちゃ入ってた。ほぼ、晴れたら海、みたいな。着衣水泳とか海だったよ」と述べ、海が遊び場でもあり、教育の場としても利用されて

いたことを示した。事実、海に近い相川学区や吉浜学区出身の対象者からは、海に関する語りが多かった。特に、相川学区出身の E、I、M からは海で着衣水泳の授業があったという話題が共通し、彼らにとってそれが印象的な体験だったことがわかる。教育の側面から見ると、着衣水泳の他、筆者自身が所属していた吉浜小学校では自然を活用した授業カリキュラムが豊富だった。海岸を清掃する活動「海岸清援隊」や、地引網をして地元の漁師さんたちと触れ合うイベントなどもあった。また、北上川の上流に位置する岩手県岩手町の小学生との交流など、自然を介した人と人との交流が豊富だった。さらに、インタビューでは、自然に関する思い出の語りの中で①友人・知人の存在が挙げられることも多く、R は「ちっちゃい頃は、〇〇（友人の名前）とか△△（友人の名前）とかと海に行っていたりした。釣りとかも行ってたし」と述べていた。以上より、自然を介した「遊び」の機会、「教育」の機会が、対象者の自然とのつながりをより強固にしたということができるだろう。

一方、若者の自然への愛着の形成要因として、多くの対象者から「他出経験」や「外部の人との触れ合い」が挙げられ、北上町の自然が「唯一無二」であることを強調する語りが多かった。例えば、R は「空気がおいしい。こっち（関東）来てからめっちゃ思いました」（コード：「空気がおいしい」「唯一無二」「他出経験」）と述べた。さらに、自然に対しては概ね否定的だった B でさえ、「でも北上町ってすごいと思う。こんだけ自然がいっぱいあって、しじみも大きい獲れるし。他にないところがいっぱいあるよね。それはすごいなって思う」（コード：「食べ物」「唯一無二」「他出経験」）と述べ、誇りをもっていた。さらに、石巻の市街地で一人暮らしをしたことがある C は、北上町と石巻の市街地との違いを語ってくれた。

C の語り

「石巻にアパート借りて住んでた時は、なんていうだろ、近くに山が無いのがすごい嫌で。鳥の声も聞こえないし、そういうのが嫌で。」

「やっぱ（北上には）商業施設がないってみんな言うけど、商業施設が近くにあったらいいのかっていうと私はそうは思わない。別に北上から車で遠くまで行ってもいい。全然住むのに不便って思わない。毎日（職場まで）40 分ぐらいかけて通ってるけど、全然苦ではない。道中キジとか出てくんのね。昨日シカもいたの。なんかこういうのって絶対石巻じゃ無理じゃん。そういうのは好き。」

「（自然の豊富さは）前の職場でも今の職場でもうらやましいってめっちゃ言われるもん。裏山あってって言うത്『え、裏山？』みたいな。石巻（の市街地）にはやっぱ海とかなないじゃん。北上はちょっと車飛ばせば海水浴場あるしさ、温泉あるしさ、すごい良いところだと思うんだよね。畑とかあるのもすごい珍しがられるし。」

（コード：「身近さ」「動物」「唯一無二」「他出経験」「外部の人との触れ合い」）

C は自身の他出経験や職場先での人との触れ合いから、改めて北上町の自然を実感したといえる。対して、全対象者の中で過去に北上町外に住んだことが無いのは A と D のみであるが、D からは自然に関する語りは無く、また A からも特に自然に愛着をもっている様子はいくつか

なかった。例えば、アンケートの地元志向「北上町に対して誇りに思うことがある」について、この評価が高かった対象者からは自然に関する語りが多かった中、Aは以下のように語った。

Aの語り

「例えばめちゃくちゃ有名な何かがあるってわけじゃないし、自分もその有名なものに携わってるよってなったら誇りに思えるかもしれないけど、出身地に対して（誇りに）思えるものは正直ない。まあただ、いいところには住んでるかなって思うから、（誇りに）全く思わないわけではない」

Aは自然の「身近さ」について気に入っていると述べたものの、他人に対しては北上町のことを誇りに思っていない様子であり、語り全体からも自然への愛着はそれほど高くないと判断できた。他出していないAやDの事例を考慮すれば、他出経験は自然への愛着を育むうえで重要な要素になるといってよいだろう。

なお、多くの対象者が自然への志向を語る際に、「個人的に」という前置きがあったことから、自然への愛着の違いは個人的嗜好の要因も大きいと考えられる。ただしここでは、これだけ多くの回答者から自然への愛着が強いと判断できる発言があったことを強調しておきたい。

3-3-7-3. 自然が若者と北上町のつながりに果たす役割

これまで触れてきたように、若者の自然への愛着は、若者の北上町に対する「誇り意識」を醸成することが分かった。これは先に紹介したCの発言や、MやIの発言から示すことができる。

Mの語り

「でもやっぱり自慢できる場所だったなって思うんですよ。どこの場にいても、どういうところに住んでたの？って話にはなるじゃないですか。こういうところですよ、山に行きます、川に行きます、海に行きますみたいな。釣り大会があります、着衣水泳で海落ちますみたいな。やっぱりそういう、ここでしかできないことが、すごい大きかったんだなって」

Iの語り

「北上町に育ててもらったみたいな。海とかもそうだし」

MやIの語りからは、自然への愛着が若者と北上町のつながりにプラスの影響を与えたということが分かり、改めて自然と触れ合う機会の重要性を示すものでもある。

また、若者の自然への愛着は、北上町に対する「いつまでも変わってほしくない」気持ちに影響することについても紹介したい。これに該当するのはKである。Kはこれまで触れてきた

ように社会的つながりが希薄であるが、思い出を振り返るときなど、頻りに「自然が好きだった」と発言しており、K の自然への愛着は強いと判断できた。そんな K は、筆者がアンケートの地元志向「北上町にいつまでも変わってほしくないものがある」の内容についてたずねると、「自然かな」と一言だけ答えたことから、K の自然への愛着は北上町とのつながりを保つうえで重要な意義をもつと捉えることができる。

最後に、若者にとって“自然”は居住場所や生殖家族の考慮事項にもなり、将来的に若者が北上町を居住地として選択する可能性も示唆された。例を挙げると、まず、P はアンケートにおいて「いつか（またはこれからずっと）北上町に住みたい」の評価が 5；とても思うだった。P はその理由の一つとして自然の存在を挙げ、自然がある環境が「住みやすさ」につながっていると述べた。

P の語り

「川の近くで育ったから川見るとすごいほっとするんだ。それで（今の）家を選んでいくくらい川が好きなんだ。仙台でも七北田川の近くに住んで、毎日川見れるところに住んで、今も（東京都の）荒川の近くに住んでる。一番落ち着くんだよね。」「贅沢だと思うんだよね。夏とかも窓開けて泥棒とかも絶対来ないから。人も安心できる人だし。窓、全開にして夏の風が通ったり、カエルの鳴き声が聞こえて、星が見える。すごい贅沢！だってこんなの都会の人だって、わざわざ山奥まで行ってホテルって体験してるんだもんね。」

「今、この時点で住めるかって言われたら住めないけど、いずれ、職業的・金銭的に余裕ができれば住みたい。どこに住みたいかって考えたときに一番浮かんでくる場所ではある」

一方、自然環境の豊かさが子どもの教育上、良い影響を与えると認識し、将来的に自然が豊富な環境に住み、子育てしたいと考えている対象者もいた。以下の C の語りから、北上町はその候補の一つとなっていることが分かる。

C の語り

「私もできれば、結婚とかしたら絶対北上で過ごしたいなって思う。だからそういう人と巡り合いたいなって思う」「将来的に子どもも北上で育てたい。できればね。やっぱ虫とか取らせたいし、虫の苦手な子になってほしくない。私も北上で育ってなかったらこんなに好きにはなってなかったと思う」

また、Q や R から同様の語りが見られた。

Q の語り

「やっぱり、ある程度自然がある中で子育てしたほうがいいなと思ってる。情緒を育むというか、自然を愛する感性というか、そういうのを育むために。ビルとかしかないような場所で育つと、子供たちも愛着とかかわかないんじゃないかなって」

R の語り

「自然がいっぱいでいいですね。子育てとか北上でしたいって思いましたもん。なんか北上で育った子っていい子じゃないですか？個人差はありますが、あんな自然豊かなところで育てたらいいな、みたいな。北上じゃないにしてもああいいう田舎がいいなと思っています」

アンケート結果では、理想の居住地条件の中で「自然環境に恵まれている」は比較的多く選択されていた。これらの語りは、その根拠になり得るものである。一方で、同じ理想の居住地条件の中で「自然災害の危険性が少ない」を選択したのはたったの6人で、津波被害を受けた対象者が多いにも関わらず、あまり重要視されていないことがわかっている。インタビューでは、それを裏付ける語りがいくつかあった。例えば、Jは仏壇を置くための「家」を新築する際、「(J自身は)普通にオーシャンビューがいいなって思ったんだけど、でも叔母ちゃんたちが『海、やんだー(=嫌だ)』って言うから」と述べ、結局海が見えない場所に新居を建てた。このような語りからも、若者たちの自然への愛着が強いことが感じられ、「自然災害の危険性が少ない」を選んだ対象者が少なかった背景には、若者たちの自然への愛着が自然への恐怖心を上回っていることが考えられる。また、このJの語りからは、若者であるJ自身の考えと叔母などの親戚との考えには差異があり、自然への愛着の強さは若者特有であることを示唆している。

以上より、自然への強い愛着は概して、北上町と若者のつながりにプラスの影響を及ぼしているといえる。また、アンケート結果では「北上町を『月に1回』訪問する人は他の項目でも肯定的地元志向が高く、『年に1回』訪問する人は否定的地元志向が高い」や、「訪問頻度が高い人ほど(北上町への)居住欲があり、直接的な関わりが居住欲と関係している」という指摘をした。本項目で触れてきたように、町外在住者は自然を介した北上町との直接的な関わりがあり、肯定的地元志向と関係していることや居住地として理想だと考えられていることが立証されたことを踏まえると、矛盾の無い結果といえることができる。

3-3-7-4. 自然を媒介に若者と北上町のつながりを維持・充実させるうえでの課題

まず、若者の自然への愛着の形成要因から、自然を媒介に北上町と若者のつながりを維持・充実させるうえでは「遊び」や「教育」の機会が重要であることが分かった。しかし、現在は北上町内における3つの小学校が1つに統合され、小学校は内陸部にあることや、復興事業等による海辺の整備などで子どもたちと自然との距離が以前より遠くなっている現状が予想でき

る。本研究では、現在の北上町の実態把握には至らなかったが、分析結果を踏まえれば、今後は豊かな自然環境を生かした教育の機会や遊び場の創出を促進していくべきと考える。

また、他出経験や外部の人との触れ合いが若者と自然のつながりを強化するはたらきがあることがわかった。外部の人と触れ合う機会の創出は、小学校や中学校などの教育機関内でも可能であり、有効と考えられる。

最後に、自然を媒介にした若者と北上町のつながりを考慮する上で、“復興まちづくり”のあり方について検討する必要がある。これについては自然への愛着が強い C が提起してくれた。

C の語り

「最近北上でも山とか崩してんの。そして女川でも防波堤みたいな建ったけど、ああいうのを見るとマジやめてほしいって思う。ダンプとか通るのもすごい嫌。ほんとにやめてほしい。すごい悲しい、そういうの。なにがあっただろうって思い出せないのもあるし」

C は続けて、「景観を壊す復興に関しては反対。まちづくりとか何かを作りますってなったときに山を崩してっていうのはやめてほしい」とも述べ、自然や景色への思い入れが強い分、それを害する変化は望んでいないようだった。しかし、こうした復興事業による町の変化に関しては、ポジティブに捉える意見も目立った。例えば、以下の J や O の語りを紹介したい。

J の語り

「今道路はけっこうきれいになって、しかも今（相川に）ある家の近くの、お墓に行く道がすごい急なんだけど、そこまで歩いて行くのってじいちゃん・ばあちゃんって結構きついんだよね。そこに行きやすいように駐車場ができんの。そういうのは震災前よりも良くなっていく感じがするから、震災前よりも住みやすくなるってのは、北上町にとってすごくいいことなんだなって思うから。実際、今自分は住所は置いてないけど、みんなが便利になるならすごいいいな一とは思う。なんかすごい漠然としてるけど」

O の語り

「変わらないことが必ずしも良いことじゃない。変わらないとこのままどんどん人が減ってっちゃうんだらうなって思ったら、たしかに今の雰囲気とかはすごく好きなんですけど、新しい人が入ってきたりだとか、地域として残っていくんだったら変わった方がいい部分もあるんじゃないかなって」「とくに北上町は（震災の）被害が大きかったんで、元通りにするのはちょっと難しいかなって。だったらもう使いやすいように変わっていったらいいんじゃないかなと思う」

こうした「復興まちづくりによる変化」に対する考えの違いは、それぞれが北上町に何を求めているかによって異なると考えられる。例えば、アンケートの結果では理想の居住地条件に

において、多くの若者が生活利便性に関する項目を重視していた。したがって、例に挙げた J や O のような意見が出ることは理に適っており、多くの若者がこうした変化をポジティブに捉えていると推測することができる。一方、C は先述したように、生活利便性を差し置いてでも北上町で自然豊かな環境に身を置きたい、という気持ちが強く、自然が充実した環境を優先的に求めていることが分かる。

ただし、実際は「復興まちづくりによる変化」は「山を崩す変化」や「防潮堤ができる変化」、「道路や駐車場ができる変化」などに分けることができ、それぞれの変化に対してそれぞれの意見があり得る。事実、R は「復興まちづくりによる変化」に対して複雑な感情を抱いていた。

R の語り

「無駄に発展してほしくはないなと思います。震災があって、開発とかが進んで、なんかショックっていうか、複雑な気持ちになった。あのままだ良かったなとも思うし、なんか（便利なように）もっとやった方（変わった方）がいいんだろうなとも思う。」

R は震災で被災し、実家が町外に移転した。⑨思い出の項目で触れるように、R は今でも北上町を訪れて住んでいた時のことを思い出すことがあるという。このように、空間としての「家」など、物質的つながりを失った対象者にとっては、自然の景観など“いつまでも変わらないもの”の存在が北上町とのつながりを保つものになっている。これらのことから、復興事業を進めるにあたっては、変わるべきことと変わらないであるべきことを考慮することや、町外在住者を含めた様々な立場から検討することが重要だと考える。

そして、R は先に紹介した語りにつけ、「でも北上は北上だからなって。変わっても人は変わらないしな」とも述べた。この語りからは、家族、友人・知人、近所などの社会的つながりもまた“いつまでも変わらないもの”と捉えられていることが分かり、故郷が変化していく現状を目の当たりにしてきた若者たちが“いつまでも変わらないもの”を追い求めていると捉えることができる。

3-3-8. 歴史・文化を媒介とした若者と地域のつながり

3-3-8-1. 歴史・文化と若者の関係の実態

インタビューでは、若者から北上町の地域における歴史・文化に関する語りがいくつかあった。まずは、若者がそれらをどのように捉えているのか、その実態を見ていきたい。なお、⑥の先祖が「イエ」に関する歴史であるのに対し、本項目で指す「歴史」は、地域全体で共有している歴史である。

まず、歴史・文化に関する語りは、大きく「神社」と「地域の伝統・風習」に関する語りに分けられ、前者について触れたのは G のみだった（図 3-8）。G は震災前、追波集落の釣石神社

の近くに住んでいた。G は、筆者がアンケートの地元志向「北上町にいつまでも変わってほしくないものがある」の内容についてたずねると「神社」の存在を挙げた。

G の語り

「神社。つぶれてほしくないな、と思う。つぶれるっていう言い方おかしいけど。たまにテレビとかにも出たりするし、定期的に来る人もいっからね」（コード：「神社」）

釣石神社は震災前から、「落ちそうで落ちない受験の神様」と呼ばれる巨石のご神体が話題になり、受験合格祈願で賑わう神社である³⁸。この巨石は東日本大震災でも微動だにできなかったことから、一層話題性が増し、今でも年末年始などは多くの人で賑わっている。なお、現在は吉浜集落などの神社も合祀しており、多くの住民にとっても釣石神社の存在意義は大きい。釣石神社に限らず、北上町において神社は住民の暮らしと密接に関係するものだった。集落の祭りや地域行事が開かれる場であり、また、近所の子供たちの遊び場でもあった。G も神社でよく遊んだ住民の一人であり、思い入れが強い様子だった。加えて、G は生活利便性の面をはじめ、北上町には愛着をもっていないが、昔神社で遊んだ記憶、思い出については熱く語ってくれた。全体的なつながりが希薄と判断できる G が神社について語ってくれた意義は大きいと考える。

一方、「地域の伝統・風習」に関する語りは様々だった。地域の伝統・風習の「担い手になっている」と語るのは、A や D で、どちらも北上町内在住者だ。これまでも触れてきたように、この両者は近所とのつながりも強いと判断できる。また、地域の伝統・風習について「続いてほしい」と語ってくれたのは Q や S である。例えば、Q はアンケートの地元志向「北上町の雰囲気や土地柄が気に入っている」の具体例として地域の伝統・風習を挙げ、以下のように語った。

Q の語り

「そういう簡単に捨てれるものを今でもやってるってすごいなって思う。そういう古い習慣とかは変わらない方がいいんじゃないかなって思う。」（コード：「続いてほしい」）

しかし、地域の伝統・風習に関してネガティブな語りもいくつかあった。例えば、M は震災後にみる地域の伝統・風習の変化に対して違和感をおぼえたことを話してくれた。

M の語り

「獅子舞が今でも続いているんですけど、町とかが頑張っている盛り上げようと（外部から）いろんな人、大学の人とかを呼んでやってたんですけど、それが今までの伝統じゃないですけど、今まで地元だけでやってたのがそうなるっていうのが受け入れられないところがあった。そんなことしなくてもな一、みたいな」（コード：「変化への違和感」）

³⁸ 石巻観光協会 HP、河北新報「“落ちない石” 耐えた 石巻・釣石神社」（2011 年 4 月 10 日朝刊）参照。

また、B は、②近所の項目で触れたように、地域行事を「面倒なもの」と認識している。家族の言動やライフイベントによる自身の立場の変化が影響していると考えられる。

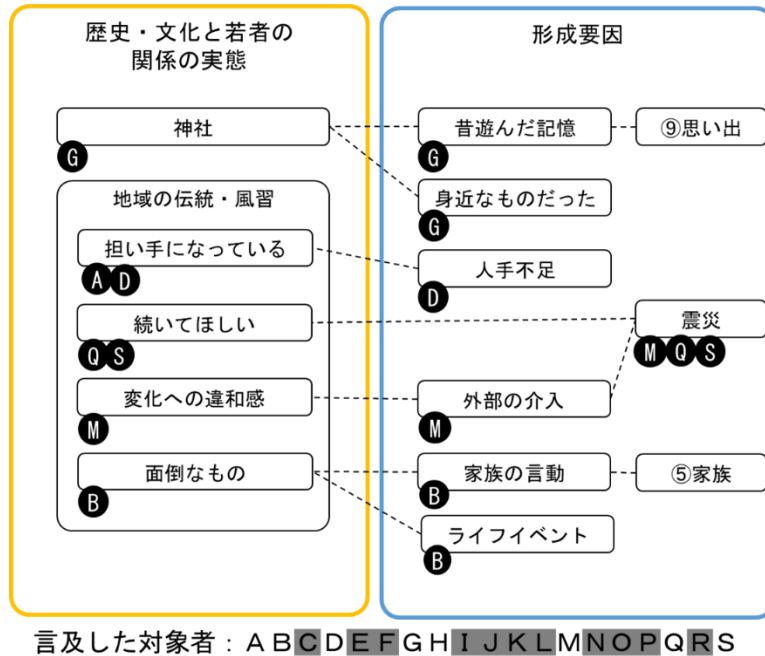


図 3-8 歴史・文化と若者の関係の実態とその形成要因

3-3-8-2. 歴史・文化と若者の関係の形成要因

まず、②近所の項目でも触れたように、A や D は地域行事の「担い手になっている」が、その背景として D は「人足りないから（参加している）」（コード：「人手不足」）という語りがあった。D 自身は、行事の担い手になることには決して消極的ではないため、「人手不足」は良いきっかけになっていると捉えることができるが、裏を返せば地域行事の存続が危うい状況を示している。事実、D の集落では震災の被害はないが、人口減少や担い手世代の減少が著しい。これは北上町全体に共通する課題であり、地域行事そのものがなくなってしまった集落、あるいは存続が危うい状態を危惧する声もある。ここで、これに関連する語りとして、S の語りを紹介したい。

S の語り

「地元ならではのものとか、祭とかすごい好きだから続いてほしい。（追波集落で）おみこしとかしてたじゃん。ああいうの、多分今やってないでしょ。春先でやるから全然帰るタイミング合わせられるし、帰ったら見たい、とかめっちゃ思ってた。」（コード：「続いてほしい」）

S は震災で自宅を被災し、実家が町外にあるにも関わらず、地域行事のためであれば北上町を訪れたいと考えているのである。加えて、アンケート調査結果でも、北上町外在住者に訪問目的をたずねたところ、「石巻市外宮城県内」在住者で「祭やイベント」の割合が高かった。頻繁には通えない対象者にとってみれば、地域行事をはじめとする「祭やイベント」は直接的な関わりをもつ良いきっかけとなっている。しかし、東日本大震災で集落コミュニティの再編、自治組織の解散、神社の合祀、担い手の減少の加速が生じ、地域行事そのものをやめざるを得なくなった集落もある。アンケートの結果などから、S のように、地域行事そのものに愛着をもっている若者は少なくないと予想され、歴史・文化を媒介とした若者と北上町のつながりは危うい状態といえることができるだろう。

さらに、先に触れた M の「変化への違和感」も人口減少に起因する。外部の人による地域行事への介入は、存続や盛り上がりの意味では良い影響もあるが、M のような意見をもつ人もいる。詳しい実態は知ることができなかったが、このような外部の介入は自己満足に終わる可能性を孕んでいるといえる。

3-3-8-3. 歴史・文化が若者と北上町のつながりに果たす役割

まず、「神社」について話題に出したのは G のみであり、アンケート結果でも「神社」を目的に訪れる人の総数は少なかった。しかし、G の語りからは「神社」の存在意義を感じとることができた。G は神社でよく弟と遊んだと話し、今でも半年に 1 回ほど北上を訪れ、「弟と遊んだところとか、友達と遊んだところとか、この場所でこう思ってたなーとか」を思い出すと述べた。直接的な関わりにより、「神社」は若者にとって思い出を想起するスポットであり、“いつまでも変わらないもの”の一つでもある。

また、「地域の伝統・風習」などの地域行事が、アンケートの訪問目的の中の「祭やイベント」と同義と捉えれば、これまで触れてきたように、遠くに住む若者にとっても直接的な関わりをもつ一つのきっかけになっている。さらに、地域行事はアンケートの地元志向「北上町の一員としての実感がある」の背景として語られることが多かった (D、M、Q)。

D の語り

「地区の行事とか出でれば一員だ、みだいな感じ」(コード:「地域の伝統・風習」)

M の語り

「獅子舞とかの町の行事とかに参加してると、(一員としての実感があると) 思う」(コード:「地域の伝統・風習」)

また、Q も地元の誇りとして「やっぱり地域の伝統がまだあるようなのが。獅子舞とか。あとはまあ、お寺に地域みんなが集まって卒塔婆もらって、みたいなのか」と、地域の伝統・

風習を挙げたうえで、それへの参加を通して一員としての実感がわきおこったことを話してくれた。

Q の語り

「お寺で和尚さんから卒塔婆をもらうっていうのがあって、親が忙しくて自分が頼まれた。なんかそういうのにも参加したいし、参加した時に『だれだれの息子です』って言うのと『あーそうなんだ』みたいになるのが、やっぱり一員としての実感があるっていう根拠」

Q が触れるように、地域行事への参加によって地域の人との交流が生まれ、若者は②近所とのつながりを実感することができる。したがって、地域行事を介した近所との直接的な関わりが若者の一員としての実感を生み出していると推測することができる。

3-3-8-4. 歴史・文化を媒介に若者と北上町のつながりを維持・充実させるうえでの課題

歴史・文化を媒介とした若者と北上町のつながりにおける課題は、形成要因で触れたように「地域の伝統・風習」が存続の危機にある現状である。地域行事の衰退は不可抗力でもあり、金銭的な事情や住民の負担を考慮すれば、やめることが正当な判断であるケースもあるだろう。本研究の主張としては、これまで示してきたように、若者を含め、他出した住民が集まる場としての地域行事の意義を強調し、従来の形を変えてでも存続させていく方法について考えていくべきとする。ただし、外部の介入は一定の効果は期待できるが、住民との信頼関係や継続性が欠かせない。

また、地域の伝統・風習は B のように「面倒なもの」としての印象をもつ住民もいることがわかった。今後は、地域の伝統・風習の意義をあらゆる世代で共有することや、多様な対象を受け入れ、強要しない柔軟さが必要になろう。

3-3-9. 思い出を媒介とした若者と地域のつながり

3-3-9-1. 思い出を介した若者と北上町のつながりの実態とその形成要因

次に、思い出を媒介とした若者と地域のつながりについて分析してみたい。しかしその前に、本項目はこれまでの 8 つの項目と異質であることを補足しておかなければならない。インタビューの中では、ただ単に“思い出”を振り返る語りはいくつもあり、思い出は誰もが持っているもの、つまり、思い出と若者の関係の実態は対象者の数だけあるものと判断できた。しかし、本研究では、若者と北上町のつながりにとって重要な“思い出”に着目したい。したがって、通例でいえば、思い出と若者の関係を整理したうえで、思い出が北上町と若者のつながりに果たす役割を考察していたが、それらをまとめて【思い出を媒介とした若者と北上町のつながりの

実態】とした。さらに、コードの分類は【思い出を媒介とした若者と北上町のつながりの実態】と【思い出を媒介とした若者と北上町のつながりの形成要因】と【思い出（自体）の形成要因】の3つの枠組みで行った（図3-9）。そして以下では便宜上、これら3つを同時に分析する。そして最後に、【思い出を媒介に若者と北上町のつながりを維持・充実させるうえでの課題】について単独で記述する。

まず、北上町と若者のつながりを媒介する思い出に着目すると、それは主に①友人・知人、②近所、⑤家族、⑦自然、震災などの要素で構成されていることが明らかになった。思い出は、社会的つながりや自然とのつながりに起因しているということができる。さらに、その思い出自体が若者と北上町のつながりをさまざまなかたちで媒介しているケースがいくつかあった。

はじめに、GとRの事例を見てみたい。GとRはどちらも震災で被災し、実家を町外に移転した対象者であるが、今でも北上町を訪問することがあり、思い出に浸ることがあると話してくれた。

Gの語り

「まあ落ち着くね。だからたまに車で（北上町に行く）。小さい頃の思い出とか思い出しながらっていうときは落ち着く」「小学校から高校ぐらいまでいたわけだから、弟と遊んだところとか、友達と遊んだところとか、この場所でこう思ったなーとか、そういうのがあるから」「弟とキャッチボールしたとか、親と野球したとか。釣石神社のあの道だね。嬉しかったのは、俺の球が速くなったとか弟の球が速くなったとか、そういう経年的な成長を同じ場所でやってて感じれたのはすごくいいことかなーと」（コード：「訪問時によみがえる」）

Gは町内に家がなく、生活利便性の面でも北上町に可能性を感じていない。そんなGにとっては「思い出」が北上町とのつながりにおいて重要であることがわかる。また、以下に示すRの語りからも「思い出」の存在の重要性が示唆される。

Rの語り

「こっち（関東）にいても思い出せないこととかが、白浜に帰って家が合った場所とかの前に行くと、ちっちゃい頃ここでなんかお姉とあったなー、みたいなことを思い出すと、すごい懐かしい気持ちになる。その懐かしい気持ちが嬉しくて」（コード：「訪問時によみがえる」「景観」）

Rの語りからは「訪問」という直接的な関わりの意義や、「景観」の存在が北上町とのつながりにおいて必要不可欠な要素であることがわかる。また、思い出を介した北上町とのつながりがあると判断できた対象者の属性を見てみると、J、Q以外のE、G、K、R、Sは町外へ実家を移転した対象者であることがわかった。彼らにとって「思い出」は“いつまでも変わらないもの”として、北上町とのつながりを保つ大事な要素になっているということができるだろう。

一方、Jの事例をみると、Jには①友人・知人の項目で触れたように中学校統合時の仲間同士の対立の思い出がある。今でも友人とその話をすることがあると言い、結果的に友人・知人とのつながりを強化する役割を果たしていると考えることができる。

さらに、これらの思い出自体が対象者の「北上町への愛着」を生んでいることもわかった。例えば、全体的に愛着が高いと思われたEに、愛着の元になった体験について質問すると、以下のように答えた。

Eの語り

「昔遊んだ記憶とか強くて。それが一番強い、かな。よくチャリこきまわって海周辺を探索したりとかね」

Eは震災で自宅を被災し、現在は石巻市内に定位家族と共に住んでいる。Eはインタビューの中で、将来的に北上町に“別荘”を建てるのが夢だとも述べており、やむを得ず離れた北上町に強い愛着をもっていると捉えることができる。

また、思い出を振り返ると同時に「人格形成になった」と語ったのはQやSだった。

Qの語り

「だいたい6歳とか7歳とか8歳とか、それぐらいまでに人間の人格の基本的な部分ってのが作られる。だからやっぱり自分のルーツだなと思う。懐かしい場所。」

Sの語り

「自分が浮きやすいというのがあって、はみ出た部分にめっちゃ気遣う癖がある。クラスとかで不思議なことにどっちつかずの子っているじゃん。私よくそういうタイプで。それですっごいそわそわした経験があるから、一人の子にすごく気を遣う。北上ってすごい家族っぽいじゃん。知らないおじさんと話しても『あーどここの子ね』って仲間意識めっちゃ強いじゃん。なんかそういう仲間つくるのとか一人の子を混ぜるとかはあ
る」

QやSの語りからは、若者にとって北上町は自身のルーツとして常に意識されていることが分かる。

次に、思い出を「居住場所の考慮事項」として挙げていたRの事例について見ていきたい。Rはアンケートの理想の居住地条件の1つとして「思い出がある」を選んでいて、Rは町外へ実家が移転したにもかかわらず、以下の語りからは北上を居住場所として考慮していることが分かる。

R の語り

「思い出があるからこそ北上がいいな一っというのがある。なんかちっちゃい頃の思い出って特別だなんて思う。中1までだけどいろいろ楽しかったな一っ、そこで暮らせたのもって思い出ができただろうな一っ。親にもずっと思い出があるわけだからそういう場所で自分も住めたらな一っって思ってた」

R は学生であり、アンケート結果においても理想の居住地条件で「思い出がある」は「学生」から多く望まれていたことと合致する結果となった。インタビュー調査結果からはその理由を深堀りすることはできなかったが、居住地を考えるうえで仕事上の都合などを考慮する必要性がない学生にとっては“思い出”は重要な居住場所の考慮事項だということができる。また、思い出の背景に社会的つながりがあることを踏まえれば、「学生」は社会的つながりの充実度やなじみのある場所を居住地条件として重視しているとも考えることができる。

しかし、思い出とのつながりを感じている対象者が複数いる一方で、K は「マイナスな記憶は思い出したくない」としている。K はアンケートの地元志向「北上町での出来事は思い出したくない、思い出さないようにしている」は4；やや思うと評価し、「北上町には関わりたくない、関わらないようにしている」の評価も4；やや思うだった。その背景をたずねると、これまでに触れてきた友人・知人や家族、震災が要因として挙げられた。

K の語り

「震災のこともあるけど、まあ人間関係のこととかはちょっとマイナスな記憶としてあるから、あまり思い出さない方が楽。」(コード:「マイナスな記憶は思い出したくない」)

ただし、K は、楽しかった思い出についても話してくれた。その内容は「バーベキュー」や、子ども会行事で行う夏の「肝試し大会」、「花火」など小学校の時のイベントが挙げられ、「ああいうイベントのイメージがある。地域のイベントの思い出が強いかも」と述べた。K は、社会的つながりは希薄であるものの、自然やイベントを介して北上町とのつながりを保っており、こうした小学校の時の思い出が背景になっていると推測できる。ただし、K は①友人・知人でも触れたように中学校における人間関係はポジティブに捉えていない。K の社会的つながりへのネガティブなイメージは、家族との関係と中学校での人間関係に起因する。

最後に、K が思い出したくないものとして挙げた「震災」について、他の対象者の例を見てみたい。他の対象者は、震災を必ずしも「思い出したくないもの」や、ただの辛酸に終わらせていないことがわかった。その代表例が R と S の語りである。

R の語り

「震災があったからこそ今の自分があるかな一っと思うこともある。すごい貴重な体験というか、他の人には無い経験をして、それも自分の1つの要素になってるから悪いこととしては捉えていないです。いろんな人と会えたり、いろんな出会いもあったかな」

S の語り

「震災から数か月後に高校で授業がやっと再開されたんだけど、震災前と同じ筆箱を出せる子と、カバンからシャーペンしか出せない子がいた。担任の先生は被災してなくて、でなんかクラスにちょっといじれる子がいて、その子がシャーペン一本しか出せなかった。そのときに先生が『ちゃんと筆箱出しなさいよ〜』って言ったら『すみません、ちょっと被災しちゃって』って笑って言って、先生は謝るけど気をつけないといけない。その子は笑って流せてたけど、一個一個気をつけないといけないことがあって、1 か月ぐらいは必要最低限のことしか言わないみたいな、そんな時期はあったかな。」

また、S は、発災直後に偶然にも消防士をやっている実の兄（両親が若い頃に離婚し、兄は父方に引き取られ、S 自身は母親のもとで暮らしてきた）と再会したことも話してくれた。

S の語り

「震災が無かったらお兄ちゃんと絡むとかなかっただろうし、全部がマイナスだったわけじゃないなって思ってる。学校にシャーペンしか持ってこれなくてちょっといじられて悲しい思いをしたりとか、っていうのも、私お母さんから『人から嫌なことをされたらその分人に優しくできるでしょ』ってずっと教えてもらってた。なんか震災を通してひねくれてた時期もあるけど、そういう風に思えるから全然ダメな経験ではなかったって思う」

さらに、S は関東の会社で働き始めてから気づいたこともある。

S の語り

「私にとっては3月11日の14時46分（東日本大震災発生時刻）ってすごいドキドキする時間なの。仙台に居た時もそうだけど、その瞬間なんて365日分の1秒でしかないし、大変だったねって振り返るわけでもないし、東京の人は普通に働いてるし。だけど出身地の話とかして『石巻です』って言うときすごく申し訳ない態度をとられる。でもその日は普通に過ぎていく。寂しいなって思ってたけど、普通の生活が出来るようになることが復興、というか、いちいち原点にもどって悲しむことだけが復興じゃないな—とか思ったりした。」

これらのRやSの語りからは、若者目線の震災の影響が浮かびあがる。また、RとSはどちらも県外在住者であり、実家が町外へ移転している点で共通する。思春期に感じた葛藤や複雑な思いは、様々な「出合い」や人とのつながりの中で、本人たちにとり、プラスに影響を及ぼすものに変化していったことが伺い知れる。

3-3-9-2. 思い出を媒介に若者と北上町のつながりを維持・充実させるうえでの課題

“思い出”は物質的なものではないが、R の証言から分かるように、景観などの物質的なものを介して維持することができることがわかった。思い出の存在は、とくに震災で被災して実家ごと町外に移転した若者にとっては、北上町とのつながりを保つ上で重要である。そのことを考慮すれば、復興まちづくりにおいては、⑦自然の項目で触れたように「残しておかなければいけないもの」について議論・検討することが求められる。

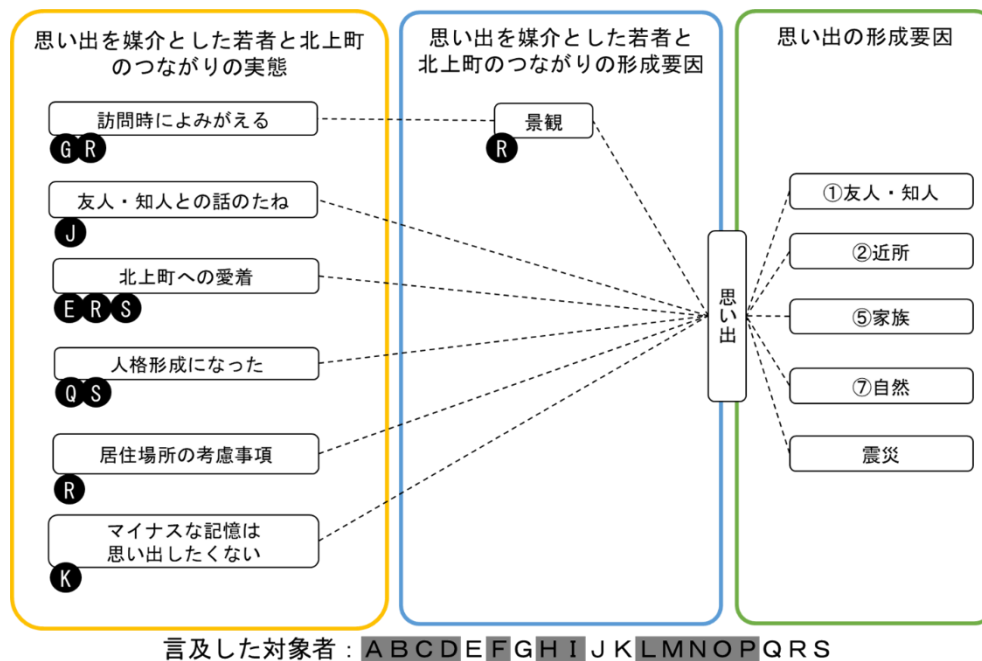


図 3-9 思い出を媒介とした若者と北上町のつながりの実態とその形成要因

3-4. 9つの媒体同士の関係性

これまでの分析から、北上町と若者のつながりを媒介する9つの項目はそれぞれ独立するものではなく、互いに関係していることが予想できた。そこで、MAXQDA (Release11.1.4) のコード間関係ブラウザを用いて、9つの媒体同士の重なり合いに着目する分析を行った。図3-10は分析の結果を示したものである。“重なる”とは、9つの媒体に分類されたコードの範囲同士が重複していることを意味している。たとえば、ある対象者の語りのある部分において、「⑤家族」に分類されるAというコードと、「⑥先祖」に分類されるBというコードとが同時に出現する場合、「⑤家族」と「⑥先祖」が「重なっている」と考えた。図における「線」は重なっていることを、「数字」は重複している語りの数を意味する。なお、インタビューの中で一人の対象者が何度も同じ内容を語った傾向はなく、そのバイアスによって数字が大きく動いたことはない。

分析の結果、まず、⑤家族が他の全ての項目と重複しており、中心的役割を担っていることがわかる。これまで触れてきたように、家族の地域コミュニティへの関わり方が、若者本人と近所や友人・知人とのつながりの維持・充実度に影響するという結果と合致する。また、家族が地域を大事にしている姿勢や家族との活発なコミュニケーションが、先祖や自然などの他のつながりを強化する役割を担っていることも明らかになっており、その結果とも合致する。

さらに、①友人・知人、②近所が、それぞれ5つの媒体と重複していることがわかる。これらより、北上町と若者のつながりにおいては、社会的つながりが中心的役割を担っていると考えることができる。これは、地域行事を介した近所とのつながりが若者の帰属意識に影響していたり、思い出の背景に社会的つながりが含まれていたことから自明である。加えて、⑦自然の項目において、Rが復興まちづくりによる町の変化に対して「でも北上は北上だからなっ。変わっても人は変わらないしな」と述べていたことは、津波被災をうけた北上町の若者にとって社会的つながりがどれだけ重要な役割を担っているかを示すものでもある。

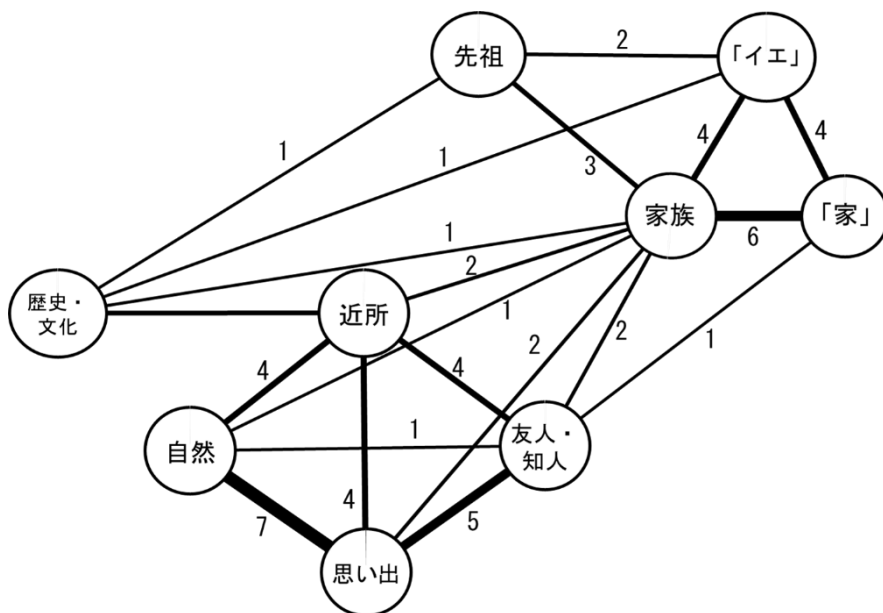


図3-10 若者と北上町のつながりを媒介する9つの媒体同士の関係性

一方、③「家」、④「イエ」、⑤家族は互いによく重複しており、関係し合っていることがわかる。建物としての「家」は「イエ」意識と同時に語られることがあったことや、被災後の移転には家族の意向・事情が反映されているケースが多かったこと、「イエ」意識の背景には家業や祖父母からの意識付けなどがあったことなどを踏まえれば、この3つは切り離すことのできない関係にあると言える。

最後に、⑦自然と⑨思い出は重複している部分が多いことがわかる。⑦自然で、直接的な関わりをもっている対象者や気に入っているところを挙げた対象者は、昔の思い出を振り返ることが多く、自然と触れ合った記憶が北上町とのつながりを維持するうえでは重要だと考えられる。また、先に触れたとおり、思い出の背景には①友人・知人、②近所、⑤家族、⑦自然が含まれていたことから、人と自然の複合的な記憶が若者と北上町のつながりを媒介するものとして重要な役割を果たしているということができる。

3-5. 小括

インタビューにより得られた語りを分析した結果、若者と北上町のつながりを媒介するものは大きく9つに分けることができた。さらに細かいコーディングを行うと、各項目の中で、若者は多様なかたちで地域とつながっていることが分かった。インタビュー結果では、主にそれらの多様な実態と形成要因、地域と若者のつながりにもたらす効果を整理し、加えて、9つの媒体で地域と若者のつながりを維持・充実させるうえでの課題について論じた。

まず、①友人・知人の項目では、直接的な関わりを現在でも維持している対象者がいる一方で、関わりが希薄な対象者もいた。こうした違いの背景には様々な要因が挙げられた。学年や学区、集落ごとの特色もあるが、小学校や中学校において友人たちとともに“思い”を共有した経験が、若者と友人・知人の関係維持に影響していると考えられた。その“思い”を共有する経験の一つとして震災が挙げられ、若者と友人・知人のつながりにとり、震災はプラスの影響を与えていることが分かった。また、学校の規模が小さく、クラスの人数が少なかったことも、若者たち同士の心理的なつながりを育んでいるようだ。これらは地方の教育機関のあり方について視座を与えるものになろう。一方、家族や地域に焦点をあてると、Hが、友人同士のコミュニティに馴染めなかったのは親と近所の関係性に起因すると語った。したがって、家族が地域コミュニティに馴染めているか否かが、若者と友人の関係を形成するうえで重要であると考えられる。また、同年代でも結婚、出産などによってライフコースに違いが生じ、友人との間に見えない壁ができることも示唆された。さらに、進学、就職などによって若者の居住場所は様々である。とくに、震災によって町外に実家を移転した若者が一定数いるため、現状は若者が集まる拠点になり得るものが無く、友人・知人を介した北上町と若者のつながりを維持する上での課題が明らかとなった。

次に、②近所の項目では、震災の影響によりコミュニティが再編されたにも関わらず、あらゆる形で関係が維持されていることがわかった。とくに、震災以前と変わらずに自分たちを受け入れてくれるなどの語りや、若者たちが近所との関係性を「いつまでも変わってほしくない」

と認識していることは、町の変化を目の当たりにしてきた若者たちにとり、近所同士のコミュニティがいかに重要なものを示唆している。また、北上町における近所付き合いの特徴として「助け合い」や「子供にやさしい」などの側面を認識する声があり、将来、生殖家族と共に住む理想の居住地として考慮されていることが分かった。その一方で、多くの若者が「コミュニティの窮屈さ」について言及していた。こうした、若者自身の地域コミュニティへの関わり度合いや認識の背景には、①友人・知人の項目と同様に“家族のはたらき”があることが分かった。とくに関わりの面では、Lの父親が仕事で北上町の知人と付き合いがあること、Aの親が自治組織に入りやすい環境を作ってくれたことなどが語られ、これらが本人たちに与えた影響は大きいと判断できた。ただし、結婚などのライフイベントにより近所に対する認識が変化することも示唆され、子育て世代を含む若者、または子供たちを寛容に受け入れるコミュニティのあり方について考えていく必要がある。また、都市への他出経験や外部の人との触れ合いによって、近所同士の付き合いの有難さや貴重さを認識し、受け入れやすくなる傾向があることが分かった。今後は、若者の他出という選択肢を尊重する風潮が家庭や教育機関に求められると言えよう。

次に、③「家」の項目では、空間としての「家」に愛着をもつ若者の存在が明らかになった。とくに、Cの「家」を大事にする気持ちや、Jの誰も住んでいない「家」の存在は、若者との媒体との関係性の強化にも寄与しており、新たな視座を与えるものとなった。また、Cと「家」のつながりの強さは、家族とのコミュニケーションによって「家」の成り立ちや、ルーツが共有されていることに起因していた。加えて、子孫による家督相続を前提として「家」の構造が考えられているケースも複数あり、「家」とのつながりの背景には家族との活発なコミュニケーションや「イエ」意識が大きく関係しているといえる。ただし、「家」の存在に固執するのは“古い考え”だと認識する声もあった。一軒家に居住する文化をもつ北上町において、こうした若者の意識は受け入れがたい風潮にあると推測できるが、若者と地域のつながりを考慮する上では「家」に対する価値観を強要しない寛容さも必要といえるだろう。また、「家」を被災した対象者の居住移動の経緯と背景をみると、「新築」や「修繕」、移転の有無などは、その時々状況に合わせ、自分を含めた家族にとって最適な選択をしていることが分かった。土地や制度、災害保険などの事情でやむを得ない状況があるものの、判断の過程で若者自身の意志が反映される余地が全くなかった対象者がいることは事実である。自分の意志が反映されて北上に残ることを決意したMが他のつながりで充実していることや、Sが「もし家建て直せるとか、北上に家建てたらなんかもうちょっと帰ってたのかな」と想像し、「家」の存在が北上町との直接的な関わりそのものであることなどを考慮すれば、若者や子供の意志をくみ取り、尊重する環境が求められているといえよう。

次に、④「イエ」の項目では家督相続の習慣の存在と、対象者によってその認識が多様であることが明らかになった。中には、家督相続の理のままに将来の居住場所を決めている対象者の存在も見られた。しかし、この習慣に対して否定的な意見をもつ若者はおらず、小さい頃から家族（とくに祖父母）に言われてきたことや地域に漂う雰囲気、若者にイエ意識を根付かせたといえることができる。とくに、家督相続によるしほりがあまりない家庭で育った若者も

“勝手な義務感”をもっているケースが明らかになった。また、キョウダイの中で生まれ順は絶対的なものではなく、状況に合わせてキョウダイ間で交渉が行われていることや、本来継ぐべき立場であっても自分の仕事ややりたいことがあり、継ぐことについてはっきりと決めきれない現状があった。「イエ」意識と自分自身の意志の間で“揺れている”若者の存在が明らかになった。ただし、「イエ」意識は若者と地域をつなぎ留めるうえで絶対的な役割を果たすものではなく、女性を外に出すなどの危うさを持ち合わせている。一方、C、N、Pのように「イエ」意識とは関係なく北上町に住みたいと主張する若者がいることから、本研究では北上町と若者のつながりにおいて「イエ」意識が果たす役割は決して絶対的なものではなく、他の要因によって住みたい意識は十分に芽生える可能性があることを強調したい。

次に、⑤家族の項目では、家族と若者自身の関係性が他のつながりに寄与することを示し、家族の役割の重要性を明らかにした。とくに、家族と若者の間に活発なコミュニケーションがあること、家族を介して地域コミュニティとの接触があること、家族が地域を大事にしている姿勢などが若者と北上町とのつながりに影響を与えていることがわかった。ただし、Bは結婚、出産を経験したことにより定位家族への執着がなくなったと語り、ここでもライフイベントによる立場の変化が意識の変化をもたらすことが示唆された。一方、定位家族のそばにいる必要性を感じている対象者も複数おり、「親の世話」があることや緊急時のことを想定していることが明らかになった。また、「三世代同居」に関する語りが目立ち、分析からそのメリット、デメリットが明らかになった。メリットは、Cの祖父母とのコミュニケーションが他のつながりに寄与している事例や、Qが三世代同居の意義を認識して地元に戻ってきたいと感じている事例からも自明である。しかし、HとKは過去に祖父母から価値観を強要された経験を持ち、2人はそのことを主な要因として北上町とは「一定の距離を保ちたい」と話す。家庭のあり方は様々であるが、HとKの例を見れば、三世代同居によって若者が居心地の悪さを感じ、結果的に北上町と若者を遠ざけることになったといえる。近所とのつながりで言及した窮屈さやしほりに関する課題も踏まえれば、Kの提案を援用し、今後は価値観を広げる機会や若者の拠り所の創出が求められる。

次に、⑥先祖の項目では、お墓やルーツに関する語りが見られた。まず、町内・町外在住に関わらず、お墓参りの習慣は若者にも定着しているといえ、お墓参りやお墓を守っていくことに関して義務感や使命感を感じている若者の存在も明らかになった。また、先祖とのつながりを介するものとしてお墓の存在意義を強調した対象者や、家族が北上町に住むことを判断した要因の一つとしてお墓の存在を挙げた対象者もいた。自分の骨を入れたいという若者自身の声も複数あり、一生涯にわたり北上町とのつながりを介するものとしてお墓の存在意義を示すものとなった。さらに、ルーツについて意識することは帰属意識に影響することが明らかになった。その一例として、Hは社会的つながりの希薄を感じている一方で、北上町の歴史や先祖に思いをめぐらし、自分が北上町の一員であることを実感しているようだった。③「家」の項目で触れたCの事例も踏まえれば、歴史の理解やルーツの共有は、若者と地域のつながりを形成するうえで意義があり、そのような機会を家庭内や教育機関において充実させることが求められる。一方、Pは震災を機に北上町におけるルーツを意識し、同時に、町の変化とともに先人が

生きてきた事実が忘れ去られていくことを懸念している。今後はルーツを何らかの形で残していく作業の重要性和方法について議論することが求められる。

次に、⑦自然の項目では、多くの対象者が北上町の自然を誇りに思っており、愛着があることが分かった。社会的つながりが希薄な B や K から自然への愛着を示す語があり、町外在住の K には自然を介した直接的な関わりがあることがわかった。自然を介した直接的な関わりは今後の展開可能性に期待できる。こうした愛着の形成要因として、自然を活用した「遊び」や「教育」の機会、他出経験や外部の人との触れ合いが挙げられる。しかし、自然を活用した「遊び」や「教育」の機会について、現在は 3 つの小学校が 1 つに統合され、内陸部へ移動したことや、復興事業によって海辺が整備されたため、自然に触れ合う機会の減少が危惧される。一方、自然環境に恵まれた条件を居住地として肯定的に捉えている若者も一定数いた。単純に住みやすいと感じている人や、子供にプラスの影響を与えると認識している若者の存在も明らかになった。その反面、居住地として否定的に捉えている B は「都市性」の不足を指摘した。B はインタビューの中で北上町における生活利便性の不足を強調しているため、自然に対する否定的な意見は、不便さに対する不満に起因すると考えてよい。しかし、B をはじめ、A、C からは北上町にスーパーなどができて景観や雰囲気が変わることを望んでいない発言があった。加えて、C は「復興まちづくり」で自然の景観が変わることに否定的な意見をもっている。無論、復興まちづくりによって便利になる側面を認め、肯定的に捉えている対象者もいるが、A や B、C の発言からは「いつまでも変わらないもの」を追い求める若者の心情が明らかになった。さらに、R のように便利に変わっていく現状と、景観や雰囲気が変化していく現状の狭間で複雑な心境を抱える若者もいた。R はその葛藤の中で「でも北上は北上だからなって。変わっても人は変わんないしな」と述べ、「いつまでも変わらないもの」の一つとして「人」、つまり社会的つながりを挙げた。この発言は、社会的つながりが若者と北上町とのつながりの中心的役割を果たしていることを改めて示唆するものとなった。

次に、⑧歴史・文化では「神社」や「地域の伝統・風習」の存在意義が明らかになった。まず「神社」は、とくに G にとって身近な存在であった。実家が町外に転出した G にとって「神社」は「いつまでも変わらないもの」の一つであり、思い出を想起するスポットでもあることが明らかになった。また、地域の伝統・風習は若者たちが北上町との直接的な関わりをもつきっかけになる。地域行事に参加したいという声は複数あり、①友人・知人で指摘したような“集まる拠点”の創出にもなり得る。さらに、地域行事は地域の人との交流を生み、一員としての実感を醸成する効果があることも明らかになった。しかし、人口減少や担い手不足により地域行事は衰退しつつある。本研究の主張としては、衰退は不可抗力である現状を踏まえ、若者を含め、他出した住民が集まる場としての地域行事の機能に期待し、従来の形を柔軟に変えながら存続させていく方法について検討すべきとする。加えて、地域行事は②近所の項目でも指摘したような“しぼり”を孕んでおり、立場によっては面倒なものだと認識されていることもある。今後は、地域の伝統・風習の意義をあらゆる世代で共有することや、多様な対象を受け入れ、強要しようとしないう柔軟さも必要になると指摘できる。

最後に、⑨思い出は、とくに町外へ実家を移転した対象者にとって重要な役割を果たしていることが明らかになった。北上町訪問時に思い出に浸る対象者や、景観を介して震災以前の記憶を思い出す対象者などがいた。Rの「こっち（関東）にいても思い出せないこととか（中略）思い出すと、すごい懐かしい気持ちになる。その懐かしい気持ちが嬉しくて」という語りは、思い出そのものを介して北上町とのつながりを感じている証拠である。思い出自体もまた“いつまでも変わらないもの”なのである。また、これらのことを踏まえ、記憶と若者をつなぐ景観の重要性と保存の検討の必要性を改めて指摘したい。さらに、思い出の背景としては①友人・知人、②近所、⑤家族、⑦自然、震災などの要素が挙げられ、社会的つながりの中心的役割がここでも証明された。加えて、Rは「思い出がある」を居住地条件として重視しており、アンケート結果の「学生」の傾向と一致した。学生は社会的つながりの充実やなじみのある場所を重視する傾向があるといえることができる。しかし、思い出とのつながりを肯定的に捉える若者が一定数いる一方で、Kは「思い出したくないこと」として中学校の時の人間関係を挙げている。Kの北上町とのつながりは全体的に希薄だと判断でき、家族とも「一定の距離を置きたい」と述べている。こうした社会的つながりの希薄さや思い出したくない過去の存在がKの居住場所を決定する要因の一つになっていると推測できた。また、Kは「震災」も思い出したくない要素として挙げているが、他の対象者の証言をみると、必ずしも「震災」を「思い出したくないもの」や、ただの辛酸に終わらせていない対象者の存在が明らかになった。特に、県外他出者の2人から震災をポジティブに捉えている語りが目立ったことから、ここでも他出経験による様々な人との出会いやつながりが本人と思い出とのつながりにプラスの影響を与えたといえる。

以上より、若者と地域のつながりの多様性を明らかにすることができた。また、全体に共通することとして、家族をはじめとする社会的つながりの重要性、ライフイベントとライフコースによる意識の違い、他出経験や外部の人との触れ合いの重要性、復興まちづくりのあり方、“いつまでも変わらないもの”を追い求める若者の存在などを指摘することができた。次章では、アンケート結果と照合できる部分も合わせ、総合考察では家庭、教育、まちづくりの側面から若者と地域のつながりのあり方について考えてみたい。

4. 総合考察

4-1. 本研究における「若者と地域のつながり」とその先に目指すもの

本研究では、津波被害により自宅を転出した対象者を含め、様々な属性をもつ若者の実態を包括的かつ個別的に明らかにしようとしてきた。本章では、それを踏まえ、「若者と北上町のつながり」を育むには何を考えればよいか、また、何をすればよいかを考察していきたい。しかしその前に、本節で「若者と北上町のつながり」とは何か、そしてそのつながりの先に目指すものを明確にしておきたい。

調査結果を踏まえると「若者と北上町のつながり」のあり方は、大きく、「居住」、「(居住を除いた)直接的で具体的な関わり」、「意識上のつながり」の3つに分けられると考える。本研究では、これら3つが最終的にはそれぞれの形で“地域の活性化”につながることに期待し、議論を展開したい。例えば、「居住」というつながりは、すなわち地域への定着を意味しており、地域の持続可能性を支える基盤を作り得ることは言うまでもない。ただし、地域の活気づくりには、若者がただそこに居住するだけではなく、若者が“関与”することが重要と考える。検討する必要があるのは、若者がいかに地域の一員としての意識を持ち、“関与”できる環境を作れるかであり、このことも踏まえてつながりの育み方を考える必要がある。

また、「直接的で具体的な関わり」は、町外に実家ごと転出した若者、および自分の意志で他出した若者にとって、重要なつながりである。本研究では、アンケート結果で訪問頻度が高い若者ほど北上町への居留意欲が高い傾向が明らかになっており、これは、「関係人口」が定住という形に収着する理論³⁹とも一致する。ただし、町内に実家がない対象者にとって、「居住」というつながりを作るには、住居や土地の制限があり、ハードルが高い。ましてや若者が通勤・通学などの生活上の利便性を居住地の条件として重視しているのであれば尚更のことである。しかし、若者による「直接的で具体的な関わり」自体が地域活性化の助力となる可能性も十分にある。例えば、「地域行事」について、調査結果では、若者のつながりを育むために存続方法を検討すべきだと論じたが、「地域行事」が若者を地域に取り込む引力となれば、それが結果的に地域行事を存続させる意味になり、地域の伝統、あるいは歴史・文化の保存につながると考える。あるいは、若者が集まる場所ができて、若者が通うようになれば、まちづくりに関する若者ならではのアイデアがそこに生まれるかもしれない。したがって、若者の「直接的で具体的な関わり」は地域の活気づくりに良い循環を生むと考えられる。

そして、アンケート結果で「訪問頻度」や「友人・知人との付き合いの維持や充実度」などの「直接的で具体的な関わり」が「地元志向」と関係していたことを踏まえると、志向すなわち「意識上のつながり」が「若者と北上町のつながり」の根底にあり、それをいかに育むかが鍵となる。

³⁹小田切（2018）によれば、関係人口（「地域に関わってくれる人口のこと」 指出（2016））には、「関わり」の段階があり、「無関係」から特産品購入や寄附（ふるさと納税など）、頻繁な訪問、二地域居住などを経て「移住」に至るとされている。ただし、小田切はその中間に多様な階段があることを想定することの必要性や、移住・定住を考えない人々も立派な関係人口であるとしている。

次節以降では、以上を踏まえた上で調査結果を振り返りながら、「つながり」が地域活性化に一定の効果を発揮することを念頭に、それを育むには何を考えればよいか、また、何をすればよいかを家庭、地域レベルで考察していきたい。

4-2. 若者と地域の多様なつながりの実態

はじめに、アンケート結果とインタビュー結果により明らかになった、北上町と若者との多様なつながりの実態を振り返りたい。

まず、アンケートでは北上町外在住者に訪問頻度や訪問目的、友人・知人の数をたずねることで北上町との関わり方を把握した。町外在住者で北上町に「まったく訪れない」という人はいなかったことから、震災で実家を町外に移転した対象者を含めた町外在住者の全員が、何らかの形で故郷の北上町に関わろうとしていることが分かった。加えて、訪問の頻度が高い人で地元への気持ちが肯定的になる傾向があり、特に北上町への居留意欲と関係していることから、訪問という直接的な関わりは、最終的に対象者の「居住」というつながりを導く可能性がある。

一方、その訪問の目的は、多い順に「先祖供養」「帰省」「友人・知人に会う」「景色・雰囲気を感じたい」「親戚に会う」「神社」「祭やイベント」「買い物」「仕事」であった。ここでは、実家が町外に移転した対象者の存在、今後の展開可能性を考慮して、「帰省」「親戚に会う」「買い物」「仕事」を除いた5項目（「先祖供養」「友人・知人に会う」「景色・雰囲気を感じたい」「神社」「祭やイベント」）について触れ、関わり方の多様性と可能性について論じたい。

まず、「先祖供養」はアンケート結果において、現住所に問わず多くの対象者が選択した。お墓参りの習慣が若者にも根付いているということができ、インタビューではこの習慣に対する若者の義務感や使命感を感じる語りがあった。一方、アンケートの理想の居住地条件では「先祖のお墓がある」を選択したのは58人中、たったの1人で、インタビューの中でも居住地への絶対条件としてお墓の存在を強調する若者はいなかった。しかし、インタビューの中では「自分の骨も入れたい」という趣旨の語りや、先祖の話を後世に受け継ぎたいといった語りもあり、今後の人生を通して、お墓を介して北上町と関わっていこうとする若者の存在が明らかになった。お墓の存在自体、北上町と若者のつながりを媒介するものといえるが、お墓にまつわるバックグラウンドを共有してこそ、その意義が発揮されると考えられる。

次に、「友人・知人に会う」の観点で若者と北上町のつながりの実態を整理したい。アンケートでは、現在でも連絡を取り合う友人・知人の数をたずね、その数が10人以上に及ぶ若者がいる一方で、0人と回答した対象者も2人いた。友人との付き合いの維持と充実度は地元志向にも関係しており、対象地と若者のつながりにおける社会的つながりの重要性を示す根拠となった。インタビューでは、友人を「家族みたいな存在」と語り、「意識上のつながり」が深い対象者も一定数いた。その背景には人数の少なさ、思いの共有経験、震災などが関係していることがわかった。

また、「景色・雰囲気を味わう」はアンケートの中で北上町外石巻市内在住者から比較的多く選択されていた。北上町に距離的に近い条件を持つことが影響したと考えることができる。イ

インタビューでは、現住所ごとの傾向は把握できなかったが、自然を介した直接的な関わりが数多く見られた。その内容は、アンケートと同じく“景色を眺める”以外に、“釣り”や“海で泳ぐ”などの自然を生かしたアクティビティなども挙げられた。一方、アンケート結果では理想の居住地条件で「自然環境に恵まれている」が比較的多くの回答者に選択されていた。インタビューでは、対象者の全員が地域の自然に対して愛着、誇りをもっており、地域の自然の「住みやすい」、「教育上良い影響がある」などの側面がアンケートの結果の背景にあることがわかった。

次に、地域の文化に関する「神社」「祭やイベント」について見ていきたい。まず、前者については、インタビュー対象者の中ではGが、身近な存在、思い出を想起する場所・スポットとして挙げていた。「祭やイベント」については、アンケート結果では石巻市外宮城県内在住者で選択した人が多かった。このことから「祭やイベント」などの地域行事は、距離的な条件などで頻繁に通うことができない若者でも、直接的な関わりをもてる機会になりうることを示し、今後の展開可能性に期待できる。さらに、アンケートの肯定的地元志向は宮城県外在住者で平均値が高い項目が目立ち、とくに「一員としての実感がある」が県外在住者で高いという、一見矛盾する結果となった。この項目について、インタビューでは現住所別の分析を行っていないが、「一員としての実感がある」の背景としては“地域行事”の存在を挙げる対象者が複数おり、地域行事を介した地域の人との交流、つまり近所とのつながりが若者の“一員感”を醸成すると考えることができる。

また、アンケートの理想の居住地条件では、「家族が近くにいる」という項目が「宮城県外在住者」や「学生」で多く選択されていた。その背景としてインタビューでは、家族の身に何かあった時のことを考えて選択した対象者や、三世代同居の意義を感じて将来的に定位家族と住みたいと考えている対象者、家を継ぐ立場であることを自覚している対象者などの存在が明らかになった。若者と家族の関係の形成要因は決して能動的なものばかりではなく、ある種の義務感・使命感によって保たれているといえることができる。また、これらの家族とのつながりやイエ意識の存在は、地元を拠点に働く若者が多かった背景の一つとしても考えられる。

これらの他に、インタビューではアンケートからは抽出することのできなかった若者と地域のつながりの実態が明らかになった。例えば、対象者が長らく住んできた家、すなわち空間としての家が若者と北上町とのつながりにおいて重要な役割を果たしていることが分かった。とくにCは、現在住んでいる家に関して、親族が苦労して建てたエピソードを家族と共有しており、イエを継ぐ意識はとくに無いものの、「家を大事にしていきたい」という意識が強い。またJは、震災で家を失ったが仏壇を置く目的で家を再建した。現在そこに住んでいる人はいないが、お盆などに親族が集まる拠点になっており、自身も友人たちに会うために頻繁に北上町に通っている。無論、町内に実家がある対象者にとっては、家が物理的に北上町と若者をつなぐ拠点になっていることは言うまでもないが、これら2人の事例では、若者自身が住居の意義や役割を自覚し、大切に思う気持ちがある点で他の対象者と異なる。この場合、住居は若者と地域のつながりを媒介するものとして、十分な意義を発揮するといえるだろう。

また、「家」にまつわる語りの中では、将来的に若者の生殖家族がともに住むことを前提として住居の構造が考えられている事例がいくつかあった。アンケートでは一人っ子の町内在住者

の割合が高かったため、家督相続の習慣の存在を指摘し、インタビューでも確かに多くの若者が家督相続について意識していることが明らかになった。住居の構造まで考慮している対象者をはじめ、中には家督相続の理のままに将来の居住地を決めている若者もいた。ただし、若者と地域とのつながりの上で「イエ」意識は絶対的なものではなく、キョウダイ間で交渉があることや、自分の仕事ややりたいことがあって継ぐ決意ができていない若者の存在が明らかになった。これはすなわち、アンケート結果で長子と次子で現住所に法則性がなかったことを裏付ける結果となった。また、家督相続は女性を地域の外に出す性質をもっており、若者と地域を遠ざける役割ももっていることが明らかになっている。

また、上に挙げた例以外でも、知人同士を介するキーパーソンによって情報交換が行われていたり、SNS を介した交流があるなど、若者と地域の多様なつながりの実態が明らかになった。これらは、全国の被災地含め人口減少に悩みを抱える地方において、若者とのつながりのあり方を検討するにあたり、新たな視座と可能性を与え得るだろう。

4-3. 若者と地域のつながりにおける家族の役割と社会的つながりの重要性

4-3-1. 若者と地域のつながりにおける家族の役割と重要性

インタビューの分析結果より、若者と北上町とのつながりを育むうえでは家族が中心的役割を果たすことが分かった。例えば、親と地域コミュニティの関係性が若者本人に影響を与えていることを指摘してきた。H は、自分が地域のコミュニティや友人同士のコミュニティに馴染めなかったのは、親が地域コミュニティに馴染めていなかったからだとし、今でもそれが原因で北上町に関わりをもつモチベーションがわからない。それとは対照的に、同学区出身の A は、地元の自治組織に所属し、地域に定着している。A はその背景について「親が頑張っていたから」と述べ、自分が地域コミュニティに馴染めているのは親のおかげだと話した。その他にも、近所とのつながりや友人・知人とのつながりなどが充実している対象者からは「家族が北上町を大事にしているから」という語りが複数見られた。前述したお墓や「家」、「イエ」意識、地域行事などに対する若者自身の意識も、家族のそれらに対する姿勢や家族との活発なコミュニケーションに起因していることがわかっている。

一方、全体的に北上町とのつながりが希薄だと判断できた B、H、K は、全員が家族との関係に対してポジティブではなかった。B は生殖家族をもつため、定位家族への執着がないことを背景として挙げ、H と K は三世代同居の中で価値観を強要された経験、考えのすれ違い、相互理解の不十分が背景にあった。H と K はどちらも、「家族とは一定の距離を保ちたい」と述べており、現在は石巻市外宮城県内に一人暮らしをしている。

また、アンケートでは、同じく石巻市外宮城県内在住者で「思い出したくない」や「関わりたいくない」の否定的地元志向が高い傾向が明らかになった。先に触れた H と K は一例であり、その背景の全貌を明らかにすることはできなかった。しかし、K が家族に関して苦い思い出を抱えていたり、友人とのつながりを否定的に捉えていることから、同地域在住者は、北上町に

における社会的つながりに関して嫌な思い出があるため、一定の距離を保つことができる居住地をあえて選択している可能性がある。K は家族と離れてから家族との関係性が良くなったと述べているが、価値観の強要などにより地域への居心地の悪さを感じ、結果的に北上町と若者を遠ざけることになったのは事実であり、これらの事例は家族の役割の重要性を示すものとなった。

これは、地方だけでなく、あらゆる地域に共通すると考える。地域と若者のつながりを育むうえでは、家族の地域へ関わる姿勢が若者の意識に影響することを念頭に、家族のあり方を考慮する必要がある。

4-3-2. 北上町における社会的つながりの重要性

分析結果では、若者と家族のつながりに加えて、友人・知人とのつながりや近所とのつながりなどの社会的つながりが重要であることが明らかになった。

例えば、アンケート結果の分析によると、友人・知人の付き合いの維持と充実度は地元志向と関係していることがわかり、インタビューでは、友人を“特別な存在”と語る対象者が多かった。

また、近所とのつながりに関して、アンケート結果では理想の居住地条件として「近所とのつながりが強い」を選択したのはたったの6人だった。しかし、インタビューでは近所とのつながりを「住みやすさ」「教育上プラス」と認識している声があり、生殖家族と共に住む場所として考えている若者もいた。さらに、「震災後も変わらずに受け入れてくれる」という語りが複数あり、その有難さを感じている若者もいた。やむを得ない転出を経験したり、コミュニティの再編を目の当たりにしてきた若者にとって、近所とのつながりは安心材料であり、“いつまでも変わらないもの”としてその意義を再認識したと考えられる。

また、町外に実家を移転した若者にとって思い出の存在は重要であり、その思い出の構成要素として社会的つながりが多く挙げられた。加えて、アンケートの理想の居住地条件では「友人・知人が近くにいる」や「家族が近くにいる」、「思い出がある」を選択した回答者の割合は「学生」で多かった。職業のしほりなどがなく比較的自由的な立場の学生にとっては、社会的つながりの充実が居住条件として求められており、その役割の重要性を示す結果となった。

一方で、インタビューの中では、多くの対象者が北上町における近所同士のコミュニティに窮屈さを感じていた。「北上町に対して不満に思うことがある」の背景として語られることもあり、不満の内容は生活利便性に関するものだけではないことも明らかになった。地域コミュニティのこのような一面が、理想の居住地条件として「近所とのつながりが強い」を選択した回答者が少ない結果をもたらしたと考えられる。

また、先に触れたとおり、全体的につながりが希薄だと判断できた対象者は、家族をはじめとする社会的つながりに対してあまりポジティブでないことがわかっている。先に触れたKの例においても友人や近所とのつながりが希薄であることが、彼女自身の北上町とのつながりを

希薄にしている。以上を踏まえ、若者と地域のつながりにおいては社会的つながりの充実化が必須だと提言することができる。

なお、多くの若者が近所とのつながりにおけるマイナス面を認識していながら、それを嫌う人と嫌わない人がいるのは、小さい頃の体験や価値観を広げる機会の有無に原因があると考えられる。また、社会的つながりの希薄は、拠り所としての“居場所”がないことと関連していると考えられる。それらについては次節以降で考察する。

4-4. 成長過程における地域とのつながりの育み方

若者たちの語りから、地域と若者のつながりは小学生や中学生のときの経験によって育まれることが明らかになった。したがって、ここでは北上町における小学生や中学生の周囲環境がどうあるべきかを、原体験の重要性、教育機関におけるつながりの育み方、地域で子供を育てること、多様な価値観に触れる場の創出、の4つの観点で考えたい。

まず1つ目は、原体験の重要性である。原体験は、主に自然との触れ合いの経験を指す。アンケートやインタビュー結果からは、自然が若者と北上町のつながりにとり、いかに大切なものが明らかになった。全員が自然に愛着、誇りをもっており、直接的な関わりのきっかけとして十分にその機能を果たしている。その自然を媒介にした若者と北上町のつながりの背景には、「海、山、川で遊んだ」「海で着衣水泳の授業をやった」などが挙げられ、遊びや教育機会における自然との触れ合いがつながりを育むといえる。しかし現在は、震災前に3校あった小学校が一つに統合され内陸部に移ったことや、復興事業等によって海辺が整備されたことなどを踏まえると、子供たちと自然との距離が以前より遠くなっていることが予想される。本研究では、現在の北上町の実態把握には至らなかったが、今後は意識的に豊かな自然環境を生かした教育機会や遊び場を創出していくべきだと考える。

2つ目は、教育機関におけるつながりの育み方について考えたい。自然を生かした教育機会の重要性は先に触れたとおりだが、他にも教育機関においては“共有”経験が重要であるといえるだろう。例えば、“思い”の共有経験である。これはインタビュー結果の①友人・知人との関係の形成要因で触れた「苦労した思い出」が該当する。例えばJは、北上中学校と相川中学校が統合した時に、苦しい思いを共有した仲間をもち、その仲間たちとは今でも頻繁に集まる。また、「震災をみんなで乗り越えた」と語る対象者もあり、その経験が現在の友人とのつながりに影響しているという。加えて、友人・知人とのつながりの背景として「人数が少なかったから」と語る対象者も複数おり、一人ひとりと親密な関係を築くことができる環境が評価されていた。地域と若者のつながりを育む意味では、これらの事例は地方における教育機関の存在意義や、学校内におけるチーム活動ならびに団結経験の意義を示唆するものとなった。さらに、“共有”経験という意味では、先祖などのルーツの共有も若者と地域のつながりにおいて重要な役割を果たすといえる。先祖とのつながりを感じることは、帰属意識や、お墓や家などを守りたいという担い手意識を生む。教育機関だけではなく家庭や地域において、歴史を学ぶ機会や先人たちが生きてきた事実を共有する機会を創出することが必要だ。

3つ目は、“地域”で子供を育てるということについて考えてみたい。アンケートでは、近所とのつながりが強いことは居住地条件としてあまり望まれていなかったが、インタビューでは、北上町における近所同士の関係性は子供に良い影響を与えると認識されていることが分かった。CやG、Kなどからは、近所の人に優しくされた思い出を聞くことができ、本人たちもそのあたたかさを実感しているようだった。最終的に、「自分の子供もそういう環境で育てたい」と考えている対象者もいることを踏まえれば、近所同士の強固な関係性は、若者や子供の視点からしても維持されるべきと考える。具体的には、地域による見守りの体制や各世代が交流できる機会が有効と考えられる。

最後に、多様な価値観に触れる場の必要性について論じたい。本研究ではアンケート結果とインタビュー結果を通して、他出経験や外部の人と触れ合う経験がもたらす効果や必要性について言及してきた。例えば、インタビュー結果より、それらの経験は北上町における自然の希少価値の認識につながり、誇り意識や自然を介した多様な関わりの創出に寄与することが挙げられる。また、先述した地域コミュニティの窮屈さはインタビューの中で「不満」の内容として語られることも多かったが、他出経験によってその有難さを認識し、受け入れられやすくなる傾向がある。他出経験や外部の人と触れ合う経験によって、故郷を客観的にみることができるのだ。これにより、“勝手な義務感”であった「イエ」とのつながりを断ち切ることができた若者の存在も明らかになっている。一方で、Kは地域内の価値観の狭さを実感した自らの経験をもとに、多様な価値観に触れる機会の創出を提案していた。Kの事例については次節で検討する。

さらに、アンケートの分析結果より、肯定的地元志向は宮城県外在住者で高い傾向にあった。これらより、他出経験が最終的に北上町とのつながりを強めると提言することができ、本研究の主張としては、小学校や中学校で町外の人や大人と触れる機会を増やすこと、中学校や高校などの教育機関や家庭において積極的に他出という選択を推奨することを提案する。ただし、大学進学にあたり必然的に市外に他出しなければいけない状況はあるが、対象者の経歴をみると高卒で職に就く人も多い。この背景に経済的要因などがあるとすれば、他出経験を推奨するには経済的支援など制度面の充実が必須である。近年、宮城県は移住・定住政策に力を入れているが、都市への人口流出は歯止めがきかず、求心力の強化が不可欠になっている⁴⁰。しかし、本研究で明らかになったように、たとえ都市圏へ他出した若者でも、故郷に愛着を感じ、いつか戻りたいという意識をもつ若者がいる。そのことを念頭に、行政側はUターン者への経済的支援など、若者の選択肢を広げるしくみについて考えていく必要がある。

4-5. まちの柔軟さと寛容さの必要性

本研究では、地域と若者のつながりを保つために、地域が柔軟に変わっていくことや寛容に若者を受け入れる必要性についてたびたび論じてきた。ここでは、その2点について整理していきたい。

⁴⁰ 河北新報「社説 移住定住促進 仙山連携で支援の強化を」（2019年12月13日朝刊7面）参照。

まず、若者の拠点創出の側面から、地域の“柔軟さ”の必要性について論じたい。インタビュー結果では、①友人・知人の項目において、友人同士が集まる拠点の不足について指摘した。とくに、対象者の若者は就職や進学を機に地元を離れて居住場所がバラバラになっただけではなく、震災による実家の転出、移動があったため、帰省する場所自体が分散している。加えて、北上町内には若者同士が気軽に集まれるような施設がなく、北上町内在住の若者同士がわざわざ石巻の市街地や仙台に出てきて会うことも少なくない。したがって、北上町内に拠点ができれば、友人や北上町への関わりの機会が増えると考ええる。直接の訪問頻度や友人・知人との付き合いの維持が、結果的に居留意欲や帰属意識、愛着と関係していることを考慮すれば、拠点の創出は若者と北上町のつながりにおいて鍵となるに違いない。本研究では若者たちがどのような拠点を欲しているかを把握するには至らなかったが、環境省が2018年4月に設置したビジターセンター⁴¹の活用や、気軽に利用できるカフェのような場を創出することが有効と考えられる。

また、こうした施設だけでなく、地域行事などの一時的なものも拠点としての機能を果たし得ると考える。先述したように、アンケートでは「祭やイベント」は石巻市外宮城県内在住者で選択した人が多く、距離的な条件などで頻繁に通うことができない若者でも、直接的な関わりをもてる機会になりうる。実際、インタビューでは「一員としての実感がある」の背景として“地域行事”を挙げる対象者がいたり、「地域行事のために帰ってもいい」という趣旨の発言があった。ただし、伝統的な地域行事は存続の危機にある。金銭的な事情や住民の負担を考慮すれば、地域行事をやめるという判断が妥当なケースもある。今後、地域行事の存続意義を考える際は、地域行事への若者の期待やつながりに及ぼす効果を踏まえることが必要だ。そして、やめるという選択肢以外に、形を変えてでも存続していく可能性について検討すべきと考える。また、今後は伝統的なものだけでなく、白浜ビーチパークを活用したイベントやツール・ド・東北などの機会をいかし、他出した若者でも参加できるようオープンなイベントのあり方を検討すべきである。

次に、地域の“寛容さ”の必要性について考えたい。インタビューでは、たびたび、周囲と若者自身の価値観のすれ違いについて語られることがあった。とくに、社会的つながりが希薄だったHやKの語りが目立った。例えば、Hは、祖父から建物としての「家」やイエを継ぐことに関して価値観を強要された経験をもち、祖父の考えを“古い考え”と一蹴した。また、Kは「地域が狭いがゆえに干渉しすぎてるところが嫌い。ほっとしておきなよってという感覚をもってほしい。(中略)自分の考えはあってる、みたいな。価値観が狭いんだよ、きっと」と語った。これまで人数の少なさや三世代同居はつながりにプラスの影響を及ぼす要素として取り上げてきたが、小さなコミュニティ空間だからこそ、そこから漏れてしまう人がおり、結果的に嫌悪感や否定的な地元志向をもちながら離れてしまう若者がいる。H、Kともに、あえて社会的つながりを遠ざけるように居住場所を選んでいることから、価値観の狭さ及び強要は北上町と若者の

⁴¹ 「石巻・川のビジターセンター」。元の月浜集落に建設された環境省管轄の施設で、三陸復興国立公園のビジターセンターとして、地域の自然を生かしたイベントの企画や自然体験及び地域の社会活動のための部屋の貸し出しを行っている。センターには、石巻観光協会所管の「北上観光物産交流センター」が併設されており、北上町の特産品を扱ったり、観光案内や休憩スペースが設けられている。

つながりにおける根本的な問題といえる。このことから、とくに家族内において価値観を強要しようとしないうる寛容さが求められるといえる。しかし、この問題は家庭内だけに改善を求めるには限界があり、地域ぐるみで考えていく必要がある。そこで4-3-2の最後で触れた、拠り所となる“居場所”の創出が求められると考える。この点について、以下のKの提案を援用したい。

Kの語り

「公務員にしろって言われ続けたことが嫌だったんだよね。もうちょっと見聞を深めてアドバイスしてほしいっていう思いがあった。あと子供たちも、私が仙台出てからいろんな価値観に触れ合うことができたから、早いうちからいろんな人と触れあう機会があった方がいいと思った。だから町を出ていろんな人と触れ合えば、いろんな価値観で物事を言えるようになるから、そういうのを作った方がいいかなって思う。たとえばボランティアでいろんな人が入ってきたからこそ、いろんな人と触れ合えたと思うの。だからそういうのがもっと今後でてくれば、人生もよりいろんな価値観のもとに充実できるかなって。」

彼女は自らの経験をもとに、多様な価値観に触れる機会の創出を提案していた。この提案は4-4で触れた「多様な価値観に触れる場の創出」に同じであり、いずれの社会的つながりも頼りにすることができなかったKにとっても必要とされていたことがわかる。自ら友人や地域の人のコミュニティになじめなかったと証言したHにも同様のことが指摘できる。Kにとって現在の居住地は「心地いい」と述べるが、彼女が語ってくれたような“いろんな価値観と触れ合う”機会があれば、地域の狭さに対する認識が変わり、早いうちに頼りにできる居場所が見つかったのかもしれない。改めて、多様な価値観に触れる場の必要性について示すとともに、子供たちの逃げ場、拠り所ともなるべき環境を意識的に整えていかなければならない現状を指摘したい。

なお、アンケートやインタビュー結果ではライフイベントによる経験の違いが、意識の違いを生むことを指摘してきた。例えば、アンケートの理想の居住地条件では、無職・家事専業で「通勤・通学が便利」「買い物しやすい」などの生活利便性が重視されていて、学生と意識の差異があったことや、地元志向では無職・家事専業で「不満」が高く、北上町に対する特別な感情が低い傾向にあることが分かった。インタビューでも、友人との話題のずれや、近所とのつながりに対する認識の変化、定位家族への執着度、伝統・風習に対する認識の変化などが明らかになった。こうした若者の“揺れ”は必然的で、仕方のないこととも捉えることができる。こうした、揺れている立場の若者の意見に耳を傾ける寛容さこそ必要であり、あらゆる形で“自分”が受け入れられ、認識される環境を整えていくべきである。

4-6. 東日本大震災の中の若者

北上町と若者のつながりを考えるうえで欠かせない要素が「東日本大震災」だった。これまでみてきたつながりの実態から、震災後の若者とその環境について整理していきたい。

まず、被災した若者が経験した居住移動について触れておきたい。アンケートでは、やむを得ない理由で実家ごと転出を余儀なくされた若者の存在が明らかになった。インタビューでは、その背景に家族、制度上の事情があったことが明らかになり、それぞれの家庭がその時々状況に合わせて最適な選択をしていることが分かった。しかし、その判断の過程で、対象者自身の意志が反映される余地が全くなかった若者の存在も明らかになった。自分の意志が居住選択に反映された M はつながりが充実していたことや、対して E や S が「家」の存在に未練を感じている事例を踏まえれば、制度上の事情やそれぞれの家族内の事情があるとはいえ、若者や子供の意志をくみ取り、尊重する環境があつて然るべきだったと考える。この点は 4-5 の居場所の創出に関する考察にも共通するだろう。

一方、震災が若者と地域のつながりにプラスの影響を与えている側面も明らかになった。例えば、M や P は友人とともに震災を乗り越えた意識をもっており、震災が友人・知人との意識上のつながりを強化したと考えられた。また、P は津波によって人が住んできた歴史が断ち切られることを懸念し、その証を残していく意義を強調した。震災が先祖とのつながりを意識するきっかけを与えたといえるだろう。また、先述したように、地域コミュニティの再編を受けて近所とのつながりの有難さを再認識している若者の存在も明らかになった。

このようなプラスの影響も踏まえ、現段階においては震災によって経験したことをポジティブに捉えようとしている若者が多い印象だった。とくに、実家が町外に転出した経験をもち、自身は関東圏に在住の R や S からそのような語りが目立った。

R の語り

「震災があったからこそ今の自分があるかな一って思うこともある。すごい貴重な体験というか、他の人には無い経験をして、それも自分の 1 つの要素になってるから悪いこととしては捉えていないです。いろんな人と会えたし、いろんな出会いもあったかな」

S の語り

「震災が無かったらお兄ちゃんと絡むとかなかっただろうし、全部がマイナスだったわけじゃないなって思ってる。学校にシャーペンしか持ってこれなくてちょっといじられて悲しい思いをしたりとか、っていうのも、私お母さんから『人から嫌なことをされたらその分人に優しくできるでしょ』ってずっと教えてもらってた。なんか震災を通してひねくれてた時期もあるけど、そういう風に思えるから全然ダメな経験ではなかったって思う」

「私にとっては 3 月 11 日の 14 時 46 分（東日本大震災発生時刻）ってすごいドキドキする時間なの。仙台に居た時もそうだけど、（仙台や関東では）その瞬間なんて 365 日分の

1 秒でしかないし、大変だったねって振り返るわけでもないし、東京の人は普通に働いてるし。だけど、出身地の話とかして『石巻です』って言うとしごく申し訳ない態度を取られる。でもその日（3 月 11 日）は普通に過ぎていく。寂しいなって思ってたけど、普通の生活が出来るようになることが復興、というか、いちいち原点に戻って悲しむことだけが復興じゃないなーとか思ったりした」

震災によって、思春期に感じた葛藤や複雑な思いは、様々な「出会い」や人とのつながりの中で、ポジティブなものに変化していったことが伺い知れる。ここでも他出経験が本人たちに良い影響を与えたといえるだろう。その他にも、自然災害を経験したのにも関わらず、アンケートの理想の居住地条件では「自然災害の危険性が少ない」を選択した回答者が少ないなど、震災が原因で若者の自然への認識がネガティブになることはなかった。若者たちはこの 8 年間で、震災という事実やそれに伴う感情、意識をセルフコントロールしてきたといえるだろう。ただし、インタビューの中では「思い出したくない部分もある」という趣旨の語りがあったり、調査依頼の段階で「思い出したくないから」として拒否した人もいた。アンケート結果では「思い出したくない」や「関わりたくない」と回答した人はごく少数であり、インタビュー対象者の中では震災の話題に対する拒否反応は見られなかった。しかし、今後はその少数の意見を注視し、フォローしていくことも求められる。

最後に、復興まちづくりに関する若者の意見を整理したい。まず、復興まちづくりについて疑問を呈した C は、復興まちづくりによって自然の美しい景観が害されている現状に否定的な意見をもっている。また、復興まちづくりによるものでなくても、A や B などからはスーパーなどができて景観や雰囲気が変わることは望まないとする発言があった。自然への愛着に起因する意見ということができ、その愛着の高さを示す意見でもある。しかし、一方で、復興まちづくりによって生活が便利になる側面を認め、肯定的に捉えている対象者もいた。アンケート結果では理想の居住地条件において、多くの若者が生活利便性に関する項目を重視していたため、インタビューでも復興まちづくりによる利便化を認める意見が出ることは理に適っている。したがって北上町出身の多くの若者がこうした変化をポジティブに捉えていると推測することができる。このように、復興まちづくりによる変化には若者たちにとって良い面と悪い面があることを明らかにした。

その良い面と悪い面の狭間で、複雑な感情を抱いている若者の例として象徴的なのが R の発言である。

R の語り

「無駄に発展してほしくはないなって思います。震災があって、開発とかが進んで、なんかショックっていうか、複雑な気持ちになった。あのままだ良かったなっても思うし、なんか（便利なように）もっとやった方がいいんだろうなとも思う。でも北上は北上だからなって。変わっても人は変わらないしな」

R は葛藤を抱えると同時に、「人」、つまり社会的つながりの不変性に触れた。この発言は、社会的つながりが、若者と北上町とのつながりに中心的役割を果たしていることを改めて示唆するものとなった。

以上より、若者と北上町とのつながりにおける“いつまでも変わらないもの”の重要性が示唆された。コミュニティの再編や景観の変化など、目まぐるしい変化を目の当たりにしてきた若者たちだからこそ、変わらないでほしいと願うものがあるのだろう。

4-7. 復興まちづくりのあり方ー地域と若者のつながりの視点からー

4-6 における“いつまでも変わらないもの”の重要性の指摘から、復興事業を進めるにあたっては変わるべきことと変わらないであるべきことを、町外在住者を含めた様々な立場から検討することが求められると考える。例えば、変わらないであるべきものとしては、先述した自然の景観や、神社、地域行事などがそれに該当する。また、先祖とのつながりにおいては、P が危機感を示したように先人が生きてきた証を残していく必要がある。先祖とのつながりは帰属意識に影響することが分かっており、とくに社会的つながり希薄な H にとっても大事なつながりであることが分かっている。何らかの形で土地の歴史、ルーツを残していく作業について検討すべきである。以上は、震災により若者の流出が加速した北上町で“つながり”を保つ上では必要不可欠なことであり、行政、住民、他出した住民、若者など多様な主体によって検討されるべき事項である。

また、社会的つながりは、地域と若者のつながりの形成過程においてだけでなく、震災後の若者と北上町をつなぐものとしても“いつまでも変わらないもの”であり、その重要性が示された。このことは今後、日本各地における防災集団移転促進事業を検討する際などに念頭にいれるべき視座である。総じて、本研究では、復興事業やまちづくりにおいて若者の意見を取り入れる必要性和その意義について示すことができた。今後の北上町および日本の“地方”において、若者とのつながりを育むまちづくりを検討する上で、本研究がその一助となれば幸いである。

5. 結論

本研究は、東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県石巻市北上町を対象とし、対象地出身の若者の量的・質的な意識調査から、①若者がどのように出身地域とつながっているか、②そのつながりを育むものは何か、さらに、③若者と地域のつながりにおける課題は何か、を明らかにし、地域と若者のつながりを維持・充実させるまちづくり及び復興まちづくりについて検討した。

まず、①若者がどのように出身地域とつながっているのか、その実態について明らかにした。分析結果より、北上町と若者のつながりは「居住」「具体的で直接的な関わり」「意識上のつながり」の3つのカタチがあると考えられ、そのつながりを媒介するものとして、友人・知人、近所コミュニティ、空間としての「家」、家督相続の「イエ」意識、家族、先祖、自然、歴史・文化、思い出が抽出された。若者たちはそれぞれを媒介に、あらゆるカタチで北上町とつながりをもっており、インタビューではその多様な実態を明らかにすることができた。本研究では、東日本大震災の被災により転出を余儀なくされた若者も対象にしているため、自然災害の被災地や条件不利地域における、従来の「つながり」の枠組みには収まらない「つながり」のあり方について新たな視座を提供することができた。

次に、②若者と地域のつながりを育むものについては、9つの媒体を介した若者と北上町の関係の形成要因を探ることによって明らかにした。そして、子どもや若者をとりまく環境について、家庭、教育機関、地域全体のレベルでそのあり方を提案した。とくに、他出経験など、多様な価値観に触れる機会の重要性や、家族および友人や近所とのつながりなど、人と人との社会的つながりの重要性を指摘することができた。これらは、北上町における現状を見直すきっかけになり、今後のまちづくりに視座を与えるものになるだろう。また、社会的つながりが希薄な対象者は北上町を遠ざけて居住地を選択していることや、子どもの頃の経験が結果的に居住意向に影響していることを踏まえれば、若者の移住・定住事業を促進するうえでは、いかに地域とのつながりを育むかという議論に焦点があてられるべきだと考える。

また、つながりの形成要因として震災が挙げられることもあり、友人・知人や先祖を介した北上町とのつながりにプラスの影響を与えた事例もあった。現段階においては震災によって経験したことをポジティブに捉えようとしている若者も多く、震災後の様々な人との出会いや経験が若者たちの意識を変化させる要因になったと考えることができる。

さらに、③若者と地域のつながりにおける課題では、つながりを媒介するものや育むものをいかに維持・保存・充実させるか、という視点で考察した。とくに、震災により若者の流出が加速した北上町で「つながり」を保つには、復興まちづくりのあり方が鍵となる。復興事業を進めるにあたっては、歴史・文化、先祖、自然、社会的つながりなどの“いつまでも変わらないもの”を熟慮することや、町外在住者なども含めた様々な視点から議論することの必要がある。また、社会的つながりは、地域と若者のつながりの形成過程においてだけでなく、震災後の若者と北上町をつなぐものとしても“いつまでも変わらないもの”であり、その重要性が示

された。このことは今後、日本各地における防災集団移転促進事業を検討する際などに念頭に
いれるべき視座である。

本研究では以上の3点に加え、北上町のまちづくりに貢献できる研究を目指した。対象者の
年齢層に限定はあるが、居住地や被災の程度、学区および集落などの面で、より幅広い属性の
若者を選定し、これまであまり反映されてこなかった北上町の“若者”の実態を表面化した。加
えて、本研究ではたびたび、若者の意識を反映させる機会や若者自身の存在が認識される居場
所の創出を、意識的に行っていく必要性についても言及した。本研究が、北上町に関わるあら
ゆる人々の目に行き届き、一人ひとりが若者とのつながりのあり方について考える材料となれ
ば幸いである。

なお、本研究では、アンケートとインタビューの両調査によって包括的な議論を目指したが、
アンケート調査の対象者数は信頼性のうえで十分ではなく、また、語りの分析も筆者単独で行
ったため、恣意的な解釈が含まれている可能性がある。恣意性を減らすため、分析方法の記述
や結果の提示に工夫を凝らしたが、対象者の選定の仕方や分析の段階から見直す必要があるだ
ろう。また、たびたび指摘してきたように、本研究では、北上町における地域行事や自然の身
近さなどの現状把握にはいたらなかった。現状と照らし合わせることができれば、より実践的
で具体的な提案が可能になるだろう。また、ライフイベントの経験によって地域への意識が変
化することや、イエ意識と自身の仕事ややりたいことの間で揺れている若者の存在が明らか
になっている。このことを踏まえれば、若者と地域のつながりは、より長期的な視点で段階的に
検証する必要がある。これらの課題も含め、本研究が今後の地域研究の発展の一助となれば幸
いである。

謝辞

本研究を進めるにあたり、指導教官の宮内泰介教授には、2 年間にわたって終始適切な助言を賜り、また、丁寧に指導して下さいました。心より感謝を申し上げます。また、地域科学研究室のメンバーには日常の議論を通じて多くの示唆を頂戴いたしました。そして、本研究の趣旨を理解し、快く協力して頂いた北上町の調査対象者の皆様に心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

参考文献

- 李永俊・石黒格著（2008）『青森県で生きる若者たち』弘前大学出版会
- 石黒格・李永俊・杉浦裕晃・山口恵子著（2012）『「東京」に出る若者たち－仕事・社会関係・地域間格差』ミネルヴァ書房，pp.1-17
- 乾彰夫・本田由紀・中村高康編著（2017）『危機のなかの若者たち 教育とキャリアに関する 5 年間の追跡調査』東京大学出版会
- 小田切徳美（2018）「関係人口という未来－背景・意義・政策」Governance 202：14-17
- 轡田竜蔵著（2017）『地方暮らしの幸福と若者』勁草書房
- 窪田玲奈（2012）「“地方の地方”における若者の「地元つながり」－夕張高校 OB・OG 調査を基に－」北海道大学大学院教育学研究院紀要 115：17-56
- 指出一正著（2016）『ぼくらは地方で幸せを見つける』ポプラ社
- 白石壮一郎・羽渕一代（2016）「条件不利地域普通科校の高卒後の移動と地元定着－青森県下北郡北通の同窓会調査から－」弘前大学人文学部人文社会論叢人文科学編 35：49-95
- 関口達也・林直樹・杉野弘明・寺田悠希（2017）「人々の「地元」に対する概念的・空間的認識の多様性－地域のまちづくりへの活用に向けた定量的解析－」農村計画学会誌 36(3):465-474
- 滝澤寛子・櫻井尚子（2018）「旧農村地域に住む向老期から前期高齢者の地域への愛着を測定する尺度の開発」社会医学研究 35(1):55-62
- 辻泉（2016）「第六章 地元志向の若者文化－地方と大都市の比較調査から」川崎賢一・浅野智彦編著『＜若者＞の溶解』勁草書房
- 藤田英典（1980）「進路選択のメカニズム」山村健・天野郁夫編著『青年期の進路選択 高学歴時代の自立の条件』有斐閣選書
- 増田寛也著（2014）『地方消滅－東京一極集中が招く人口急減』中公新書
- 三上直之（2016）「高校生が語る地域移動の志向－35 人のヒアリング結果から－」梶井祥子編著『若者の「地域」志向とソーシャル・キャピタル－道内高校生 1,755 人の意識調査から』中西出版
- 森岡清美・望月嵩著（1987）『新しい家族社会学（1.家族とは－2.家族の類型と分類）』培風館
- 森田哲夫・木暮美仁・塚田伸也・橋本隆・杉田浩（2013）「限界自治体の生活質と居住意向に関

する研究」社会技術研究論文集 10:86-95
吉川徹著（2001）『学歴社会のローカル・トラッカー地方からの大学進学』世界思想社

参考資料

朝日新聞「就職の地元志向，鮮明 『県外』初の5割割れ」（秋田県版 2015年5月14日朝刊 25面）
朝日新聞「学びを語る 東大特任教授（地域医療論）上昌弘さん 昔からある圧倒的な傾向」（2013年10月9日朝刊 32面）
石巻かほく「特集＞東日本大震災8年 石巻・二子団地，3町内会が住みよさ模索」（2019年3月11日朝刊）
石巻市北上地域まちづくり委員会，自治システム検討・準備分科会主催の北上町民アンケート（2019年3月実施の結果報告会より）
河北新報「“落ちない石”耐えた 石巻・釣石神社」（2011年4月10日朝刊）
河北新報「Q『女川 これからも住みたい』中学生9割『YES』復興通じ郷土愛育つ」（2018年8月17日朝刊）
河北新報「社説 移住定住促進 仙山連携で支援の強化を」（2019年12月13日朝刊 7面）
北上町史編さん委員会（2004）『北上町史（自然生活編）』北上町

参考 URL

石巻・川のビジターセンター <http://kawatouminovisitorcenter.jp/kawa/>（最終更新日：2020.1.1，参照日：2020.1.2）
石巻観光協会 HP <http://www.i-kanko.com/archives/879>（参照日：2020.1.2）
石巻市 HP「市のプロフィール＞市の概要＞石巻市はこんなまち」
<https://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10151000/1500/1500.html>（最終更新日：2019.8.26，参照日 2019.11.24）
石巻市 HP「市政情報＞統計情報＞人口・世帯数（最新版）」
<https://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10102000/00>（最終更新日：2019.12.5，参照日 2019.12.25）
石巻市 HP「市政情報＞総合計画＞基本構想・基本計画＞石巻市総合計画 2010 年基本計画＞第 3 編エリア別将来展望」<https://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10181000/3272/3-0.pdf>（最終更新日：2014.9.3，参照：2019.11.24）
石巻市 HP「市政情報＞統計情報＞統計書（第 5 章農林業 4.農林業センサス (1)農家数の推移）」
<https://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10102000/0040/3914/5-4-1-1703.pdf>（最終更新日：2019.3.29，参照日 2019.11.24）
石巻市 HP「市政情報＞統計情報＞統計書（第 6 章水産業 9.漁業センサス(1)漁業従事者世帯及び就業者数）」<https://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10102000/0040/3914/6-9-1-1603.xls>（最終更新日：2019.3.29，参照日：2019.11.24）

石巻市 HP「市民の方へ>くらしの安全・安心>安全・安心>『東日本大震災災害検証報告書』
(H24 年 3 月)>第 2 章災害状況の整理 02-2

https://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10106000/8284/21_2_02-2pdf.pdf(最終更新日:2017.12.19,
参照日:2019.11.25)

石巻市 HP「復興情報>東日本大震災関連情報>被災状況等>被災状況(人的被害)」

<https://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10106000/7253/20141016145443.html>(最終更新日:
2019.11.7, 参照日:2019.11.25)

石巻市 HP「復興情報>各種計画等>石巻市震災復興基本計画(H25 年 3 月石巻市)>第 1 章
震災による被災状況と復興への課題」

https://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10181000/7742/01_dai1syuu.pdf(最終更新日:2013.3.26,
参照日:2019.11.25)

石巻市 HP「市政情報>統計情報>統計書>第 3 章人口>2. 住民基本台帳による男女別人口及
び世帯数の推移」

<https://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10102000/0040/3914/20130301161659.html>(最終更新日:
2019.12.5, 参照日 2019.12.24)

石巻市 HP「市政情報>統計情報>統計書>第 3 章人口>4. 住民基本台帳による人口推移」>
1. 住所別・年齢別人口」

<https://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10102000/0040/3914/20130301161659.html>(最終更新日:
2019.12.5, 参照日 2019.12.24)

石巻市 HP「教育委員会>計画・施策・評価>石巻市立小学校災害復旧整備計画>被災した小・
中学校の移転新築事業>北上小学校移転新築工事の状況」

<https://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/20102000/5075/5078/8/20190711113426.html>(最終更新:
2019.10.4, 参照日:2019.12.24)

石巻市 HP「教育委員会>学校教育情報>小中学校児童生徒在籍者数」

<https://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/20101000/content/R1jidouseitosuu.pdf>(最終更新日:
2019.5.13, 参照日:2019.12.24)

石巻市 HP「市民の方へ>教育委員会>学校一覧>私立学校在籍者数一覧」

<https://www.city.ishinomaki.lg.jp/d0010/d0070/d0002/d0010/index.html>(最終更新日:2019.5.13,
参照日:2019.11.24)

石巻市 HP「市民の方へ>学ぶ・楽しむ・活動する>石巻市スポーツ推進委員について」

<https://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/20103000/2651/20180118152851.html>(最終更新日:
2018.3.23, 参照日 2020.1.6)

環境省 HP「“残したい日本の音風景 100 選”パンフレット」

https://www.env.go.jp/air/life/nihon_no_oto/02_2007oto100sen_Pamphlet.pdf(参照日 2019.12.24)

北上観光物産交流センター <http://www.i-kanko.com/archives/9314>(参照日:2020.1.2)

白浜ビーチパーク HP <https://www.shirahama-beach.com/>(最終更新日:2019 年 11 月 12 日, 参照
日 2019 年 11 月 12 日)

ツール・ド・東北 HP <https://tourdetohoku.yahoo.co.jp/>（最終更新日：2019年9月15日，参照日：2019年11月12日）

文部科学省 HP「白書・統計・出版物＞統計情報＞学校基本調査＞学校基本調査－結果の概要」
https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/1268046.htm（参照日：2019.12.24）

資料（アンケート調査票）

北上町出身の若者の特性と意識に関するアンケート

回答日（ 月 日）

※差し支えない範囲でお答えください。

1. あなた自身の基本情報についてお伺いします。

- 1 名前： _____ 2 性別：①男 ②女 （あてはまる数字に○をつけてください。）
- 3 年齢： _____ 歳 4 現住所： _____ 都・道・府・県 _____ 市・区・町・村
- 5 職業：①会社員 ②公務員 ③団体職員 ④専門的職業 ⑤自営業 ⑥パート・アルバイト ⑦学生
⑧無職・家事専業 ⑨その他 _____
- 6 現住所における同居人：□なし（一人暮らし） □父 □母 □祖父 □祖母 □兄弟・姉妹 □恋人
□配偶者 □娘・息子 □親戚 □その他 _____ ※複数回答可
- 7 出身学区：①相川 ②吉浜 ③橋浦 8 出身集落： _____ ※例：小室、立神、釜谷崎など
- 9 東日本大震災による北上町自宅の被災程度：①損壊なし ②一部損壊 ③半壊 ④大規模半壊 ⑤全壊
- 10 (9で②③④⑤のいずれかに回答した方のみお答えください。) その後、ご実家の自宅は修繕しましたか？
また、その後どうしましたか？あてはまる数字に○をつけてください。

①修繕していない	②修繕した
↓その後の状況について以下の選択肢からお選びください	↓その後の状況について以下の選択肢からお選びください
①修繕せず、新築もしていない ②修繕せず、新築した ③修繕せず、中古物件を購入・賃貸契約した ④その他： _____	①今も住み続けている ②修繕したが取り壊し、新築もしなかった ③修繕したが取り壊し、新築した ④修繕したが取り壊し、中古物件を購入・賃貸契約した ⑤その他： _____

- 11 ご親族のなかに震災で犠牲になった方はいらっしゃいますか？：①いない ②いる：続柄 _____
- 12 現在、兄弟・姉妹はいますか？：①いない ②いる： _____ 人 ※自分を含めた人数
→兄弟・姉妹の構成：□兄 □姉 □弟 □妹 ※複数回答可
- 13 現在でも連絡を取り合う北上町の友人・知人は何人ぐらいいますか？： _____ 人ぐらい（いない場合は0）
- 14 現在、自分が自由に使用できるお車はお持ちですか？：①はい ②いいえ
- 15 差し支えなければ、現在のあなた個人の年収について教えてください。（学生・無職の方は回答不要です。）
①100万円未満 ②100～200万円 ③200～300万円 ④300～500万円 ⑤500～700万円
⑥700～1000万円 ⑦1000万円以上 ⑧不明
- 16 (北上町内在住の方のみお答えください。) これまで、北上町外に住んだことがありますか？
①はい ②いいえ
- 17 (北上町外在住の方のみお答えください。) 今でも、北上町を訪れることがありますか？
①週に1回ほど訪れる ②月に1回ほど訪れる ③2～3か月に1回ほど訪れる ④半年に1回ほど訪れる
⑤年に1回ほど訪れる ⑥数年に1回ほど訪れる ⑦まったく訪れない
- 18 (17で①～⑥のどれかを選択した方のみお答えください。) 何を目的に訪れますか？（複数選択可）
□帰省 □友人・知人に会う □親戚に会う □祭やイベントに参加する □お墓参りなどの先祖供養
□神社にお参りする □買い物 □仕事 □景色・雰囲気をあじわう □その他： _____

裏面につづく

2. 北上町に対する考えについてお伺いします。

1 以下の項目についてどのくらいそう思いますか？あなたの気持ちにあてはまる数字に○をつけてください。

	とても 思う	やや 思う	どちらとも いえない	あまり 思わない	まったく 思わない
1) 北上町は住みやすい	5	4	3	2	1
2) 北上町出身であることを誇りに思う	5	4	3	2	1
3) 北上町出身の友人・知人とは 心が通じ合う感じがする	5	4	3	2	1
4) 北上町の一員としての実感がある	5	4	3	2	1
5) 北上町は落ち着く場所である	5	4	3	2	1
6) 北上町の雰囲気や土地柄が 気に入っている	5	4	3	2	1
7) 北上町は自分にとって かけがえのない大切な地域だ	5	4	3	2	1
8) 北上町のことをいろんな人に 知ってほしい	5	4	3	2	1
9) 北上町にいつまでも 変わってほしくないものがある	5	4	3	2	1
10) いつか（または、これからもずっと） 北上町に住みたい	5	4	3	2	1
11) 北上町における復興やまちづくり に関心がある	5	4	3	2	1
12) 北上町における復興やまちづくり に貢献したい	5	4	3	2	1
13) 北上町での出来事は思い出したくない、 思い出さないようにしている	5	4	3	2	1
14) 北上町には関わりたくない、 関わらないようにしている	5	4	3	2	1
15) 北上町に対して不満に思うことがある	5	4	3	2	1

3. 理想の居住地についてお伺いします。

1 あなたが思う理想の居住地条件は何ですか？（全5つまで選択可）

- ☐ 通勤・通学が便利 ☐ 雇用機会がある ☐ 公共交通機関が充実している ☐ 病院・福祉施設が充実している
☐ 自由に買い物しやすい場所 ☐ まちなみや家並みが良い ☐ 静か ☐ 自然環境に恵まれている
☐ 空気や水が衛生的である ☐ スポーツ・趣味活動が自由にできる ☐ 歴史や文化が興味深い
☐ 地域の活動（祭、イベントなど）が充実している ☐ 交通事故の危険性が少ない ☐ 犯罪の危険性が少ない
☐ 自然災害の危険性が少ない ☐ 家族が近くにいる ☐ 友人・知人が近くにいる ☐ 近所とのつながりが強い
☐ 教育環境・子育て環境が充実している ☐ あらゆる情報を入手しやすい ☐ 自分が生まれた場所がある
☐ 先祖の墓がある ☐ 思い出がある ☐ その他：_____ ☐ とくにない

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

回答のなかで、書き残したことや補足があれば自由に記入してください。

※今後の研究のため、お話を聞きすることがあるかもしれません。

差し支えなければ、連絡の取りやすいメールアドレスを教えてください。E-mail: _____